

ペテルスブルクの海軍武官・広瀬武夫

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

69

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

100

(発行年 / Year)

2023-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026525>

ペテルスブルクの海軍武官・広瀬武夫

宮 永 孝

はじめに

- 一 ロシア留学の途にのぼる
- 二 広瀬のロシア生活
- 三 カスピ海・黒海巡察の旅
- 四 英仏独、バルト海沿岸を視察
- 五 シベリア、満州をへて帰国
- 六 ロシアの東方侵略
- 七 日露交渉の破綻と日露戦争の勃発

八 旅順口閉塞作戦に参加

九 広瀬の壮烈なさいご

十 広瀬の人と思想

十一 広瀬のロシア研究の成果——その分析と概略

あとがき

広瀬武夫の略年表

(英文レジュメ) Abstract in English

はじめに

江戸の名ごり、明治・大正・昭和——戦前の東京の残滓ざんしも、新開発の波によって、こんにち残りすなくなった。東京はあたらしい街に生まれ変わろうとしている。江戸・明治の時代は、いまや遠い、遠い世界なのである。文明開化、震災、空襲、開発によって失ったものは、建物や遺蹟ばかりではない。じぶんが生きた時代を、むかしにさかのぼって語りうることができる、また語り残さねばならぬ、時代の貴い生き証人も、戦争や災禍によって数多うしなわれた。

明治や大正の時代を知る日本人は、もうほとんどいないし、昭和初期生まれの人は、いまや古老にちかい。筆者が少年のころ、まだ日露戦争の生きのこりはいた。が、戦地のことを話さなかった。青年になると、身のまわりに太平洋戦争を知る人がいっぱいいた。が、だんだん少なくなってきた。いまとなっては、そういう人たちから、戦時下の話をもっと聞いておくべきであった。

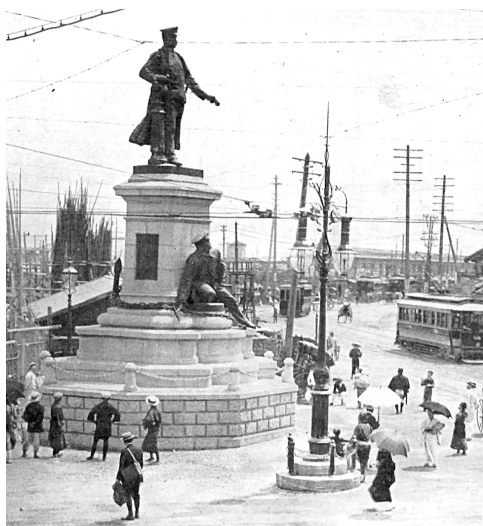
筆者が広瀬武夫の名を知ったのは、二十代のころである。古書店でたまたま手に取った濃紺の並製本が、島田謹二著『ロシアにおける広瀬武夫』（広文堂、昭和36）であった。それはかた苦しい研究書というより、小説風の手法で書かれたような本であった。中をひろげてみると、ところどころに書き込み（著者の寸評）があったから、どこかの大学で教科書として使ったものであろう。筆者は、著者の英文学の授業をとっていたから、あの先生はこんな本をかくのか、とふしぎに思った。この教師は月並みな教師とちがって、音吐朗朗と講談師のように熱っぽく、おもしろく、講義した。典雅なことばも卑俗なそれも、じつによく識っており、それを自由自在にあやつることばの魔術師のようであった。

この教師（外国語学校をへて東北帝大の英文科卒）は、たしかにえらい学者にちがいないが、人間的欠陥もあった。変に高ぶり、人をみくだすようなところがあった。自尊心がよほど高かったとみえる。じぶんを偉い人間と置いていたふしがある。人の家をさがし訪ねるとき、寄った店でわざわざT大教授の肩書をひけらかし、じぶんは……という者だが、と名のりをあげたらしい。よっぽどT大学が好きであったのだろう。講演においても、ふつう演者はじぶんのことを「私は……」というところ、「島田は……」という方をした。

新潮社の編集員であったK氏（故人）は、慶応でこの先生のロシアにおける広瀬武夫の講義を聞いた。K氏は、こわいろを使うのがうまかった。文士バーで、「そこで広瀬は、恋を——したのであります。……」といって、人をわらわせていた。もう何十年もまえの話である。筆者は授業のなかで、この先生から一度も広瀬の名を聞いたことはなかったが、くだんの広瀬の本が、おなじタイトルで朝日新聞社から、新装版として箱入りで再刊されたとき、サインをもらった。

筆者が差しだすペリカンの万年筆にぐっと力をこめると、一気に「宮永学兄に献ず」と書いた。ほかに何か歌のようなものを書きそえた。それは石上露子（二八八二—一九五九、明治期の歌人）が詠んだ歌であった。いまこの本は手元にはない。

何でもこの先生が広瀬という人物に興味をもつきっかけになった出来事は、昭和三十四年（一九六四）の秋の一日、東大図書館の書庫で雑書をあさっていたときのことである。ふとなにげなくひらいた一冊の書の遊び紙（余白のページ）に、「武夫」とある捺印をみたときである。広瀬という人は、ふつう海軍軍人として世間にまかり通っていた。が、同人の蔵書をみるうちに、この人物が単なる武人でないような気がした。その後、



広瀬中佐と杉野兵曹長の銅像（神田須田町）

広瀬について書かれた伝記、書簡集などを読むうちに、明治期のすぐれたロシア学者の一人とみることの重要性に気づいたらしい。このとき広瀬武夫という「親露家」が生まれたといえる。

この先生は、原稿を書いたり、口述筆記ができると、それを講義において用いた。そして成ったのが『ロシアにおける広瀬武夫』であった。

日露戦争後、広瀬は忠勇な武人、武士道のでほんとしてあがめられ、また神として祀^{まつ}られた。さらに部下の杉野兵曹長とともに銅像が建てられた。ところは、神田須田町の一角より、万世橋にむかう左側（現・千代田区神田須田町一―二五）である。両人の銅像は、明治四十三年（一九一〇）に建てられ、関東大震災、太平洋戦争にも崩壊せず、いきのこったが、戦後、GHQが進める非軍国主義政策のなか、昭和二十二年（一九四七）七月、東京都の判断で撤去された。……

筆者もまたおくれればせながら、亡き先師のあとをつぎ、広瀬について書くはめに陥った。が、もとより同人については、にわか勉強であり、本稿は筆のすさびに書いただけに、瑕^かが多い。先達のくり返し、新味のないものを書くわけにゆかぬから、テーマの設定、問題点の抽出がむずかしかった。文才にめぐまれ、筆力がともなえば、おもしろい、息のかよったものが書けようが、筆者にはそれがない。しかし、ペンを置くだんになつて、改めてじぶんの原稿を見直すと、人がすでに書いたもの以外に、多少は新しい知見が加わっていることを知った。それを見きわめるのは読者であろう（紀要をよむ人は、ほとんどいないが……）。

筆者はこれまで、左記のような一連の論考を発表した。

「日本人のみたロシア革命」『社会志林』第66巻第1号、二〇一九・七

「サント・ペテルスブルクの二葉亭四迷」『社会志林』第66巻第2号、二〇一九・九

「森 有礼のみた露都ペテルスブルク」『社会志林』第67巻第4号（二〇二一・三）

いずれも日本人とペテルスブルクとの関わりについて論じたものだが、さいごに残った

腹案は、ペテルスブルクにおける広瀬であった。ロシア心酔者としての広瀬を描くにあたって、何を問題とすべきか。軍人としての広瀬像はすでにいくつも刊行され、またロシア文学の趣味とその味わいについて語るには、材料がすくなくすぎるし、第一に筆者にはロシア語の知識がない。

ほかにロシアにおける広瀬の未開拓の分野をさぐったとき、思いうかんだのは、諜報員的大旅行者としての広瀬像である。その行程はじつに広範にわたる。それはカスピ海・黒海にはじまり、英仏独、バルト海沿岸、帰国時のシベリア・満州の視察におわるものである。文字どおり、中央ヨーロッパと極東アジアを縦横に踏破した感がある。

広瀬が外国の地理風俗、産業、軍事施設をどのように観、それをどう表現したか。かれの個人的冒険談の多くは、書簡のかたちで報告されたが、あるいみでそれは書簡文学を形づくっている。書き手の足跡、行動のあとをたどることによって、その人が外国や外国人をどう描いたかを知ることとは、比較文化・比較文学の研究分野でもある。広瀬が外国においておこなった軍事研究は、機密性ゆえに大きな壁があり、じゅうぶん踏み込んでも探索できず、上つらをながめただけのものであり、系統的なものではなかった。

筆者が本稿において意図したのは、ペテルスブルクにおける広瀬の公人・私人としての生活をタテ糸とし、武官としての生活（ロシアおよび各国の軍事施設の巡察、ロシア研究）をヨコ糸として物語をつくりあげ描くことであり、つぎの(一)から(四)までを副論題とすることであった。

- (一) 軍事調査の一環としての広瀬の視察旅行の意義。
- (二) ロシアの侵略政策と日本を取りまく国際情勢、日露戦争との関係。
- (三) 親露家、世界人として戦争の渦中にまき込まれてゆく広瀬とその死について。
- (四) 広瀬が海軍の機関誌に発表した論文（報告）の分析とその概略。

広瀬武夫が横須賀水雷団第二水雷艇隊長となったのは、明治二十九年（一八九六）四月のことであり、のち小砲艦「磐城」の航海長に転補し、翌明治三十年（一八九七）二月、同艦の分隊長をかねた。この年の三月九日をもって、かれは図らずも、海軍軍令部（旧日本海軍の中枢機関のひとつ。国防、作戦、用兵上の統帥事務をおこなったところ）に出仕の辞令をもらった。当人はこの辞令にこどろした。十四日、軍令部謀報課課員に補せられた。かれは軍令部在勤中の秋山真之大尉（一八六八～一九一八、明治・大正期の海軍軍人。対馬沖での日露会戦のときの連合艦



広瀬武夫

隊の作戦参謀に勧められ、麻布かすみ町の上村翁輔大尉の留守宅に、老婆ひとり雇い、同居生活をはじめた。

広瀬にとっては、はじめての陸上生活である。いわば河童が陸にあがって新しい生活をはじめたようなものであった。軍令部での仕事は、調べものなど机のしごとが主なものであり、馴れぬしごとについてとうとう眠気をもよおすことが多かった。かすみ町の下宿へは、フトンなどをもたず、毛布一枚もってころがり込んだが、三月中旬は寒気がきびしいときがあり、がまんできずとうとう夜具を借りることにした。

一 ロシア留学の途にのぼる

この年は矢つぎ早に命がくだり、六月二十六日軍令部よりロシア留学を命じられた。ロシア留学は海軍の実力者山本権兵衛軍務局長（一八五二～一九三三、明治・大正期の海軍軍人、政治家。のち海相、首相）の抜てきによるものらしい。広瀬にとっては軍令部出仕の命についての二度目のうれしい知らせであった。滞露期限五、六年とふんだが、じっさいは足しかけ四年半であった。留学中の学費は、年額二五〇〇円である。

明治三十年水無月二十あまり六日の昼、露西亞留学と云へる忝なき命を惶みぬ（黒革の手帖）

外国で暮らすとなると、しょっちゅう日本食を口にすることができぬと思い、出発まで役所の弁当なども、すべて日本流（和食）を命じた。

あつい盛りの八月七日——広瀬は、新橋を出立し、横浜へむかった。東京を出発するときは、大勢の知友がつぎつぎとやって来て見送ってくれたが、横浜に着くとさらにその数はふえた。同日、西村方で一泊したが、出発日の八月八日

——埠頭には、知友、友人、横須賀からやって来た士官仲間、母校の攻玉社からも校長と生徒代表三名が見送りに来てくれた。

広瀬が乗り込む船は、フランス郵船の「yuラジー」(Salasie)号である。当時、横浜など主要港に入港した船、出帆した船の“船舶ニュース”を邦字紙も報じていた。が、乗船者・広瀬の名が出てくるのは、『ザ・ジャパン・ウィークリ・メール』紙（一八九七・八・一四付）だけである。同紙の「出発した乗客」(Passengers-Departed)は、左記の人びとであり、

上海の呉淞^{ウスワン}までは、特別二等船室^{キャビン}（ツーリストクラスの上）であったことがわかる。

左記にしるすのは、乗客名であるが、判読できないものや抜けているものもある。

DEPARTED.

Per French steamer *Salasie*, for Shanghai and Kobe:—Mr. and Mrs. G. Williams, Mrs. M. M. Kulm, Miss R. A. E. Kulm, Mr. M. M. Marshall, Mr. J. F. Duff, Mr. Th. Davenport, Mr. H. R. Hearson, Mr. and Mrs. Kiene, Mr. Sharples, Mrs. P. Hoffmann, Mr. W. F. Bornemann, Mr. Th. Williams, Mrs. Peilmann, Mr. Tong Ping Chien, Mr. M. Chian, Mr. Kinn Cheong, Mr. Felipe S. Mesa, Mr. G. M. Apcar, Mr. Uttonmall, Mr. and Mrs. Chabrier, Miss Clement Bonneau, Messrs. D. W. Andrews, M. Thradeim, Hayashi, Hirose, Murakami, Ang. Beaux, Th. Kuri, T. Harnki, F. Bonnet, and Le Gonidec, Gonnemelon in cabin; 5 in steerage.

G・ウィリヤムズ夫妻 M・M・クルム R・A・E・クルム嬢 M・M・マーシャル氏
J・F・ダフ氏 トムス・ダヴェンポート氏 H・R・ヒアソン キーン夫妻 シャーブルズ
氏 P・ホフマン夫人 W・F・ボーンネマン氏 トマス・ウィリアムズ氏 ペイルマン夫人
トン・ピング・シェン M・チアン氏 キム・チェオング氏 フィーリーペイ・S・メイサー
氏 G・M・アピア氏 ……モール氏 シャブリエ夫妻 クレマン・ボーノ嬢 D・W・アン
ドルーズ M・スラディム 林 広瀬 村上 オーギュスト・ボー ……キニ（呉のあやま
り）T・春木 F・ボネル・グニデック グメロンの諸氏（特別二等船室）。五名は三等船
室。

このフランスの蒸気船には、欧米人の夫妻、单身旅行者、中国人など大勢のついていたが、日本人乗客は、広瀬以外はつぎの人びとである。

文部省留学生

呉^{くれ} 秀三^{しゅうぞう}（一八六五—一九三二、明治から昭和期の精神病学者、医史学者。のち東大教授と松沢病院長をかねた。出国時、東大助教）
春木法学士

林、村上両大尉（海軍留学生）

山本生（私費留学生）

注・同人については、「船舶ニュース」に名前がない。

ともあれ、広瀬らをのせたサラジー号は、明治三十年八月八日の午前八時半、ともづなを解き、八重の潮路についた。このとき広瀬は漢詩をよんだ（読みくだし文のみを掲げる）。

千辛万苦するも頭を回らさず

男子はただ知る 家国（家邦——国家の意）に酬ゆるを

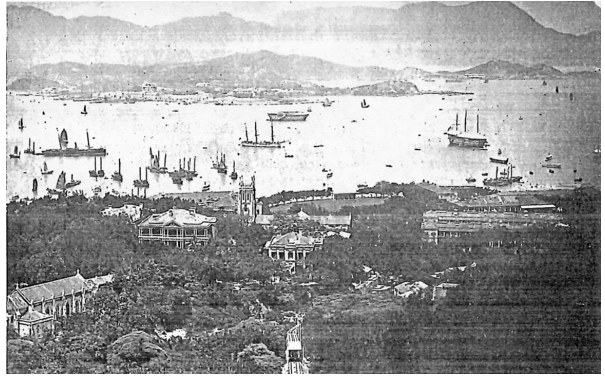
畢竟するに前途の春は海に似たり

悠然として（ゆったりとした気持で）笑いつつオロシアに向かう

神戸に着いたのは、翌九日の夕刻七時すぎのことである。このあたりの友人四、五人とともに、宇治川の「常盤」で終夜、酒のみ、かたり明かした。翌十日、船にもどると出帆し、瀬戸内を航し、門司の瀬戸もすぎ、十一日をむかえ、壱岐島（玄界灘の台地状の島）をあとに見るころには、海も荒れてきた。

船の動揺がはじまると、船客の多くは船酔いにくるしむようになった。とくに上海に着く前日は、大風が吹いたあとであり、海上は不穏であった。しかし、広瀬・林・村上は長の月日、艦の生活になれていたから平気であった。

十三日、サラジー号が呉淞（上海市北部——上海の北二〇キロ、黄浦江河口の左岸に位置）に近づくにつれて、海水は汚だくの色をおびてきた。揚子江の河水が泥といっしょに海に流れこむからである。やがて河口に到着すると、錨を投じた。ここで広瀬らはフランス郵船の豪華船「エルネスト・シモン」号に乗りかえた。正午に陸に上がり、船で黄浦江を通り上海にむかった。上海までは一時ほどの船旅である。音に名高い上海港のにぎやかさ、大小の舟の多さ、人が多いことに圧倒されただろうが、折から碇泊中の軍艦・筑紫、大島の海軍の同僚と会い、話に興じた。上海は、城外に英仏米などの租界（外国人の居留地。警察権・行政権をもつ）があることでも知られているが、街で目にしたのは、白人が誇



空中ケーブルからみた香港湾

りたく貴人顔をし、さまばらい（行く手の通行人を退かせること）をし、人力車に乗ることであった。十四日、船は三十時間以上もおくれて出帆した。シモン号は、宏壮美麗をもって知られた豪華船である。客あしらいもなれたもので、出される食事も満足できるものであった。呉淞を出帆して四日目——十八日の朝、船は香港に着いた。船は岸から四キロほどのところに停泊したであろう。

香港は中国の広東省南端部にあるイギリスの直轄植民地。英領である。イギリスの中国、東南アジアにたいする戦略、通商の拠点であった。広瀬の目には、ここは東海の大門関（もんかん）に写った。貿易がさかんであり、陸には砲台をようし、ジャンクや艦が湾を圧していることであった。

香港には、朝ついたので『びくとりや』山に上り、又街々などそろに歩みて、夕食船に（もち）戻りぬ」

（「黒革の手帖」）という。広瀬のいう「びくとりや山」とは、香港島にある急勾配の最高峰・扯旗山（シヤイサイサン）

（ビクトリア山——五五一メートル）のことである。Victoria Peak の異称もある。山のふもとから頂

上まで Cable tramway（架空索道——空中ケーブル）がある。途中に何カ所か駅があり、降りることが

できる。このケーブルウェイ（索道）が開通したのは、一八八八年（明治21）のことであった。⁽¹⁾

この日、丸一日、広瀬は下船すると、なすこともなく、ビクトリア山の頂上にまずのぼり、香港の街を俯瞰し、その後人声や物音でさわがしい街中を見物したのち、帰船したのであろう。

船が出帆したのは、同日の夕刻のことか。この日から三度夜をかさね、サイゴン川に入ったのは、二十一日の朝のことである。船はドンナイ川河口より八〇キロ上流まで四時間ほどさか昇って、サイゴン川右岸に着いたのは昼ごろのことか。一八五九年（安政6）フランスは、サイゴン（ベトナム南部）を占領し、植民地経営の中心とした。ここも上海や香港とおなじであり、情けないことに、東洋人の武威がいつこうに揚らぬ所であった。腹だたしいのは、街中にみるフランスの三色旗であり、白人が我がものがおにふるまっていることであった。

広瀬はフランス風の市街区にある植物園を見学し、夜は繁華街のカティナ通りを歩いたりして、日が沈むころ帰船した。それにしても当地は暑いところである。サイゴンは、横浜を出てヨーロッパにいく途中で、もっともあつい所という。⁽²⁾寝ぐるしい一夜を船中ですごした。翌二十二日の朝、船は出帆するとサイゴン川をくだりはじめ、つぎの寄港地シンガポールをめざした。早朝のことであり、暑気はそれほどきびしくなく、洋上

に出て波はおだやかであった。シンガポール（マレー半島南端の島）に着いたのは二十四日の朝である。港には香港とおなじように大小の商船や軍艦、地元住民の小舟^{サンパン}などもやってきたであろう。いまとはちがって当時は、汚濁^{おだく}の港であった。ここでは船は岸に着くが、石炭の搬入をおこなうため、その粉のため、すべてのものがよごれる。

シンガポールは十九世紀以来、イギリスの海峡植民地であった。いわば東洋への出入口であった。街に活気があるのはよいが、ここもイギリス領だとおもうと情けない気がした。だれか東洋人の武威を揚げ、太平洋に覇をとえ、いつの日かシンガポールの岸上に日章旗をひるがえしてもいいと広瀬はおもひ、漢詩をよんだ。かれの願ひは、太平洋戦争中の昭和十七年（一九四二）二月、成就した。なぜなら、当地は日本軍によって占領され、日章旗の掲揚が現実のものになったからである。広瀬が嘆息して約五〇年後のことである。

シンガポールで、呉 秀三と山本生が下船した。二人はこれからジャワ（インドネシアの主島。スマトラ島の南東に隣接。当時、オランダ領）に渡り、あとでフランス郵船で渡欧の途にのぼるつもりだと語った。

やがて船はシンガポールを出帆したが、それはいつのことか。インド洋はさすがに波が高く、うねりが長かったが、悪天候ではなかった。セイロン島（現・スリランカ）のコロンボに着いたのは二十九日のことである。船から堂々とした防波堤を見、港の南のはしにあるさん橋³に上陸し、しばし市街見物をした。街頭のいたる所に銭をこう者が多い。かれらは仏^はのめぐみをうけていない人々である。

市内にはシンハリ人が多く住み、十八世紀にオランダ人が建てたという教会や仏教やヒンズー、イスラム教徒らの寺院がある。広瀬は「^{しゃく}釈尊（しゃく）の寺など詣^もでたれど……」といっているが、ありがたい気持にはなれなかった。ただなさない気持になっただけである。広瀬が訪れたという仏教寺院は、「ダラダマリガワ寺院」*Dalada Maligawa Temple*（俗に「^は歯の寺院」）であろう。この寺院は、堂々とした建物ではなかったが、⁴セイロンでもっとも美しい寺院の一つであった。広瀬は釈迦の歯骨や髪を葬むる寺を参詣したあと、参拝者名簿をみていたら、たまたま兄・勝比古（海軍士官）の筆跡をみてゆかいな気持になった。

ともあれ、当地において一夜の暑さをしのぎ、さらに航海をつづけ、コロンボを出帆して五日目の九月二日——インドのボンベイ（アラビア海にのぞむ南北に細長い小島「長さ一八キロ、はば五キロ」。インド最大の貿易港）に着いた。船はドックの中に入った。が、無数の船のエントツから黒煙^{くろえん}がのぼっていた。当時の人口は八〇万、棉花の輸出がさかんである。

ボンベイでは日本領事の世話になり、馬車で市街見物をした。「パーシー人の埋葬地」に至ったが、政庁^マからの許可書が届かなかったので見物できなかった。

「パーシー人の埋葬地」とは、マラバルの丘にある「沈黙の塔」 ^{Towers of Silence}のことである。そこに白い円筒形の建物が五つほどあり、パーシー人（ペルシャからインドに逃れたゾロアスター教徒の子孫）が亡くなると、死体をそこに運び、鳥葬にする。この死体置き場の上空では大きな禿げタカがたくさん舞っていた。同所を見学するには、ホーンビー街にある教団 Parsi Panchayat の幹事の許可が必要であった。⁽⁵⁾ 領事と広瀬は、塔のそばまでやってきたが、けっきょく中に入れなかった。ちなみに、森鷗外の短篇に「沈黙の塔」と題するものがある。それは大逆事件のあとに執筆したものだが、冒頭においてこの墓所にふれている。

同夕、広瀬は領事から手あつい夕食をふるまわれた。夜は船にもどり、またもや寝ぐるしい思いをした。

翌三日の午後、船はドックを出ると、つぎの寄港地アデンをめざした。アデンは紅海の入口ちかくにあり、地中海とインド洋をむすぶ重要な航路の寄港地である。かつてのイギリスの直轄植民地である。アラビア海はおだやかでなく、二、三日というものは船はゆれっぱなしであった。ボンベイを出帆して五日目の八日の夜、船はアデン（南イエメンの首都）の港についた。ここもまたアジア人の土地ではなく、くやしい思いをした。やがてアデンをすぎ、十二日の夕方、スエズ（エジプト——カイロの東一〇〇キロ、スエズ運河の南の入口）に着いた。ここはスエズ運河の入口である。翌十三日の朝、運河をのぼりはじめ、同日の夜十時、ポートサイド（エジプト北東部——カイロの北東一八〇キロ。スエズ運河の地中海側入口）に錨を投じた。

十四日の午後四時ごろ、船は抜錨すると、地中海をすすみ、甲板の右舷にクレタ島、シシリー島、サルディニア島、コルシカ島などをながめてすごし、四日ほど経って九月十八日のあけがた、地中海に面する最大港マルセーユ（フランス南東部——パリの南島七七〇キロ）の港に到着した。横浜からの路のり、一万五三三マイル。楫^{かじ}まくら（船の旅）四十一日である。ここに八重の潮路の旅をおえ、これから陸路ヨーロッパの旅がはじまるのである。これより村上大尉はフランスに、林大尉はドイツに留学するのである。広瀬はフランスに着いてみて、事情に通じず、ことばがわからず、まごつくことが多かった。ともあれマルセーユで一泊することなく、その日のうちに村上大尉と駅舎からパリ行の夜行にのった。パリまではかなりの長旅である。

パリにむかう急行列車（一等のみ）は、午前九時と午後の七時五十五分の二本あるらしい。これは寝台車付の汽車であり、午後八時ごろ乗ると、翌日の午前九時にパリに着く。明治三〇年代の料金は、96フラン65サンチームという。⁽⁶⁾

十九日の午前九時ごろ、広瀬をのせた列車は、パリのリヨン駅についた。広瀬はパリで二泊した。着いた日に、日本公使館にあいさつに行き、海軍の先輩らと会ったのち、市内見物にひきまわされた。同夜、海軍武官・伊東義五郎大佐の宅に招待された。夫人はフランス人であり、名をマリイといった。夫人はみずから料理の材を買いもとめに出かけ、夫妻の子どもに日本語をおしえている日本婦人が和食をつくってもてなしてくれた。久しぶりの日本食に舌づつみをうった。

二十一日の晩、村上大尉と別れ、北駅より夜汽車にのりベルリンにむかった。ベルリンに着いたのは、翌日の晩、ドイツ帝国の首都で二泊した。日本公使館にあいさつに出むき、そこで海軍の知己と会い、また春江夫人の姉むこ（山形）の歓待をうけた。公使館では、日本料理や日本酒のもてなしをうけ、山形の下宿ではウナギのかばやきをごちそうになった。これは望外のよろこびであった。

二十四日、広瀬はこの日、ロシアにむけてベルリンを立った。かれはこの駅から出発したのか。おそらく、フリードリヒ・シュトラッセ Friedrich-Strasse 駅からであろう。見送る者は、海軍の知己に加えて、山形や折からドイツ留学中の林大尉らであった。広瀬がのった汽車は、ペテルスブルクを指して、つぎのルートをとったものであろう。

ベルリン——フランクフルト・アン・デア・オーデル——ポゼン（ポーランド中西部）——イノプロラフ（ポーランド中北部）——トルン——アランシュタイン（ポーランド北東部）——コルシエン——インスターブルク——アイトキューネン（ロシアとドイツ国境の村、ヴィルバレンともいう）——ここで荷物とパスポート検査をうけ、ロシアの汽車に乗りかえたものであろう。

アイトキューネン——ヴィルノ（ビルナともいう。リトアニアの首都）——コウノ——デュナブルク——プスコフルガー——ガトチナ（ペテルスブルクの南西四六キロ）——ワルシャワ駅（ペテルスブルク）。

最終目的地のペテルスブルクに着いたのは、九月二十六日（ロシア暦十四日）の午前十時ごろであった。ワルシャワ駅（いまは使用されていない、市場）に出迎えたのは、八代六郎少佐と飯田生であった。その後、広瀬は八代の下宿（プーシキンスカヤ街十一番地）にむかった。八代は同番地の六階建の建物の三階に、部屋をかり、老婢ひとりとメイドを二人やっていた。⁽⁷⁾ 広瀬が旅装をといいたのは、八代の下宿であった。

二 広瀬のロシア生活

午後、広瀬は八代少佐とともに徒歩で日本公使館を訪ねた。林公使と国分寺書記官は不在であったが、他はみないた。当時の日本公使館は、コンノ・グヴァルデイスキー大通りにあった (Baedeker: Russia p.93)。そこに在勤する者の構成は、つぎのようになっていた。

公使 林 董^{たけふさ}

注・林公使は明治32年（一八九九）9、急きょ帰国のちイギリス公使に転任。のちペテルスブルクの公使として、アメリカ公使から転じた小村寿太郎、珍田捨巳が着任。

一等書記官 本野^{もと}一郎

〃 杉村□□

書記官 国府寺新作

〃 飯島亀太郎

外交官試補 落合謙太郎（法科大学出身）

通訳官 川上^{かみがわ}俊彦（外国語学校ロシア語科出身）

通訳生 田野^{ゆたか} 豊（外国語学校ロシア語科出身）

書 生 飯田□□

公使館付陸軍武官

内山小二郎（砲兵中佐）

伊東圭一（少佐、肺病によりペテルブルクの病院で死去）

村田 淳（大佐、伊東少佐の後任）

藤室松次郎（少佐）

公使館付海軍武官（監督官）

八代六郎（海軍少佐）

注・明治32年（一八九九）4・23、帰国の途につく。



八代少佐、のち戦艦・浅間の艦長

また日露開戦時、ペテルスブルクから撤退すべき、外交官の氏名は左記のとおりである。

公使 栗野慎一郎
一等書記官 秋月左都夫

二等書記官 日下部三九郎
〃 丸毛直利
三等書記官 小田徳五郎
外交官補 田野 豊
公使館付武官 明石元二郎
陸軍歩兵大佐

野元綱明（海軍中佐）

注・明治32年（一八九九）4・20、帰国の途につく。

注・明治32年（一八九九）3・8、露都につく。明治34年（一九〇二）6・14、帰国の途につく。後任に

酒井忠利大佐が着任。

酒井忠利（海軍大佐）

留学生 広瀬武夫（海軍大尉）

注・明治30年（一八九七）9・26、露都につく。明治35年（一九〇二）1・16、帰国の途につく。

田中義一（陸軍大尉、陸軍大学校教官）

注・明治31年（一八九八）8・6、露都につく。

加藤寛治（海軍大尉）

注・明治32年（一八九九）7・29、露都につく。のち駐在員となる。

黒井（不詳）、明治34年（一九〇二）ごろ、露都に居住か。

同夜、本野一等書記官の宅に招かれ、牛なべなどの日本料理をこちそうになり、夜十二時ごろ帰宅した。

翌二十七日は、雨がふった。広瀬は終日、八代と話をした。夕方、ちょっと公使館を訪れたのち、すぐ帰宅した。二十八日、八代少佐とともに公使館に、落合外交官試補をたずね、三人いっしょにロシア語教師宅を訪問した。

ロシア語を教える先生の父は、六十五歳の好こう爺や、娘やまごといっしょに暮らしていた。この老人には、娘が三人あった。

長女……不詳。

次女……フランス語と音楽の教師。三十三歳。

三女……ロシア語の教師。二十九歳。名はスペランスカヤ。

孫娘……ロシア語の教師。二十三歳。長女のむすめ。

当時、この一家からロシア語を学ぶ日本人は、広瀬をふくめて四人いた。この日、広瀬ら三人が訪れたのは、かれの語学教授を依頼するためであった。のち広瀬は銀行にいき、為替を現金化した。午後、公使館をおとずれ、兄・勝比古の手紙をうけとった。

二十九日（ロシア暦十七日）、晴くもり。この日、広瀬は八代の部屋を出ると、おなじ建物の六階の四〇号室（屋根うらべや）に移った。外国ぐらしでいちばんこまるのは、第一にことばである。ことに現地のことばができぬと、身動きがとれない。この日の十時半から十一時半まで、三女（二十九歳）について、ロシア語の授業をうけた。が、ロシア語はむずかしく、なかなか頭に入らない。

ロシア語の先生は、熱心で誠実な女性であり、一生懸命おしえてくれる。日に一時間の約束が、いつも一時間半もやってくれた。語学は実地練習が肝要といい、夜間来訪せよ、としきりにいうから、訪ねてみると、一家をあげて歓待してくれる。食事の前後、間断なく教科書をのぞくのだが、頑固な頭にはロシア語はうけつけてくれず、じつに弱った。

三十日、半晴。洋紙とインキを買った。この日、広瀬は日記にしるした。「語学ノ困難ヲ覚おぼユ」（「黒革の手帖」）、と。

露都で三日もくれば、あるていど生活環境がわかる。時候は秋だが、当地は初冬といってもよい。毎日がどんよりとした空であり、青空をみることがなく、気もふさぐ。日を経るごとにだんだんわかってきた。ロシアは単調無味の国だということが。十月も末になると、もう相当に寒い。日本なら行楽の秋の時節である。

広瀬の日常は、――起きる、食う、習う、語る、あるく、寝るをくり返すだけである。いちばんまいるのは、一にロシア語、二にふところがさみしいことである。

食事は八代少佐のところで摂った。当地は二食制である。ロシア人は、朝茶をのみ、かんたんなものを口に入れるだけである。ところが広瀬は健たん家であった。朝、パンをたらふく胃に詰め込んだ。まかないの老婆は、気をきかせて、二日に一度はかならず米飯をだしてくれるから、満足このうえない。しかし、トーフのみそ汁が欲しくなる。

一八二〇年ごろ、ロシア人は習慣的に食事をとらなかったという。かれらはニンニク、タマネギ、キウリが好物であり、それを生でたべる。朝いちばんにやることは、胃によいということ、ニンニクの根をたべることである。腹がへると、通りの屋台へ行ってそこで腹をみたす。⁽⁸⁾

当地の物価は高い。ロシアは国産品を保護するために、輸入品に重税を課している。だから衣服などは、ドイツやフランスよりも六、七割も高い。国産品は粗悪なものが多い。寒気がますと、毛皮の外とうが必要になる。それをあつらえると、四、五百円ぐらひはする。一年に二五〇円の給費金の何分の一かがいっぺんにふっ飛んでしまう。特選の栄をにない「唯学べ」^{ただまな}との命をうけてロシアに赴任したからには氣力をふるい起し、その任をまっとうせねばならない。

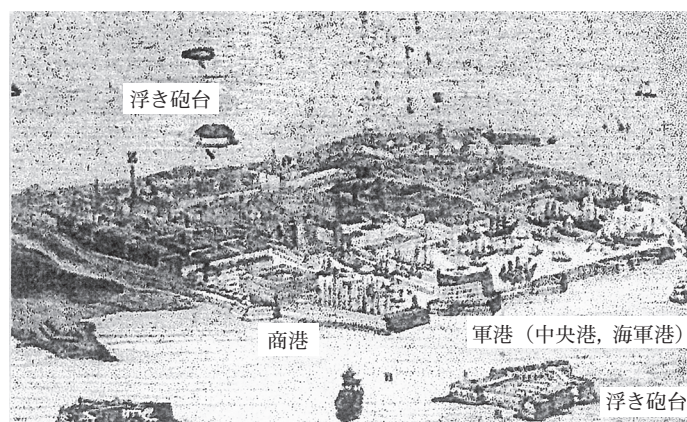
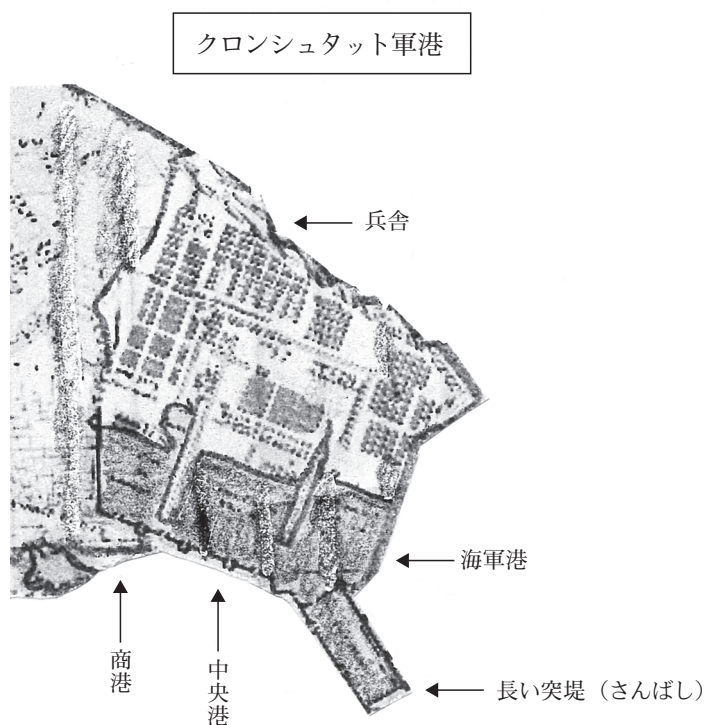
ペテルスブルクの生活が二ヵ月になるころ、寒気が一段とまし、運河も凍り、雪や雨がふるようになった。雪は綿^{わた}のようなものでなく、球状にこおったあられのようなものらしい。⁽⁹⁾ 空はくらく、毎日がうっとうしい。朝八時には、明りが必要であり、午後は三時ごろから灯火をかりないと、読書もできない。日本食が恋しいあまり、先月ベルリンにいる山形兄^{やまがた}に依頼し、ミソのカン詰やしょうゆを送ってもらった。さっそくミソ汁や牛なべなどを試み、レモンミソなどを作ってみた。また八代少佐の所に、日本人九人を招き会食したが、そのときサツマ汁（ブタ肉や鶏肉にニンジン、大根、サトイモ又はじゃがいもを入れて、ミソ汁などで煮込んだもの）を作って出したら、皆大いに喜んでくれ、主客らのかっさいを浴びた。ただ欲をいえば、いちばん欲しいのはトーフである。

十月の気候は、雪――くもり――晴――雨――のくり返しである。故国にいる知人や友人に手紙をだすのがいそがしかった。この間、変ったこ

といえ、陸軍武官・内山中佐のもてなしを受けたたり（10・6）、公使館で月俸の為替をうけとったり（10・9）、ロシア語の教師に誘われてマ
 ルコフ墓地やクレイポスチーニの墓地を見学したことである（10・7／10・31）。

十一月二日、島（不詳）やロシア語の教師といっしょに「ヤーゼルキー」（不詳）に遊んだ。三日、天長節（天皇誕生日）につき、公使館で祝
 宴があった。十二月、兄・勝比古は少佐に、八代は中佐に昇進した。十二月一日、イギリス在留の兄が内田大佐、桜大主計といっしょにペテルス
 ブルクの軍事施設を視察するためにやって来た。広瀬は兄と夜を徹して語りあった。一行は六日の夜当地を立った。

イギリスからの来客が視察したクロンシュタット軍港とは、どんな所であったのか。すこしそれについてふれておこう。軍港は俗に「ネズミの
 島」ともいわれるコトリン島にあった。ペテルスブルクから二〇キロほど隔てたところにある。そこに行くには、露都から小型の蒸気船で行くし



クロンシュタットの町
 手前左から「商港」「中央港」「海軍港」

かない。渡し場は何箇所もあった。

ヴァシリイ・オストロフ（ニコラス橋の真下）

オラニエンボウム（一日十一回でる。所要時間30分。料金は一九一〇年代15コペイカ）

リシノス（一日七回でる。所要時間30分。料金15コペイカ）

ノヴァヤ・デレブnya（日に何回出るか不明。所要時間一時間半。料金65コペイカ）

どの渡し舟もコトリン島の東の端——海に突きでた長いさんばしに着く（“サンクトペテルスブルク門”）。そこからは港やとりでがよくみえる。町は商業区と海軍区に分かれる。コトリン島の大きさは、長さ7 $\frac{1}{4}$ マイル、はば1 $\frac{1}{4}$ マイルである。要塞の原形は、一七〇三年（元禄16）につくられ、のちニコライ一世、トドレベン伯らによって補強された（一八五六―七一）。

海軍区には、つぎのような施設がある。

海軍本部（一七八五年キャサリン二世の治世下につくられた）

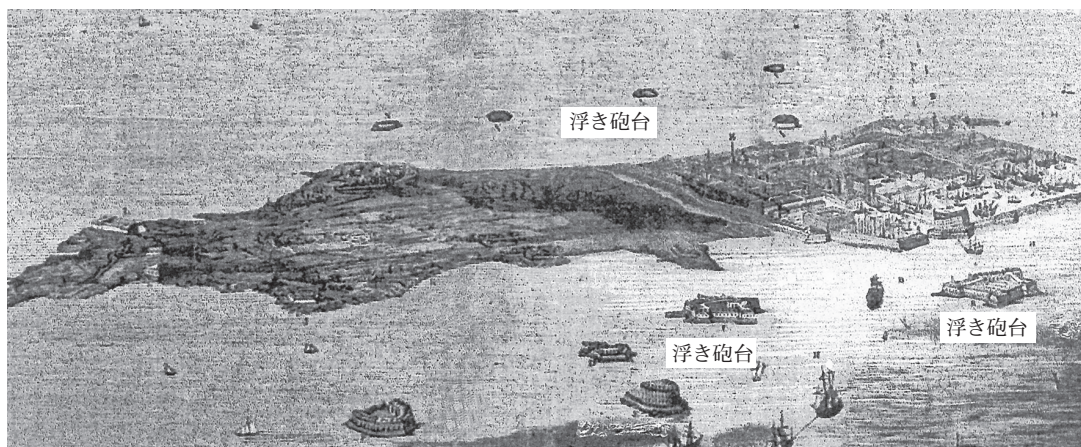
海軍機関学校

海軍病院（ペテルスブルクから島に近づく、右手にみえる）

各種の兵舎、火薬・弾薬庫、倉庫（錨、索具、ロープ、タールなどを収める）、造兵廠（兵器工場）、造船所

クロンシュタットは要塞の町であるが、一九一四年（大正3）ごろの人口は、六万五〇〇〇、バルチック艦隊の基地であった。艦隊はドックの外に停泊する。⁽¹⁰⁾島のまわりには、十四ほどの“浮き砲台”（海上に浮ぶ砲台）がある。

軍港として使われていたのは、三つの港のうち二つ。北東の海軍港とすぐとなりの中央港（艦の艀装などを行うところ）である。中央港のとなり（西のはし）が商業港であり、三つの港のうち、いちばん活気があるところである。



コトリン島とクロンシュタットの軍港

町そのもののようなすはどうか。

町の本通りは、ニコラエフスキープロスペクトとよばれるもので、北から南に走っている。その東側にギリシャ教会（聖アンドリュース寺院——一八〇五〜一七一年にかけてサクハロフが造ったもの）がある。この教会から東にエカテリンスカヤ通りが走っている。その南側にペトロブスキー園があり、クロット男爵がつくったピョートル大帝のブロンズ像（高さ約六〇センチ）がある。町中には、運河が何本もあり、参謀本部——要塞司令官の官邸があるほか、サマーガーデンと呼ばれる花園（公園）がある。国内には、喫茶所・展望台・レストラン（兵員用）・王族の休養施設などもある。

軍港やドック、軍艦を見学するには、参謀本部の許可が必要である。が、街の見学は自由であったようだ。さんばしに着いたら馬車で町を横断し、花園へむかい、それより目抜きニコラエフスキープロスペクトへ進み、教会をみて波止場にもどる。所要時間は一時間ほどである。これが観光ルートであった（Baedeker, Russia, 1914, p.184〜p.185を参照）。

この間、兄の一行は、八代中佐やロシア海軍軍令部の士官一名の案内によって、クロンシュタット軍港（コトリン島）、造船所二カ所、兵器工場一カ所を見学したのち帰途についた。が、ネバ河畔の「セントペトロポール寺院」^{（ペートル）}（むかしの砦あと。ピョートル一世以下、歴帝の柩などがある。のち革命党員が弾圧されたところ）だけは、かつて広瀬がロシア語の先生に連れられて行った所であったから、こんどは広瀬が一行の案内役となった。しかし、寺院もうでをしても、日本におけるときとはちがって、崇敬の念はおこらなかった。

やがて広瀬は、雪のふかい、寒気のきびしい露都の下宿ではじめて明治三十一年（一八九七）の新年をむかえた。

それはロシアでむかえる初めての新しい年であったが、とそ（新年にのむ酒）もなければ、なます（魚肉、大根・ニンジンなどを酢あえにしたもの）や数の子もなく、一切のモチ、雑煮もない、さみしい正月であった。とくに雑煮がないのは残念であった。広瀬は元日の朝、例のごとく階下の八代中佐の部屋を訪れると、一杯の紅茶をのんだけである。

その後、大礼服を着ると、八代とともに公使館をおとずれ、御真影に拝礼した。その夜は林公使によって十五人ほどの日本人がレストランに招かれ、新年の祝盃をあげた。が、はるか中国では大きな事件や出来ごとが、つぎつぎと起っていた。前年の十一月、山東においてドイツ人宣教師二名が殺され、ドイツが膠州湾を占領し、のちそこを租借した。ロシアが旅順や大連をめぐってきな臭いうごきをしていたし、日本国内の政変（内閣の瓦解）のニュースも聞えてきた。日本の前途もいろいろ心配になった。

ペテルスブルクの気候は、いつもながら不順である。寒いことに変わらない。雪がふらないときは、雨がふったりする。それ以外は、曇天である。寒さは零下8度から18度を上下している。室内でストーブをたけば、日本の冬の座しきよりも暖かである。が、屋外で零下10度をわると、かなり骨身にこたえる。防寒用のふつうの毛裏のついた外とうを手に入れたが、上流社会に出入りするには「シネーリ」*шине́ли*と呼ばれる毛皮の外とうが必要である。それは高価なものであるから、求めずそのままにしてある。

帽子は、寒中、高帽のようなしゃれたものは、とてもかぶっておれない。日本の僧さんがかぶるようなトルコ帽のようなものを用いる。⁽¹¹⁾

ロシアの大晦日は、通りに人影がなく、静かなものである。一月の中旬から、運動のためアイススケートをはじめた。上達のみこみはあるが、三度ほどひっくり返った。ペテルスブルクの寒中の遊びとしてスケートが盛んであった。ときに楽隊なども出て、にぎやかであったという。⁽¹²⁾

年が改まってから、さらに膠州湾や旅順口のことが入るようになったが、かんこう令が出ているため、大っぴらに話題にすることができなかった。ドイツやロシアの出方は、日本の利害ともぶつかることだから座視できぬものである。清国は列強に蚕食（さいしょく）（かいこ）が桑の葉をたべるように、しだいに土地を侵略）されている状態である。欧州列強のわがまま、清国のいくじなさには、ただあきれるばかりである。腕力（武力）がものをいう世の中、腕をきたえるより術（すべ）はない。ロシアが日本の海軍や日本の勢力を重要視しているのはゆかいである。

聞えてくる前内閣の解散（松方首相の辞表の提出）、増税や軍備縮少はどうなるのか。国威の宣揚がむずかしくなると、じつに国家の一大事である。なぜなら欧州列強は、東洋における海軍力を増強する気配があるからである。ロシアは地中海艦隊から艦を抜いて、また新造艦をすべて東

洋に派遣するつもりである。

ことしになってロシアの海軍大臣とともに、ナジモフ將軍の舞踏会に招待されたので出かけたが、語学はできないし、ダンスはおどれず、トラップや酒はにが手であったから、ただ見物してすごした。が、豪勢なあそびとして、馬ソリばそりによるドライブに二、三度招待された。それは半夜はんや（よなか）に三頭立ての馬ソリに乗って近郊の島めぐりをするものであり、たのしい娯楽であった。ロシアにおいて、それは豪興の一つにかぞえられ、邦貨で二、三円以上もするものであった。

三月中旬をすぎるところ、日あしが延びたようにおもった。夜七時になっても、なおも明るい。屋外の気温は、まいにち零下5、6度から14度を上下している。日中、太陽の直射をうけることがあるが、それは点滴（しずく）のようなものである。

四月に入ると学資が年三三〇〇円になり、一いきつくことができた。暖気がまし、寒暖計の針も氷点以上をしめすようになった。スケートはもうできなくなった。ロシアは二十五年の期限で旅順や大連を租借することになった。が、朝鮮には手だしをしなかったのはうす気味わるい。ロシアは海軍の拡張をはかるために、臨時費として九〇〇〇万円支出する勅命を出した。わが国も第一、第二の拡張案に満足することなく、第三の拡張案をだす必要がある。なぜなら、海上の権を庄せられたら、とても国家の体面がたもてないからである。

外交上のことは、一に腕力にある。仁義とか威信を信じるのは、愚者だけである。日本の近況は、邦字新聞によって知ることができるが、第三次伊藤内閣はまじめにやってもらいたいものだ。

農業国のロシアは、ことしに入ってから、国内が大いに飢え、屋根をはぎとり、戸をこわして暖をとったり、耕具や馬まで売り、まかねばならぬ種子まで喰いつくした地方もあるとのニュースが聞えてきた。

五月になると、だいぶ暖くなり、野に若芽が目につくようになった。日あしは冬にくらべてひじょうにのび、午後三時半、夕方の八時でも文字がよめるようになった。街のガス灯など、夜九時半ごろはじめて点火するようになった。

五月七日、当地の練兵場において、陸軍の観兵式を見学した。が、さんぜんと輝く軍装の騎兵の勇姿に感服し、かれらがいっせいに疾走したのち皇帝の目のまえで踏みとまる光景は、じつに偉観であった。

六月になると野原に新緑を、公園に花をみることができた。日あしが一段とのびたため、夜十二時をすぎても日は暮れず、夜なのか明け方なの

か、その区別がつきかねた。街灯はもう点火しなくなった。公使館などで話が長びくと、帰宅が夜中の一時をすぎることがあった。当地に住む中流家庭では、みな郊外に別荘をもっており、かれらは休日にそこへ出かけ、くつろぐならわしである。

ロシアは相変わらずの物価高である。これには閉口するが、四月一日付をもって学資が増額になったから、ひとまず安心した。被服にはいちばん苦勞する。例の“シネーリ”（高級な外とう）は高価であるため、まだ調製していないが、ふつうの外とうはすでに四着新調した。

人の口にフタをすることはできない。極秘電の内容を知った者は、それを秘匿（ひそく）できないせいか、公使館に行くと、しぜんいろいろなニュースが耳に入ってくる。「議會モ又々解散ノ電報有之」（父宛書簡——明治31・6・19付）に、広瀬は大きなおどろきをかくせなかった。明治三十一年一月、第三次伊藤内閣が成立したとおもったら約半年で、藩閥元老は政権を投げだした。日本では議會と無関係な元老が組閣したが、しだいに政党の力がつよくなり、政党内閣が生まれるに至った。

憲政党（板垣を党首とする“自由党”と大隈を党首とする“進歩党”が一つになった野党）は、伊藤内閣が総辞職したあと、最初の政党内閣——大隈内閣（隈板内閣）が成立した。大隈は首相、板垣は内相に就任し、陸海相以外の閣僚はすべて黨員であった。しかし、この内閣は内紛により四ヵ月で崩壊した。同年十一月、第二次山県内閣が成立した。

広瀬にとって内閣がたびたび変わるのには杞憂（きゆう）であった。憲法によっておこなう立憲政治は、政党内閣に進むべきであるとおもっていたが、じぶんだだけの利益のために、国家や国民のことを忘れていたら憤慨（ひんがい）にたえぬところである。政治家は国士（こくし）（じぶんを省みず、もっぱら国のことを心配する憂国の士）なのである。また経済上の事実にとっとしないわけにはゆかぬ。

列強は海軍の拡張につとめているのに、わが国は増税をおそれて拡張案に賛同しないのは愚（おろ）のきわみ、じつになげかわしい。

広瀬はかねてからクロンシュタット軍港に居住したいとおもい、その旨林公使から露国軍令部長に宛てて、在留願を出していたが、八月になると、ついにその回答がきた。ロシア側はクロンシュタット居住を許可しなかった。おそらく軍事上の理由からであろう。かれはこれには失望を禁（こ）じえなかった。

八月一日、イギリスに在留する川島少佐が、二週間の予定でペテルスブルクにやってきた。ことしになってはじめての海軍関係者の来露であり、ゆかいなことであった。広瀬は八代中佐とともに案内役をつとめた。視察先は、昨年（しねん）の十二月、内田大佐一行が見学したものに、



田中義一

「イギリススキー工廠」が、新たに加わった。

この工場で作っているものは、^{びようさ} 錨鎖（いかりについたくさり）甲鉄板、水雷艇などであった。工廠はおもったよりも盛大であり、七トンの蒸気押し型機^グを備えていた。もちろんクロンシュタット軍港も視察したし、露都や近郊の名所なども広瀬がいつてに引きうけて案内した。

同月二十八日付のロシアの「官報」に、皇帝が「国際平和会議」を提唱したことの記事があることを知り、はらをかかえて大笑いした。ロシアが旅順や大連を租借し、海軍の拡張をはかっていることを考えると、まじめな提言とはおもえなかった。

林公使は、夫人や落合試補をともない兼務先のスウェーデンに出かけ、また椎名という神学生がカザン大学からペテルスブルク大学に転入学した。露都の気候は、秋冷をおぼえるようになり、日あしもだんだん短くなってきた。夜七時ごろになると、街にガス灯がともるようになった。

八月上旬といえば、ロシアではとくに秋である。

八月六日、陸軍大尉・田中義一^{ぎいち}（一八六四～一九二九、明治・大正期の軍人、政治家。のち首相）が、公使館附武官としてペテルスブルクにやってきた。田中が任務とする研究は、広義のロシア陸軍の実情を探ることである——その作戦、その動員、その編制から、教育や兵器の材料など、直接陸軍に関することを知らることであった。当時、ロシアは世界一の大国であり、その国情ことに社会組織を通じて、軍隊と国民との関係なども調査研究する必要があった。

ロシア陸軍を内側から知るには、部隊附になるのがいちばんである。が、日本武官の隊附勤務は前例がないという理由で、かんたんには許可しない。ちょうど広瀬がクロンシュタット軍港に居住することを許されなかったのと似ている。もし強いてことを急ぐと、ときがときだけにロシア側の疑惑をまねき、軍事探偵とみられる。

そこで田中は、語学（ロシア語）もできない折であるから、それを学びながら、しばらく機会を待とうとおもった。ロシアやロシア人を理解するには、かれらの風俗習慣に同化するのが先決問題とかがえ、じぶんの名をロシア式に変え、名と姓のあいだに父姓^{ふしやう}（信祐^{のぶすけ}）を入れて「ギイチ・ノブスケウィッチ・タナカ」と名のり、名刺もこれと同じにつくった。

当時、おなじ公使館附武官としてペテルスブルクに在動していたのは、藤村松次郎少佐である。が、かれは半年おくられて着任した田中大尉の私生活について後年回想し、つぎのような内容をかたっている。

——最初の一年、田中は女教師についてロシア語を習った。婦人の教師をえらんだのは、発音が正しいからである。藤村と田中がその女教師とはじめて会ったとき、宗教について聞かれた。藤村は「仏教」と答えたが、田中は「無宗教」といったので、相手はひじょうにびっくりした。ロシアは宗教が盛んな国であるから、質問者が吃驚^{きつきょう}したのはむりもない。無宗教と答えた田中は、ロシア人と親しくするために、まもなく教会に行くようになった。

そればかりかロシア人との社交上、ダンスも必要であったのでそのけいこをやったが、けっきょくダンスはものにならなかった。田中は海軍武官の広瀬といっしょに帝室附のダンスの先生（元女優）についてけいこした。はじめのうちは、大きな鏡のまえで、両手を腰にあてて、腰のふり方を練習するのだが、広瀬の腰つきはどうもうまくゆかない。先生は竹のムチでたたいて矯正するのだが、柔道できたえた広瀬の腰は、ムチでたたいた位では容易になおるはずがなく、さすがの広瀬も大いにこまった。

後年、軍神とたたえられた広瀬と総理大臣になった田中は、女優あがりのダンサーに、ムチでたたかれながらダンス⁽¹³⁾を習った光景は、苦笑を催さずにはおれぬ。広瀬もダンスはものにならなかった。

当時の公使館員や武官は、何か問題が起ったときはいそがしいが、ふだんは暇にまかせ、遊びもさかんにやった。芝居見物やトランプなどを大いにやったし、娼婦と関係をもつこともあったようだ。

田中は人情のきびを心得ていて、ときに思い切ったことをやった。ロシア人にかぎらずヨーロッパ人は、日本の柿をひじょうに珍重する。だからわざわざ日本からそれを取りよせると、かれらをよろこばせた。また焼トーフを取りよせたこともあった。氷をつめたブリキかんにトーフを入れた荷が届いた。公使館では一同そのトーフに舌づつみを打って賞味した⁽¹⁴⁾。

田中のロシア研究のほうはどうであったのか。その努力と苦心は容易ならぬものがあったようだ。あるとき重要書類と図面を手に入れると、それを公使館の奥で厳重に包装し、ドイツとの国境まで持っていって参謀本部に密送した。それはロシア軍の「戦時集中計画」について書いた貴重な資料であったから、日露戦争に役に立つものであった⁽¹⁵⁾。

九月十八日、広瀬はロシア語になれるために、神学生・椎名の紹介により、下宿を変えた。こんどの住居（不詳）は、主人が大蔵省勤務の役人、妻は宮中付の僧侶の娘といい、同人からロシア語を習うことになった。広瀬はようやくロシアの“ファミリイ”の中で起臥することになり、風俗や習慣、気質などをうかがう機会に接することが多くなった。

この年は天候が不順であった。十二月まえ暖気がつづき、日夜陰うつであり、小雨がふった。が、十二月になると、俄然として寒くなり、気温は氷点下12度あたりまで下がった。もっとも酷寒をおぼえたのは、氷点下18度以上もあったときである。しかし、寒気がゆるむと、街路上の雪がとけだし、ソリはうごかず、スケートもできなくなった。

十二月八日——八代中佐に帰国命令（電報）がきた。

やがて年が改まり、明治三十二年（一八九九）の新年をむかえた。広瀬はロシア語学習のかたわら、すでにフランス語の勉強をはじめていた。かねて肺病により五ヵ月も入院していた陸軍武官の伊東圭一（中佐）は、二月三日の昼すぎ息を引きとった。ペテルスブルクにおいて日本人が亡くなるのは、みぞうの事件であった。

翌日、林公使は埋葬地の件で内務省をおとずれると大臣と協議し、「スモレンス墓地」に葬ることになった。Smolenskoe 墓地は、ネバ川の対岸ワシリエフスキー Vasilievski Ostrov 区にあった。

二月五日、田中は通訳生の川上、田野をとめない墓地を買いに出かけ、五五〇円（中の上位）のものを求め、ふたたび病院をおとずれると、死体を写真にとった。正装をした伊東中佐の亡きがらは、公使館に運びこまれた。昼すぎより、各国の公使、式部長官、参謀本部からも多くの外国人が弔慰を表わしにやって来た。また当地の司令官から儀仗兵二中隊と楽隊が派遣された。墓地へは途中から、公使はじめ皆とぼと歩いてむかった。各国武官も墓地まで来るものが多かった。

墓地に着くと、林公使は祭文（死者の霊につげる文）をよんだ。葬儀をおえた田中が帰宅したのは、五時ごろであった。

広瀬は同胞の死を父に知らせている（明治32・3・3付）。

当地ニテ、陸軍中佐伊東圭一君死亡。五カ月病院ニアリ。実ニ憫然ノ至（悲しくあわれである）。当地ニテ埋葬セルガ、其式整ハザルトハ云へ、甚ダ立派ニテ、其点ニテハ遺憾無^レ之候。

また広瀬はとむらいの漢詩をよんでいる（読みくだし文のみを掲げる）。

一夜の愁風に客星（一時的に現れる星の意）落ち

天蓋万里泣きて声を吞む

ネバの河畔無情の土に

埋却す胸中の策の縦横なるを

伊東中佐を挽す（かなしみいたむ意）

二月九日、田中は九時ごろ起き、午後公使館にいった。この日は伊東中佐の一周忌である。田中は書記官の飯島、通訳官の田野、川上らとともに伊東の墓にもうで、そのあと石屋に寄って墓石の値段をきいた。五百円だという。公使館にもどったのち、藤室少佐と夕食をとった。

三月四日、広瀬はこれまで半年ほどロシア人一家のところに下宿していたが、そこを出ることにし、プーシキンスカヤ街の八代の旧宅にもどった。八日、八代の後任、野元中佐が露都につき、八代の下宿に入った。八代の家で同居することになり、しばらく混雑した。広瀬はその後、日夜、下宿をさがし十五日新寓に移った。広瀬のこんどの下宿は、八代宅から三〇〇メートルほど離れた「カラワンナヤ」街にある。まかない付の下宿であった。部屋代と食費で、一カ月一〇〇ルーブリ。かつてトルコ海軍の武官が住んでいた所である。下宿はネフスキー大通りに通じる冬宮の門から見通したところの街にあった。その地は上等等ところであり、「夏公園」にもちかいし、便利なところであった。しかし、じぶんの部屋へ行くには、例によって百段以上も階段をのぼらねばならない。

三月二十日、八代中佐は帰国の途についた。オデッサやコンスタンティノープルに寄ったのち、シベリア経由で帰朝の予定らしい。広瀬は八代から肉親にもおよばぬ世話をうけた。行きとどいた親切はとてもことばでいい表わせぬものである。八代について飯島書記官にも帰朝命令がでた。

飯島は攻玉社以来の古い知己であり、したしく交った間柄である。広瀬は知人がつぎつぎと去ってゆくことに寂しさを覚えた。

三月三十日、午後広瀬は、書記官の飯島、上泉（海軍士官）、陸軍武官の田中らとともに海軍の博物館を見学した（『田中義一伝記 上巻、一二二頁』）。

四月も末になると、日あしはのび、寒さもゆるむ。戸外も暖くなってきた。ネバ川の氷が流れだした。ガス灯の点火も、夜八時をすぎないとやらなくなった。ベルリンにいる山形^{けい}兄は、十八日に帰国の途についた。ペテルスブルクに來遊するよういていたが、ついに來なかった。残念である。

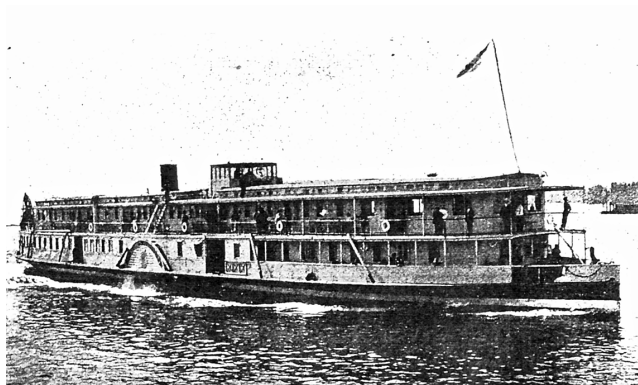
二十五日、広瀬はロシア留学を免ぜられ、新たにロシア駐在を命じられた。俸給もあがり、一等の手当金をもらうことになった。

三 カスピ海・黒海巡察の旅

六月十一日、旅行の許可がでたので広瀬は、裏海（カスピ海や黒海）巡察の旅に出発した。この日八時発の夜行にのると、ペテルスブルクをあとにした。翌朝、九時ごろモスクワに着いた。ペテルスブルクからの行程六〇六露里（約七〇〇キロ）。かれを乗せた急行列車は、露都をでると、平地のうえのまっすぐな線路を直進した。川をわたり、林をぬけ、村をとり旧都についたのは十時間後のことであった。

十四日の夜十時モスクワを発し、翌十五日の朝七時、「ヤロスラフリー」（Jaroslav ヤロスラフのこと。ポーランド南東部、ロシアとの国境にちかい、サン川上流の町。別名「ヤロスラウ、Jaroslau [独]」に着いた。当地において一泊せず、正午に「ウ^{（ボルガ）}オル」川をくだり、「ニージノブゴロード」（ニジニ・ノフゴロド Nizhni Novgorod——のちのゴーリキ。モスクワの東四〇三キロ。ボルガ川とオカ川の合流点。工業の町）にむかった。この古い町はボルガ川を見おろす丘陵の上にあり、河畔の景色にちょっとおもしろ味があった。

船が大河のうえを下ること三八〇露里、船中で一泊し、翌十六日の朝八時ごろニジニ・ノフゴロドの市に着いた。当地で何泊かしたのち、二十日ふたたび船にのった。ボルガ川兩岸の景色をみながらサラトフにむかった。途中、カザン（モスクワの東七九七キロ。ボルガ川中流左岸の町）に、だったん人（蒙古系部族のひとつ）の古^{いにしへ}をしのび、有名なボルガ川に架かる鉄橋をくぐり、翌二十一日の朝七時、サラトフ（ボルガ川下流右岸の町）に着いた。午前十一時、ふたたび船にのり、アストラハン（カスピ海から約一〇〇キロ上流のボルガ川の三角州にある町。旧アストラハ



広瀬はこのような外輪船によってボルガ川をくだった



アストラハンの港

ン汗国の首都）をめざし、当地には二十三日の朝六時に到着した。アストラハンには、ギリシヤ正教とアルメニア教会の大主教がいるところである。市は起伏に富む島のうえにあって、ブドウ園によってとり囲まれている。川は一年のうち $\frac{1}{3}$ が凍っている。街中の丘陵に十六世紀に建てられた砦があるほか、各種の教会、市場、行政府、総督府などの建物がある。広瀬がえた感じでは、だった人が多い市である。半分がヨーロッパ、半分がアジア風の市であった。市民の大半は漁業でたべている。広瀬は馬車で市内見物をしたのち、午前十一時にふたたび汽船にのり、裏海（カスピ海）にむかった。

ここはサラトフより、九〇〇露里。ペテルスブルクより、じつに二〇二〇露里である。

かえ、カスピ海をくだった。二度ばかり寄港し、船中で一泊したのち、二十五日の夜七時ごろバクーに着いた。

バクーは、モスクワの南東一九八〇キロ、カスピ海西岸のアプシエロン半島の突出部に位置し、ロシアの主要な産油地域の一つである。広瀬は、「世界第一ノ石油産地ニシテ、其盛大ハ目ヲ驚シ申候」と報じている（明治32・6・25付、父あて絵はがき）。

バクーの町は、アプシエロン半島の南海岸の樹木のない土地にある。町は海岸から半円を描いたように上の方にのびていて、西方に砦がある。町の起源は六世紀、中世には商業・手工業の中心であった。ロシアがペルシヤ（イランの旧称）から大部分の土地をえたのは、十九世紀初頭であった。この町の住民は、ダッタン人、アルメニア人、ペルシヤ人、ロシア人からなる。

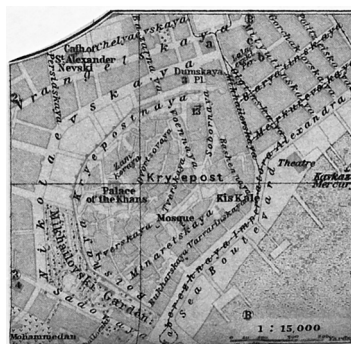
早くから町の近郊に石油が埋蔵されていることが知られ、一八七〇年代採油がはじまり、ロシア全土に供給されるようになると、ロシアの大工業都市の一つになった。広瀬はエントツ状の筒から火炎が出ている数多の噴油井をみておどろいたことであろう。バクーでは、カスピ海のロシア



ニジニ・ノフゴロド



サラトフの市

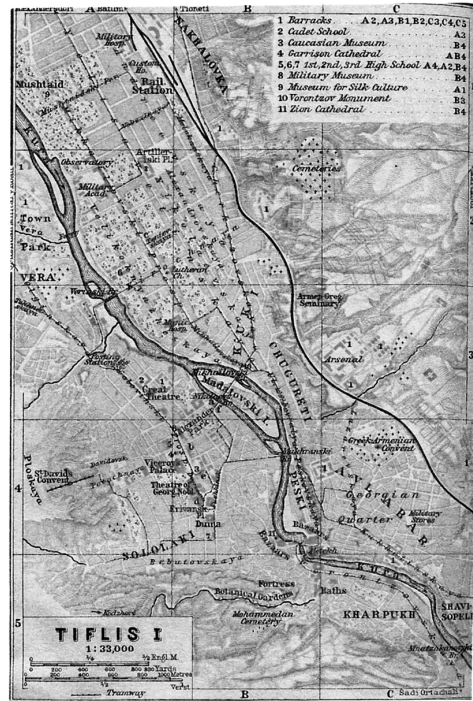


バクーの町

海軍と石油業のいっばんを見学し、一泊したのち、二十七日の午後四時すぎ、汽車でコーカサスの中心「チフリス」(ティフリスのこと)にむかった。ティフリスに着いたのは、翌日の午前十時半である。

車中でバクーの豪紳士と知りあいになり、馬車をやとい、ティフリスの北に位置する「ウラヂカフカズ市」(フラディカフカス——ロシア南西部、のちの北オセチア自治共和国の首都。鉛、亜鉛冶金の工業がさかん)にむかい、当地に三十日の正午に着いた。ティフリス——フラディカフカス間の距離は二〇〇露里。途中、雨にあたり、駅馬の不足かららかな旅ではなかった。七月三日、広瀬らは駅馬車でティフリスにもどることにした。天気よかったので諸山の絶景をたのしむことができた。

五日、広瀬は汽車でティフリスより「バツーム」(バトゥームまたはバツミという)にむかい、同日の夜八時半、石油の輸出港として知られているバトゥーム(ロシア南部、トルコとの国境にちかく、黒海の南東岸に位置)に着いた。途中、有名な湯治場がある「バルジウム」(Borshomのことか。不詳)を通過した。そこは日本でいえば有馬温泉のような所であり、景色のよい幽しい境であった。



ティフリス

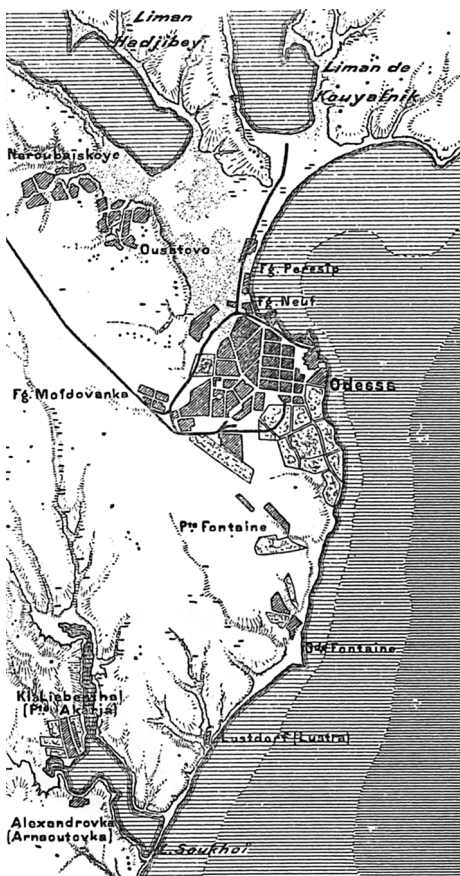


ティフリスの市

バトゥームは、アルメニア台地のふもとの沼地にできた町である。主な輸出品は石油であり、副産物としてはマンガン、甘草、まゆ、羊毛などを輸出していた。⁽¹⁷⁾一八七八年にロシアに併合された。広瀬は六日の午前二時の汽船にのり、黒海沿岸の港に寄りながら、ヤルタ（ウクライナのクリム半島南部、黒海にのぞむ保養地）にむかった。黒海は波もおだやかであり、白波をみることはなかった。

十一日の午前五時ごろ、船はヤルタの港に着いた。同地は風光絶美なところ、海水浴場もある海岸保養地である。広瀬は当地で一泊し、翌日、馬車を駆って「セバストポリ」(セバストポリのこと。クリム半島西南部、黒海沿岸の港。一八〇四年ロシアの黒海艦隊の軍港となった。クリミア戦争の激戦地)にむかった。広瀬はこの町に四、五日滞在し、その間に提督を訪問したり、軍港を見学するつもりであった。

ヤルタからセバストポリまでの距離は、八五露里。途中の景色は、ロシア人も自慢するだけあって、すばらしいものであった。セバストポリで提督を訪問したところ、思いがけず案内の士官一名をつけられ、ていねいに視察させてもらったほか、将校クラブで昼食を供された。



オデッサ



オデッサの街

十八日、午前十一時半、広瀬は「オデッサ」に着いた。オデッサは黒海の北西岸——ドネストル川河口の北東に位置する町である。十八世紀にエカテリーナ二世によって要塞が築かれ、町に発展していった。オデッサは黒海における重要な商港の一つであり、十九世紀には穀物や小麦粉の輸出港としてさかえた。街中には並木のある舗装された大小の通りが縦横に走っており、各宗派の教会、役所、劇場、宮殿、兵舎、各国領事館、大学もある都市であった。

広瀬はオデッサで何泊したのか。やがてかれは陸路汽車をのりつぎながら北上すると、七月二十八日午前十時半、旧巢ともいふべきペテルスブルクに帰着した。露都を留守にすること約一ヵ月半であった。広瀬は官費旅行であるから、よけいな出費をさけるため、旅にでるまえに下宿をたみ、荷を知人にあずけて出発した。が、帰京後、三日間というもの下宿さがしに多忙をきわめ、三十一日ようやく居を定めた。

こんどの住居は、エカテリニンスキー・カナル (Yekaterinski Canal) 96番地5号である。地名からして運河ぞいの下宿である。

晩夏、海軍水路部長・コヴァレフスキー少将 (子爵) の家をおとずれ、次女アリアズナ (16歳) を知った。

露都にもどり九月に入ると、毎日のように雨がふり、気分が晴れなかった。日本であれば秋晴れの行楽の季節である。六日、林公使夫妻は賜暇帰朝の途にのぼった。のち同人はイギリス公使となった。この年の秋は、来遊者がつぎつぎとペテルスブルクにやってきたため、広瀬はその応接と案内に多忙をきわめた。軍関係者の多くはたいいてい一週間ほど滞在したのち、帰途についた。

松永少将

上村大佐

財部、竹下両大尉

船橋機関少監

(明治32・8)

藤井光五郎^{てい}機関少監 (明治32・9)

東郷正路大佐

鈴木要三郎大主計

(明治32・10)

千坂智次郎^ち少佐 (明治32・10)

村上中佐 (フランス留学中)

山内万寿大佐

高橋作衛 (明治32・9)

文部省留学生

小野塚喜平次 (明治32・10)

矢作英蔵

語学の学習は、本邦人の来遊する者が多いため、また旅行中もその後もしばらく中断していたために、「殆ど^{ほとんど}全^{まった}く忘^{ぼうきやく}却^{てい}ノ態」であった。広瀬はしばらく放っておいた語学学習を再開した。教授方を依頼しておいた第一の教師(女子大生)は、夏季はいなかに行っていたがようやく帰都した。つなぎに一人の女教師をやとい、ロシア語をふたたび始めていた。

このごろでは、会話の材料としてロシアの文豪の小説をよんでもらい、その内容について、あれこれ会話をした。広瀬が習ったと考えられる作品は、旧蔵書リストから考えて、

ゴーゴリ (一八〇九〜五九、写実派の作家。のち発狂して死亡)

レールモントフ (一八一四〜四一、詩人・作家。モスクワ大中退後、軍人となる、決闘で倒れた)

プーシキン (一七九九〜一八三七、詩人・作家)

トルストイ（一八二八―一九一〇、作家・思想家。カザン大中退後、クリミア戦争に従軍）

などであり、かれらの短篇にふれたものであろう。代役は、品位のあるかつ親切な教師であり、一時間の約束が、一時間半もおしえてくれた。

第一の旧教師が教授を再開すれば、一日おきに歴史や政治に関する文章をよんでもらい、かたわら作文を習うつもりであった。

しかし、広瀬の語学の進歩はのろかった。希望の $\frac{1}{3}$ の進歩も達成できなかった。一ヵ月半以上も旅行したおかげで、めちゃくちゃなロシア語でも、それをしゃべる度胸がついた。海軍の関係者が来露し、かれらを案内した折、臆面もなく御者を叱りとばすことがあるが、朋友がそれをみて、君はけんかができるほどロシア語が上達した、といわれると、穴があったら入りたい気持ちになった。

広瀬のロシア語の会話力は、西洋人が日本語で、

――アナタ、ベケアリマス。

ていどのものであったようだ。

ふたたび年がめぐり、明治三十三年（一九〇〇）の新年を露都でむかえた。広瀬にとって三年目のロシアである。寒気が凛烈（りんれつ）の気をおびるようになると、たのしみは、スケートである。加藤寛治大尉も広瀬にさそわれ、スケートをはじめた。露都が寒気にすっぽりと包まれると、ロシア人にとっての娯楽は、知人宅での茶会やパーティ、晩さん会、舞踏会（ボール）、芝居見物などである。が、広瀬にとってひとりでのしむスケート以外、どれも苦手なものばかりであった。

強健なことは、露都にいる日本人のなかで第一位とおもっていた。が、柔道はできず、運動不足をおぎなうため、スケートをはじめ、室内では腕の筋肉をきたえるため鉄製の亜鈴（あれい）（ダンベル）をうごかし健康維持につとめた。

ロシア語の歩みは、「蝸牛（かぎゅう）（かたつむり）的（てき）歩調（ちやう）」であった。しかし、昨今、片ことながら、談話にさしつかえないほどに進歩した。ロシア人宅を訪れても、昨年のように気苦しさを覚えないうち。やはりそのことばが使われている風土に身をおき、実地にことばを耳できき、聞きおぼえたま、話したりするうちに、会話がしげんに運ぶようになったものか。ロシアにおける滞在が、一年、二年と日数（ひかず）を経るうちに、気安く訪ねることができる家庭が四軒ほどできた。

どの一家も親切であり、親戚とかわらず、身を異郷にあることを忘れるほどであった。広瀬は正直いらず、うらおもてのない、人をだますこと

のない愚直な人間であったから、それがかれらに安心感をいだかせ、愛されたものであろう。一週間も顔をださずにいると、心配して手紙をよこすか、子どもを使者に立てて様子をみによこす。そればかりか、中には夫人や子どもをつれて下宿にやってくる者もいる。ひとの社会的な交わりとは、このようなことをいうのであろう。

人との交際とは別に、広瀬は日課をわすれていない。それは語学の勉強である。ロシア語とフランス語の下読や復習がある。露語の新聞（『ノヴォエ・ヴレーミア』紙 *Hoboe Pressa* をひろい読みするから、それにもかなり時間がとられる。国から手当金をかなりもらっているが、食い込みがちである。さい布の中味がさみしいのは毎度のことである。

* “新しい時代” の意。

広瀬はかねて英仏独三国の軍事視察を本国に申請していたが、それが許可された。それは大きなよろこびであった。こんどの視察旅行は、三月下旬にはじまり六月中旬におわる、約二ヵ月半の長期旅行であった。

四 英仏独、バルト海沿岸を視察

明治三十三年（一九〇〇）三月——広瀬はペテルスブルクを発し、四月一日の夜、ポーランドの首都ワルシャワ（ビスワ川左岸に位置）に着いた。当地で一泊したのち、二日夜行にのりベルリンにむかった。露都を出発したとき雪がふっていたが、ワルシャワでは一片の雪もみなかった。広瀬が露都のワルシャワ駅からのった汽車は、南下をつづけデューナブルク——ヴィルノをへてワルシャワの聖ペテルスブルク駅に着いたものであろう。⁽¹⁸⁾ 露都をはなれるとき、離れにくい気持がつよかったものか、「意気（まこころ）依々（い）タシテ旧（もと）ノ如（ごと）ク」としている（明治33・4・2付、父あて絵はがき）。

ワルシャワは、ペテルスブルクに赴任するとき立ち寄ったことがあった所か、「今昔（こんじやく）ノ感（かん）ヲ惹（ひ）キ申（もうし）候（こう）」という。むかしといまを思い比べ、感慨にひたったものである。車中では露都からやって来た京都の商人といっしょになった。

三日の午前十一時半、ドイツの首都ベルリンに着いた。汽車がホームに入るところは、フリードリヒ・シュトラーク駅か。駅に出むかえたのは、二年半前の渡欧のさいにマルセーユまで同行した海軍留学生・林三子雄（大尉）であった。広瀬は終日同人によってベルリン市内を案内されたのち、その下宿で牛なべをごちそうになった。牛なべをつつきながら、今昔をかたったのち、ホテルにもどった。

広瀬はベルリンに一両日滞在したものの。その間にシュテッティン（オーデル川河口の港。ワルシャワの西北西約五一〇キロに位置）に、軍艦「八雲」をみに出かけている。ベルリンを発ったのは、五日のことか。やがてイギリス海峡をわたり、六日の午前八時ごろ、ロンドンに着いた。英都には知人が多いため、不便を感じず、あちこちから招待をうけた。イギリスには見学すべき海軍関係のものがたくさんあった。

十一日、サウザンプトン（イングランド南部の港）をおとずれ、ほぼ完成した軍艦「朝日」を竹下勇少佐の案内で見学したが、同艦をみていると、帰国して艦務にもどったような気持ちになった。しばらく当地に滞在して、最新艦のことをじゅうぶん頭のなかにたたき込むつもりであった。

やがて広瀬は、サウザンプトンより汽船でポーツマス港（ロンドンの南西一九キロ、イギリス海峡にのぞむ）にむかい、十七日軍港を小田切延寿（大機関士）とともに視察した。イギリスはさすがに海軍国だけあって、その設備などは横須賀のものと比べものにならない。軍港の見学は、公使館をへてイギリス側の許可をえていたから、案内の士官を付せられ、よくみせてくれた。

十八日、この日広瀬は、ポーツマスより汽船でサウザンプトンにもどると、同地より汽車でプリマスにむかい、夜九時ごろ着いた。

プリマス（ロンドン西南西三六四キロ、イギリス海峡にのぞむ港町）のデボンポートとストーンハウス地区にあるのは、十七世紀以来の軍港である。広瀬は何も語っていないが、当地において海軍の諸施設を見学したものであろう。その後、ふたたびロンドンにもどり、二十三日に上村少将、黒井中佐らとともにニューカッスル・アポン・タイン（略称・ニューカッスル——ロンドンの北北西四三キロ）におもむき、当地においてアームストロング社の大砲製造工場（タイン川上流にある）やタイン川のドックで建造中の「初瀬」「出雲」「磐手」を見学した。

二十五日は釜屋中佐、秋山真之大尉も広瀬らの一行にくわわり、いっしょにスコットランドの州都エディンバラを見物し、その晩はグラスゴー（クライド川河口より約二二キロに位置）に着いた。同地にいる海軍の仲間と会い、その案内をうけたから不便を感じずにすんだ。ニューカッスル以北は、寒気がつよいことを知った。

二十七日は火薬工場（場所不詳）を見学し、途中、グレンジ Grange（熱海のような湯治場）で止宿し、バロー・イン・ファーンネス Barrow-in-Furness（略称・バロー、イングランド北部、リバプールの北八三キロ、アイリッシュ湾にのぞむ町）の造船所にむかった。バローの造船所では、建造中の「三笠」や精練所を見学した。

五月二日、広瀬はロンドンに帰着した。七日、閑院宮載仁親王（かんいんのみやのちかひとしんのう）（一八六五—一九四五、明治から昭和期の皇族。のち参謀総長、元帥）一行にしたがい、ポーツマスの「朝日」を陪観した。その後、すぐロンドンにもどると、同夜秋山をふくめ四人でフランスへむかった。

八日の朝、船はル・アーブル港（セーヌ川の河口にちかい。パリの西北西二三キロ）に着いた。広瀬ら四人は、当地の「ノルマン」および「カネー」の造船所を見学したのちパリにむかった。広瀬はル・アーブルを出発するまえに、駅前のカフェで、大陸旅行の第一報（絵はがき）をサウザンプトンにいる「朝日」の竹下少佐にだした。

四人はその後パリに着いたはずだが、そのくわしい動向は不明である。が、十三日広瀬ら四人は、大館某（不詳）の案内で、リボリ街の「聖母マリアホテル」に宿をとったという。一行が泊ったホテルは、ルーブル美術館にもちかい、「オテル・サント・マリー」Hotel Sainte-Marieである。そこはリボリ街83番地にある六〇室の中級ホテルである。⁽¹⁹⁾十日、一行はエッフェル塔にのぼり、そのあとルーブル美術館やパリ近郊の名所『ベルセール』公園ヲ観ル⁽²⁰⁾という（5月13日付の父あての絵はがき）。これはヴェルサイユ宮殿（パリの南南西二一キロ）を見学におとずれたということであろう。パリ万博を見学したのち、十五日の夜、パリを発ち、サン・ナゼール Saint-Nazaire（フランス西部、パリの南西四四六キロ）にむかい、翌朝当地の造船所で建造ちゅうの軍艦「吾妻^{あずみ}」を見学した。広瀬はひとり身であったから妻が恋しい気持にならなかった。

注・吾妻は、京よりみて関東の意。

その後、ロンドン以来の四人は、サン・ナゼールの町でついにたもとをわかち、解散した。広瀬と秋山は、それより汽車で西上し、ロリアン（フランス西部、ブルターニュ半島南岸に位置、パリの西南西四九一キロ、軍港・漁港）にむかい、その夜はロリアンで一泊した。翌十七日、軍港を一べつしたのち、ブレスト（フランス北西部、ブルターニュ半島の突端にちかい、パリの西五九〇キロ、軍港）にむかい、オテル・コンチネンタル Hotel Continental（ラ・トゥール・ドオヴェルニュ広場 Place de La Tour-d'Auvergne に位置）に午後五時ごろ記帳した。

ブレストは、十七世紀にリシュリユー（一五八五―一六四二、フランスの政治家。ルイ十三世の宰相）によって海軍基地とされ、その後要塞化された。町はパンフェルト川の両岸の岩の多い丘陵にあり、重要なのは軍港がある左岸である。広瀬らはブレストの海軍施設を二日ほど見学したのち、シェルブール軍港にむかった。

二十一日の朝、広瀬と秋山は、シェルブール（イギリス海峡に面するコタンタン半島の突端部に位置。パリの西北西三四一キロ、フランス第三の軍港がある）に着いた。が、そこで何をみたのか。広瀬はただ『セルブル』軍港ヲ一覽ス^{カルドゥ・コンストリュクティオン}と報告しているだけである（明治33・5・21付、父あて絵はがき）。おそらく、海軍工廠・造^{ドック}船^{ドック}台・係船池その他を視察したものであろう。見学をおえた兩人は、夜、パリにむけて発った。

夜行にのっての旅行は、もとより喜んでやっているわけではなかったが、経費や日数^{ひかず}のことを考慮してのことであったようだ。

二十四日、広瀬と秋山はパリを発し、ル・クルーゾー Le Creusot にむかった。ル・クルーゾー（フランス中東部、パリの南東三七二キロに位置）は、工業の町である。一八三六年シュナイダー兄弟が製鉄所を設立してから発展をとげた。広瀬らが当地をおとずれたのは、シュナイダーの製鉄所を見学するためであった。同所では特殊鋼・金属板・機関車などをつくっていた。一九〇九年（明治42）当時、約一万五〇〇〇人の従業員をかかえる大工場であった。

広瀬はそれまでこのように壮大な工場をみたことがなく、その構えに一驚し、「宏壮^{こうそう}驚ク^{おどろ}二堪^{たえ}へタリ」と報じている（明治33・5・25付、父あて絵はがき）。それをみて、日本の製鉄業はどうなるのか、その行くすえをあやぶむ気持になった。

二十七日、広瀬は二年八ヵ月まえ、ヨーロッパにおいて第一歩を印したマルセーユに到着した。この日たまたま誕生日をむかえた。市のようなはむかしと何ら変らなかった。広瀬らは、このヨーロッパへの玄関口で一泊せず、そのままツローン^{トルン} Toulon（地中海のトゥーロン湾にのぞむ港町。マルセーユの東南東六五キロ）にむかった。ツローンはフランス第一の軍港、十九世紀以来のフランス海軍の基地があるところである。

ツローンでは、他の視察隊といっしょになった。

パリからやって来た一隊……………
伊東義五郎大佐（フランス公使館付）
築山中佐

森山慶三郎大尉

岩崎達人大佐

イタリアからやって来た一隊……………
莊司義基中佐

山本英輔、花房太郎両中尉

広瀬と秋山は、この二つのグループをツローンで待ちかまえ、同勢八名となった。一行は当地において海軍関係の施設および工廠を二十七、二十八日と二日にわたって視察した。ツローン軍港の視察をおえた一行は、記念の記名をおこなった。

三十一日、広瀬らの一行は北イタリアのジェノヴァ、ミラノを経、スイスの雪をながめ、ナポレオンのむかしをしのびながらドイツのライン河

畔に出ると、エッセンをめざした。途中、ケルン（ドイツ中西部の町）で汽車をのりかえた。エッセン（ドイツ中西部、ジュッセルドルフの北東四三キロ）に着いたのは、六月二日である。当地を訪れる目的は、クルップの鑄鉄工場をみることであった。一行はクルップ社の宿泊所に泊ったものであろう。広瀬は『クルップ旅館』ということばを使っている。

クルップ社の盛大なことにおどろき、三日汽車にふたたび乗ると、ハンブルクをめざした。ハンブルク（ドイツ北部、エルベ川の河口より一〇〇キロ上流に位置）に着いたのはいつのことか。エッセンとハンブルク間の距離は、二五〇キロほどのものだから、その日のうちに着いたものであろう。

世界一、二をあらそうハンブルクの商港の規模をみた広瀬は、横浜と雲泥の差があることを知った。大阪の築港もせめてハンブルクの半分の規模がほしいと思った。

四日、ハンブルクを見学し、ブレーメンをへて、「ウキルヘルムハーベン」(ビルヘルムスハーフェン Wilhelmshaven——北海のヤーデーブーゼン湾の西岸に位置。ブレーメンの北西九七キロ)の軍港についたのは、夜九時ごろであった。

ビルヘルムハーフェンは、見ばえのする町である。並木のある幅ひろの街路がある。マルクト街から半マイルほど行くと、高いへいで囲まれた^{“カザリヒ、ツェルノ”}帝国造船所、Kaiserliche Werftがある。そこに入るには許可がいる。五日の朝、一行は軍港をみた。が、おもっていたよりもりっぱな軍港であり、一見の価値はあった。午後、キールにむかい、夕方に着いた。キール Kiel (北ドイツ北部、バルト海のキール湾の奥に位置。ハンブルクの北一一キロ)も、ビルヘルムハーフェンとならぶドイツの重要な軍港であり、ドイツ海軍の本部が置かれている。一行はこのホルシュタインの古都キールで一泊した。

広瀬はキールから姪^{めい}に絵はがきを出している。それは全文カタカナで書かれたもので、文章はつぎのようなものである。(読みやすくするため、ひらがなと漢字に改めると)

わたくしが　今まで　送りました　絵入りはがき　地図をくらべ　わたくしの旅した　ところを　おとっさん　おっかさんに　聞いてもらい
六月六日

「ゼルマン」ノクニ　「キール」ニテ　ヲヂノ　タケヲ

六日、一行は新興の海軍国ドイツのキール軍港を視察したのち、ベルリンにむかった。ベルリンには同夜着いた。当地で耳にはさんだニュースは、「北京ノ風雲、穩^{おだやか}ナラザルコト」であった。広瀬はこれまでの視察旅行によって身にしみて感じたことは、国家は海軍力をつけねばならぬことであった。ベルリンでは、七日から十一日まで五日滞在したものか。

十二日の午後、ふたたび軍艦「八雲」の製造地——シュテッティンを訪れた。同行者は、秋山大尉と林中佐（公使館付武官）である。十四日の朝、広瀬は八雲の艦上で秋山とわかれ、それよりダンチヒ（ポーランド北部、ダンチヒ湾の奥に位置。ダダニスクともいう）の「シーヒョ」造船所を見学したのち、十五日、エルビング Elbing（独）（ポーランド北部——ダンチヒ湾沿岸ちかくに位置。エルブロンク Elbląg ともいう）にむかい、当地の水雷艇工場を視察した。

十六日の夜、広瀬は約二ヵ月半ぶりでペテルスブルクに帰着した。

広瀬の視察旅行の総括。

かれの旅ちゅうの行動と感想は、左記のようなものであった。

ペテルスブルク（出発）——ポーランドの古都ワルシャワ（古今の感想をうかべ）——ベルリン（ドイツ勃興のわけを察し）——シュテッティン（旧友と握手し）——ロンドン（世界最強の海軍の資質をかんがえ）——ポーツマス、プリマス軍港（その規模をさぐり）——サウザンプトン（商業港と南アフリカへの軍隊輸送の手段などを究め）——ニューカッスル（大工場をはじめ、建造中の初瀬・出雲・磐手のようすを知り）——エディバラ（市の光景に懐古の感をもよおし、「フォースブリッジ」Forth Bridge の橋の規模におどろき）——グラスゴー（造船業をみて、日本のその未発達なのをなげき）——バロー・イン・ファーンネス（「ヴォルカン」造船所で建造中の三笠を見学し）——リバプール（世界一、二の商港をみ、ドックの数が多いことにおどろき）——マンチェスター（その煤烟^{ばいえん}にむせび）

——シェフィールド（多くの鉄鋼所をみ、鋼製品がつぎつぎと作られていくことに感心し）——ふたたびロンドンにもどると（大英博物館、機械館「不詳」、「ワルロー」会社「不詳」の水雷艇などを見学し）——ポーツマス（閑院宮にしたがい、ふたたび「朝日艦および軍港を見学し」）

——ル・アーブル（「ノルマン」 「カネー」の造船所をみ）——パリ——サン・ナゼール（建造中の「吾妻」をみ）——ロリアン（軍港をみ）——ブレスト（軍港をみ）——シェルブール（軍港をみ）——パリにもどる——ル・クルーズー（シュナイダー兄弟の製鉄所を見学。その宏壮なまなこにおどろき）——マルセーユ——ツーロン（他の視察隊とともに軍港をみ）——エッセン（クルップ社の鑄鉄工場をみ、その盛大なことにおどろき）——ハンブルク（大きな商港であることにおどろき）——ビルヘルムスハーフェン（軍港をみ）——キール（軍港をみ）——ベルリン——シュテッティン（再訪し、「八雲」をみ）——ダンチヒ（「シーヒョー」造船所をみ）——エルビング（水雷艇工場を見学）——ペテルスブルク（帰着）

思うぞんぶん時間と金を使ったおかげで、大きな収穫があったといえる。この旅行のおかげで、ヨーロッパを一周したと大口をきくことができるような気がした。広瀬は各国を巡遊することによって、二十世紀の海上権力（海軍力）の競争の舞台（造船所や軍港）や楽屋（軍需工場）をのぞくことができた。楽屋は、商工業品の大きな陳列室でもあり、文明の皮ころを着ているようなもので、とくに日本人のつまらぬうぬぼれが目についた。

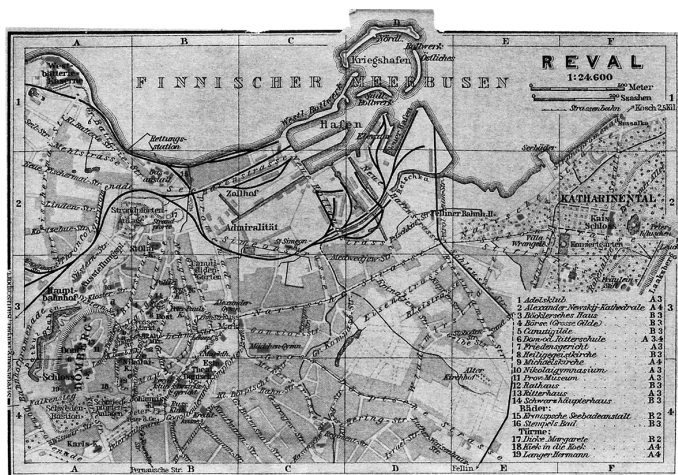
各国の特徴はなにか。たとえていえば、イギリスは「日中」（ひるま）、フランスは「七ツ下り」（午後四時すぎの状態）、ドイツは午前十時ごろの太陽である。ドイツはこれからさらに発展するように思えた。巡遊した主要国は、イギリス・フランス・ドイツであり、ベルギー・イタリア・スイスは、ちょっと足をかけたていどである。パリの万博を見学したが、とくに大発明品をみかけず、日本の出品物はなげかわしいものであり、委員諸氏の責任でもあった。

各国人の人性はどうか。広瀬個人としては、ロシア人がもっともつかしい人種であった。ロシア人ともっとも親しみ交ったためである。ロシアの中流以上の家族は、他とくらべて品性のよいところが認められるからである。

六月、外相ムラヴィョフ伯が亡くなった。行年五十四歳。

暑気がますと、広瀬の知己であるロシア人は、近郊の別荘にでかけるが、広瀬はその訪問にいそがしかった。が、帰京してから執筆をはじめた一九〇〇年のパリ万博におけるロシア海軍部の出品に関する報告書が、八月上旬に完成し、十月『水交社記事』（第120号に掲載された）。

八月七日、広瀬はこの日の夜、バルト海沿岸の旅に出発し、翌日の午前十一時、リガに到着した。リガ Riga はラトビアの首都である。リガ湾より十五キロ上流の西ドビナ川沿岸の砂質の平地に位置する⁽²¹⁾。十八世紀にロシアに併合され、十九世紀にはモスクワやペテルスブルクにつぐ、バ



レヴァルの街

ルチック海の重要な商工業都市となった。

広瀬によると、リガはロシア屈指の都であり、港の繁栄はオデッサにつぐものという。

「レーウエリ」(レーベリ Reval または レヴァル Reval、タリン Tallin と同じ。エストニアの首都、フィンランド湾の南岸の風光明媚の地に位置する) に着いたのはいつのことか。広瀬はリガのオレル駅から汽車にのると、ウォルクやフェリンをへて、レーベリにむかったものであろう。

九日、夜加藤寛治大尉と合流し、レーベリを視察した。当地はフィンランド湾にのぞみ、他のバルチック沿岸の地域より中世のたたずまいのある古都である。十一日まで加藤と行動をとにし、この日わかれた。広瀬はその後、レーベリに一週間滞在し、毎日のようにコヴァレフスキー少将の別荘を訪れると、家族らとしたしんだ。

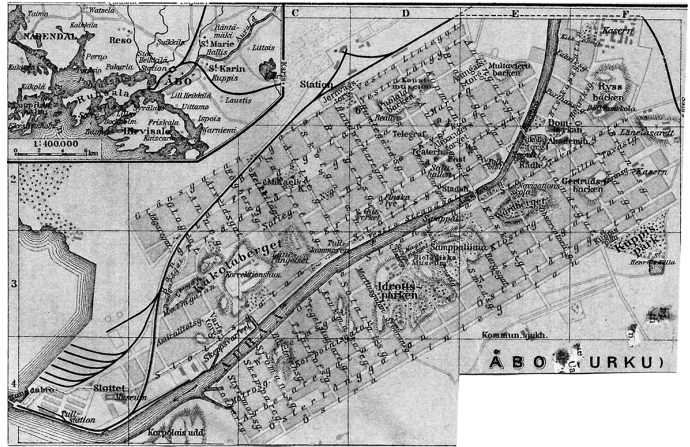
「レーウエリ」ニハ、毎日知己ノ別業ニ到リ、殆ト身ノ旅中ニアルヲ覚エザリキ

*別荘の意。

という(明治33・8・17付、父あての絵はがき)。

十七日、広瀬はレーベリ港より乗船すると、フィンランド湾を航すること半日、「ゲルシグホールズ」(フィンランドの首都ヘルシンキのこと。別称・ヘルシグフォルス Helsingfors) に着いた。広瀬によると、市街は島々が散在する奥にあり、風景のよいところという。当地はロシア語がわかる者がすくなく、ことばにこまった。

この日、広瀬はヘルシンキで一泊すると、翌十八日、フィンランドの一港「アボ」というところに到ったという。これはヘルシンキの西北西二〇〇キロに位置する「アボ・Abo (スウェーデン語)——フィンランド最古の都市——に着いた意である。町はトゥルク(ツルク)ともいい、アウラ川の河口に位置する。アウラ川の河口の両岸に造船所があり、港は冬季も使うことができた。



オーボの街

広瀬はすでに義和団の乱（清朝末、山東地方におこった反キリスト教的排外運動。北京に侵入し、列強八カ国の大公使館区域を包囲した事件）のことを耳にしていたが、この日「同盟軍（八カ国の連合軍のこと）北京ニ入ルノ報ヲ得」たという。おそらく新聞の報道によって、このニュースに接したものであろう。そのため一刻も早く、ペテルブルクにもどりたい気持になった。それまでは、あちこち駆けめぐるつもりであった。

八月二十日、広瀬は約二週間ぶりでペテルブルクにもどった。

九月二十五日、かれは海軍少佐に昇進した。故国にいる家族はみなその昇進をよろこんでくれたが、広瀬本人はかくべつうれしくもなかった。かれと同時に外国へ派遣された者の多くは、すでにことごとく召還され、また朋友のなかには、帰国をすすめる者もいたが、当人は当地において「年来の研究」（ロシア研究）をつづけたいと思っていた。

十一月八日、駐露公使の小村寿太郎（一八五五～一九一一、明治期の外交官。日露講和会議の全権委員、のち第二次桂内閣の外相）は、清国公使に転任のため、帰国の途についた。後任には珍田捨巳（一八五六～一九二九、明治・大正期の外交官。のち侍従長）が任じられた。ロシアの

冬は実際のシーズンでもあり、子どもを連れた家族が広瀬の下宿にやって来たり、また観劇や知人宅でのしろうと芝居やダンスパーティーに出る機会がふえた。

家庭劇では、広瀬も役者として出演を請われ、ときにあぜんとすることもあった。またダンスは、二、三手おぼえたが、生来の無骨者、臆面もなく令嬢たちといっしょに飛びはねることはできず、先方より声をかけられたときは、義理からちょっとまねごとをやってごまかした。が、われながらおかしいやら、恥しいやら、妙な気持がした。

故国からの便りにより、およそ国内事情に通じていた。が、第四次伊藤内閣の行くすえが案じられた。国家は借金をしてでも海軍の第三次拡張をやらないと、その前途があやうくなるとおもった。加藤高明（一八六〇～一九二六、明治・大正期の外交官。大隈の秘書官をへて大蔵省に入り、

のち首相）が外相となり、小村寿太郎が清国公使になったのは適任であったとしても、伊藤の「腰かげん」では、じゅうぶん手腕をふるうことができないのではないかと思った。

また昨今のロシア紙の論調は、すっかり一変し、日本にたいして親しみを寄せるようになった。日本海軍にも新造艦がぞくぞくと加わり、にわかに東洋をにらむ勢いであるが、それはゆかいなことである。

やがて明治三十四年（一九〇一）の新年をむかえた。

三月、当地の文部大臣は、大学から放逐された学生に狙撃され、その傷がもとで亡くなった。学生騒動は、例年のごとく、しょっちゅう起っていた。とくに昨今、ときどき日露開戦などのうわさも耳に入るようになった。四月一日、広瀬のロシア駐在の手当金が年額四〇〇〇円になった。六日、父重武が亡くなった。享年六十六歳であった。広瀬がこの凶報に接したのは、その死から一ヵ月以上もたった五月二十六日のことであり、その夜は涙にくれた。六月十四日、野元大佐がペテルスブルクを発ち、帰途についた。七月四日、広瀬はリガで開催された遷都七〇〇年記念の博覧会を機に、露都より見学におもむいた。リガは昨年視察したところであるが、ちょっと出かけてみる気になった。当地で一泊し、六日夜行でレーベリにむかい、コヴァレフスキー少将の別荘を訪問した。このとき別荘の前庭に毛布をしき、記念写真をとった。

広瀬はレーベリで一泊し、翌七日ペテルスブルクにもどったものであろう。この年の夏、露都は何十年ぶりの暑さであった。医学博士パヴロヴ一家と懇意になり、一週間にいちどは田舎の別荘に招かれ、家族同様のあつかいをうけた。同博士には十歳をかしらに四人の女の子があり、広瀬になつた。同一家から広瀬は「タラスイワノヴィチ」の名でよばれた。

広瀬の上官である公使館付武官（駐在監督官）らは、新旧交替し、新任の者はロシア語を解さないもので、広瀬の用事がふえ、忙しかった。七月四日、リガ訪問の報告「リガ市創立記念産業博覧会記事」が完成した。

八月上旬、黒井中佐がペテルスブルクにやってきた。露都には十日以上滞在し、十五日当都を出発し、モスクワ・セバスポール・オデッサ経由で帰途についた。露都では酒井、黒井、田中、加藤、広瀬ら五人が案内役となり、クロンシュタット軍港、造船所などを見学した。この年の夏から秋にかけて、極東にむかうロシア艦が多かった。

一等巡洋艦「ワリヤグ」号（排水量六、一〇〇〇トン、速力23・8、備砲6インチ砲12門）

水雷通報艦「アムール」号（排水量四七〇〇トン）

〃 「エニセー」号（排水量四七〇〇トン）

戦艦「ペレスウエト」号（排水量二一、六七四トン、速力18、備砲10インチ砲4門、6インチ砲11門）

広瀬はおそらくロシア紙によって、極東に発航する諸艦のうごきを知ったものであろう。が、それは日本にとって「寒心スベキモノ（きもをひやすもの）」であった。

十月上旬、フランスに留学中の森山海軍大尉が来露し、広瀬の下宿に止宿した。十五日、珍田公使は、夫人とともにペテルスブルクを出発し、帰国の途についた。

十月十八日——酒井監督官に東京から電報が届いた。ついに広瀬に帰朝の命が下ったのである。二十二日、電信為替で一〇二四ルーブリ送金したとの電報がきた。これはインド洋を通過してのふつうの旅費であり、少々閉口した。なぜなら、冬期シベリアを通過し、諸方を視察しながら帰国する計画でいたから、それを実行するとしてもこの金額ではまかなえぬと思った。素どおりすらおぼつかないと思った。

これが夏季であれば、おつりが出るかも知れない。が、冬期、バイカル湖や黒竜江（アムール川）をソリで通過するとなると、防寒具などに思わぬ出費をせねばならぬ。それだけにこの金額だとしても心細い。しかし、旅行の方法をかえ、上等の汽車なら、中等のものにすれば、入費（かかる費用）がかさむことはない。幸いことしになってから、年来の喰いこみが回復した。

広瀬の計画では、来年の一月に露都を出発し、帰国の途につくことであった。

十一月七日、「バルト沿岸州ニ於ケル重要ナル諸港」（報告）をまとめた。露都ではソリが縦横に走るようになり、冬景色が現出した。日本ならばかぼかと暖かい小春びよりであれば、郊外を散策したり、目黒や王子あたりに出かける者も多いだろうと思った。二十五日、フォン・ペテルセン家の令嬢マリア・オスカロヴナより、別れの記念に切手を贈られた。二十六日、広瀬は姪にあてて、ふりがな付の手紙をだした。

馨ちゃん！



広瀬のめい 広瀬馨子

御機嫌ハ如何デス。

私ハ元氣デ御座リマス。

来年ノ春ハ歸リマスヨ。

十二月二十四日、広瀬はペテルセン家のクリスマスに出席した。

五 シベリア、満州をへて帰国

明治三十五年（一九〇二）の新年を露都でむかえた。

一日、広瀬はパヴロフ家の送別会に招かれ、黄金づくり七宝焼の大きさ（19・8センチ）を贈られた。翌二日、ペテルセン家で送別会がひらかれ、それに出席した。

一月十六日（ロシア暦一月三日）夜十時——広瀬は「にこらゑふすき」駅より帰国の途についた。露都にいるほとんどの日本人が見送りにきた。また謝絶したにもかかわらず、ロシア人が七名ほどかれを見送った。たとえ異国とはいえ、四年半あまりの歳月をすごしたペテルスブルクを去るのは哀しく、悲喜こもごもの感が去来した。家族とおなじように親しんだロシア人家族があり、中には涙を浮べる者がいた。また子供の中には声をあげて泣きさけぶ者もいて、広瀬はその情に誘われ思わず涙ぐんだ。ロシアに留学中、祖母や父、弟二人をうしなった。本国への首途（旅立ち）にのぞみ、しみじみとした気持になった。

親しく交わった加藤寛治とは、それまでいくどか袂（たもと）をわかつことがあったが、いつもほほえんで別れた。しかし、帰国の折、加藤が涙をうかべながら、家にのこしてきた老いた母のことに及んだとき、広瀬は別れがつかかった。

露国留学の命をうけたとき、意気込んだが、学んだところ、得たものを顧みると、志しの半分も達成せず、むざむざと故国に帰らざるをえないのは、心残りであった。

広瀬をのせた汽車は、翌十七日の午前十時半ごろモスクワに着いた。車中にアレキサンドル劇場の若い女優らがいて、たがいに話に興じることができ、たのしかった。モスクワに着いた広瀬は、



シベリア旅行中の広瀬

「スラヴァンスキー・バザール」Slavyanski Bazaarに投宿した。そこはニコルスカヤNikolskaya九番地⁽²³⁾にある小ホテルである（現存）。

十八日、露都からペテルセン博士がわざわざ来、広瀬を「クルスク、ニジニ・ノフゴロド」Kursk, nizhni・Novgorod 駅に見送った。広瀬は九時四十分発の夜行（食堂、浴室付のぜいたく車）にのった。無限の感慨をのせた汽車は、一路イルクーツクをめざした。同地までのシベリア鉄道の行程は、つぎのようなものであった。

モスクワ（1・18）——ペンザ——サマラ——ウーファ——チェリヤビンスク——オムスク——トムスク（1・24）——クラスノヤルスク——イルクーツク（1・27）。

イルクーツク（イルクーツク州の州都。シベリアの行政・経済の中心地）に着いたのは、一月二十七日のことだった。モスクワからの距離は、五一〇〇露里余である。イルクーツクはモスクワより寒気がきびしく、毎日が風雪であった。二十八日、ホテルの給仕に、

——きょうの寒気はどうか。
と尋ねると、

——それほどでもないです。零下18度です。

と答えたので、じつに恐れ入った。二日後の三十日の朝、給仕との会話は、また寒さのことであった。

——けさもだいぶ寒そうだな。

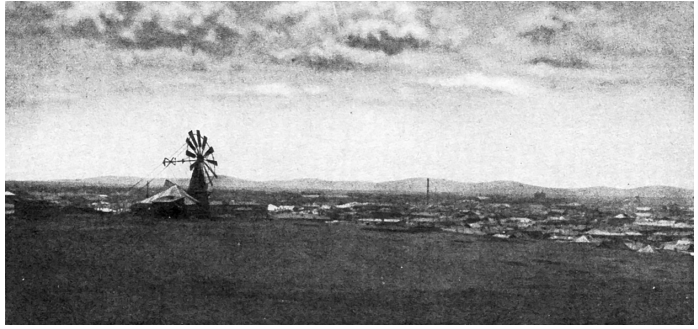
——いいえ、だんなさん。たいへん暖かいです。

——何度あるかね。

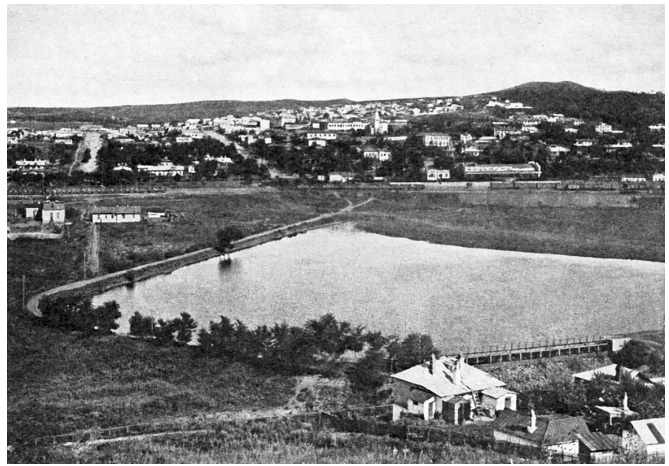
——たった14度です（零下）。

イルクーツクを発ったのは、いつのことか。バイカル湖畔までは汽車でいき、そこからソリで同湖を横断した。ソリを利用したにはわけがあった。イルクーツクからそこに行く鉄道がなかったからである。

バイカル湖のまわりはけわしい山脈にかこまれ、そこに鉄道を通すためにはたくさん



満州里の街



ブラゴベシチェンスクの街

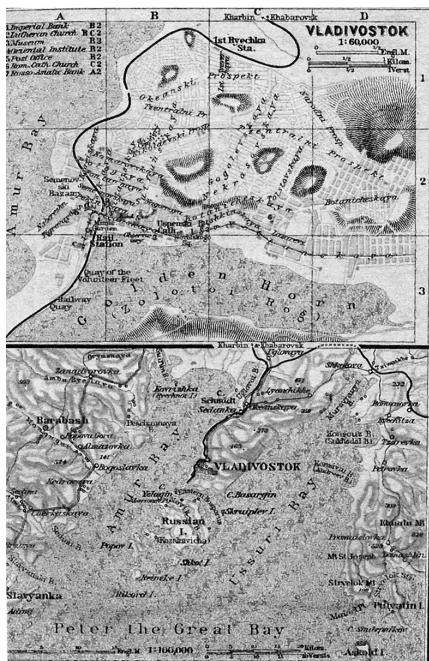
隧道（トンネル）を掘らねばならない。ロシアは平地が多いため、トンネルを掘る技術者がすくないばかりか、費用や日数もかかる。そこで考えたのは破冰船（機関車や汽車を二十五台ひき入れることができる）である。中でも「バイカル」「アンガラ」の二汽船は、四千数百トンもある船であった。ほかに大小数十隻の破冰船があった。

広瀬はソリにて、距離にして四十二露里、四時間かけてバイカル湖を横ぎり、対岸のペレイメンナヤ駅についた。そこからまた汽車にのり、バイカル線の起点であるミイソワイ駅を通過し、チタ（十七世紀に起源をもつ古い町、デカブリストの流刑地）、カラムイスカヤ駅をへて満州にむかい、満州里（黒龍江省西部の町。シベリア鉄道の連絡地点）に着いた。同駅に

着くと、すぐ引きかえし、カラムイスカヤをへてスレチエンクスに出、同市でさらに入念なソリ旅行の準備をととのえた。用意したものは、ソリ三台。第一車は乗客用（二人のり）、第二車と第三車には、衣服や食物をつんだ。

スレチエンスクからシルカ、アムール（黒竜江）をソリで下ること六昼夜と十時間、二月六日午後六時にブラゴエシチェンスク（アムール州の州都、ブラゴベシチェンスク Blagoveshchensk のこと。アムール川にゼヤ川が合流する地点に位置）に着いた。同市において柔道の同門の士と会い、ひさしぶりにけい古着すがたをみた。

二十四日午後一時、ふたたびソリでアムール川をくだりはじめ、四昼夜と八時間、午後八時ハバロフスク Habarovsk（中国との国境にちかく、アムール川とウスリー川との合流点右岸に位置）に着いた。「ロンドン・ホテル」に投宿し、総督府を表敬した。この間の旅のようすは、天も地



ウラジオストク

も、人も馬もまっ白、飛雪が顔にあたった。
 バイカル湖以東の町にも日本人がいた。その業務は、写真師、洗たく屋、石工、大工などであり、ほかに醜業婦（売春婦）がいた。日本人という、むしろこの種の婦人を代表するものという。

三月三日、広瀬は汽車でウラジオストク（ウラジオストク Vladivostok、ハバロフスクの南南西六四〇キロに位置、港町）にむかい、翌四日に当地についた。旧知の領事兼貿易事務官・川上俊彦が広瀬を駅にでむかえ、同人宅に十日間やっかいになり、歓待をうけ、その間に日本写真館で記念撮影をした。

この地に着いてから、日本に帰ったような気になった。川上夫人とははじめて会ったが、懇切に遇された。着いた日に、おしる粉をねだり、トーフのみそ汁をむしんした。当地ではポーセット湾、アメリカ湾などを視察したかったが、日英同盟の余響をうけ、いろいろわさも立っていたのでやめることにした。それよりも東清鉄道こそ研究の価値があるように思えた。

十四日、午前九時、ウスリー鉄道の汽車でウラジオストクを発し、旅順をめざした。まずウラジオよりニコリスコエに引きかえし、そこから東清鉄道づたいに南下し、ハルビンを経て旅順にいたるものである。しかし、その行程は不愉快なものであった。旅行の途上で「日英同盟」（ロシアの南下に対処するために結ばれた同盟）の発布をみ、その影響がさまざまな形で身にかかって来たからである。新聞などが、いまにも日露戦争はじまるとか、すでに始まっていると書くものだから、日本人に猜疑の目をむけるロシア人が多くなった。

広瀬が日英同盟が発布したことを知ったのは、ハバロフスクにおいてであったが、ソリ旅行中も何度もしやな目にあった。

黒竜江のミハイロ、セメヨノフスカヤ駅についてから、書記に馬を出すようにいったが、無愛想なうえ、すぐ出そうとはしない。そのうちにパスポートを見せてくれというから、すでに三つもっているが貴様にみせるようなも

のでない、と拒否した。そのとき部屋にコサックの隊長がいた。前日通過したラッデ駅の守備隊長から電報が来ており、広瀬を取り調べるために待機していたように思えた。

広瀬がその電報を一見したところ、日本の海軍士官が当地方を通り兵備を調査しているから、その士官の行く先を取り調べるようにとあった。

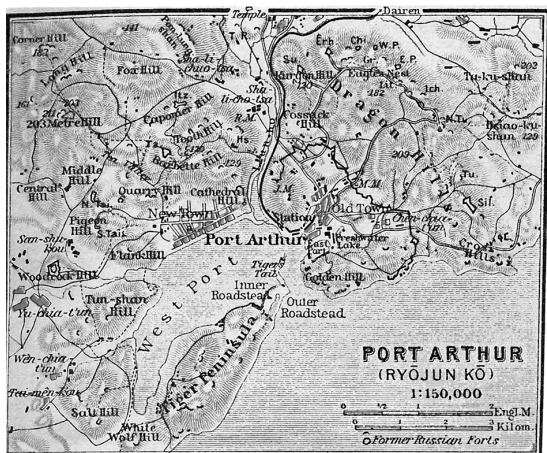
広瀬は兵備に関することなど調査したことはなかった。ただ途中の駅伝で、雪中の輸送力を知るために、この駅には馬が何頭いるかと尋ねただけだが、それがスパイ行為とみられたようだ。広瀬はロシア外務省総務長官の署名がある特別な旅券をみせたら、隊長はそれを写し取り、すぐ返してくれた。馬もさっそく手配してくれた。広瀬は軍服を着ないで旅行していたらスパイ容疑で拘留されていたであろう。

ウラジオストクからハルビンにむかう途中、グラデコーウオ駅（シベリアと満州の境）で汽車の切符を買おうとしたら、兵士が乗客を調べていた。広瀬が切符をもとめると、総督の許可書をみせるようにいったので、外務省発行の例の特別な旅券をみせた。相手は文字にくらいようで、それがどんなものかよくわからなかった。たまたま旅行中の陸軍大佐をつかまえ、その者によんでもらったら、この旅券は満州通過を許可していない、というようなことをいった。そこで広瀬は兵士に隊長のところまで案内させ、どこを通るも小官の勝手であるといって迫り、ようやく通過を許可させた。このようなゴタゴタのため、あやうく汽車にのりおくれるところであった。

ハルビンから旅順にむかう途中、ある駅で食事をしていたら、ロシアの陸軍士官がやってきていろいろ尋ねた。ハルビンの総督を訪問しなかったか。時間がなく、軍服もよごれていたので訪ねなかった、というと、満州通過の許可書をみせろという。それはもたぬが、外務省発行のつくべつのパスポートをみせると、それを書き写した。そしてどこかに長文の電報を打った。返電がきて抑留されはすまいかと心配したが、そのことはなかった。

この士官はその他の用事もあったのか、旅順までおなじ汽車であった。ほかにもう一人うさんくさい士官がいて、話しかけてきた。その者は帰隊することとで、旅順までおなじ汽車であった。満州では、広瀬が通過する先々の駅に電報をもって知らせが行っており、また車中においてロシア軍人がつきまとい、乗客から情報を収集していた。広瀬は列車内であるポーランド人と親しくなり、その者がいろいろ注意を与えてくれた。停車のさい貴君がプラットホームを散歩しないとき、各駅守備の士官や兵卒が、なぜ日本の海軍士官は下車し、ぶらぶら歩かないのか、どんな様子かと何度も聞いたという。貴君は目をつけられているから、ご用心なさるべしといった。

またその者がいうには、先ごろハルビンで日本のスパイが捕えられ、絞首されたといううわさがあるが、貴君はご存知ないのかという。広瀬は



旅順港

ロシア側から注視されているとなると用心が肝要とおもい、ウラジオストクで写してきた満州の鉄道図を、懷中から取りだして見るのは危険であると判断した。だから汽車が駅でとまって、一度もそれを取りだして照りあわせることはできなかった。

車中で名刺を交換し、お互い談話を試みる乗客やロシア陸軍の軍人は、話が日英同盟におよぶと、いろいろことをもらした。日本はイギリスにだまされたのだ。日本のために惜しむ、とか。はなはだしいのは、日本はじぶんの實力をわきまえず、わがロシアにはむかうのはしゃくである、という者までいた。

旅もおわりに近づいたころ、大連から一人の海軍士官が乗り込んできた。お互い海軍士官であったから、すぐ懇意となったが、どうもその者は監視のために特派されたスパイのように思われた。旅順に着いたら、水交社（海軍将校の親睦団体。ここでは将校クラブほどの意）に案内するから、そこに泊ったらよい、としきりに勧めた。広瀬は長旅で衣服もこのように汚れており、皆さんにご面倒をかけるから、と断った。が、相手はなかなか聞き入れない。

旅順に着いたら、水交社に電話し部屋をとるから、しばらくまつようにいったが、広瀬は断然これをこわった。広瀬は馬車にのり、三軒ほどホテルさがしをやり、ようやく一軒みつけた。先ほどの士官から開放され、ほっとしたと思ったら、また宿までやって来て、水交社に泊るよう重ねて勧めた。が、もう宿もきめたから、といってその厚意を謝し、その勧告にしたがわなかった。その士官はしぶしぶ帰っていった。

広瀬は三月十九日午後一時十五分、旅順に到着した。

広瀬が旅宿としたのは、新市街（旅順の駅から二キロほどの所にある）のホテルであろう。翌二十日、広瀬は日中にアレクセーエフ総督（大将）をその官邸に表敬訪問したのち、その夜東清鉄道会社の汽船「シルカ」号にのり長崎にむかい、二十八日午後七時ごろぶじ東京に帰着した。

三月三十一日、広瀬はこの日海軍省をおとずれると、古タヌキ主人（でっぷりと肥えたタヌキ入道）と面会し、帰朝を報告した。四月六日、父の一周忌に郷里の竹田^{たけだ}（大分県南西部、

現・竹田市)をおとずれた。四月六日、ロシア駐在を免ぜられ、戦艦「朝日」(一万五四三トン)の水雷長兼分隊長となった。五月三日、海軍省において、「シベリアおよび満州旅行」についての概況を講演した。

帰国しておよそ二年後——明治三十七年(一九〇四)二月十日、日本はロシアに宣戦を布告した(日露戦争の開始)。それはその後の広瀬の人生に暗転をもたらす大事件であった。広瀬が出国し、帰国するまでのおもなる動向は、いままで述べた通りである。かれがロシアに滞在し、シベリア、満州をへて帰国する明治三十年(一八九七)九月末から同三十五年(一九〇二)三月末までの約四年半は、あるいみでマルコ・ポーロさながらの旅行談でもある。この間にかはロシアを南から北に、さらに北から南に、また西から東に、文字どおり縦横に飛びあるいて視察と見聞にとめ、さらにイギリス、フランス、ドイツなどの先進諸国をも訪れ、海軍留学生として軍事状況の把握につとめた。かれはまれにみる観察者、大旅行家であった。が、軍事探偵としての語学力さえじゅうぶんに備わっておれば、その成果に大いに見るべきものがあつたであらう。が、じつさい志したほど実をむすばなかった。

かれがロシアですごした時期、日露でどのような事件(出来事)が起つたのか、いまその主なものを年表式にしるすと、つぎようになる。

1897	西暦 和暦	日	本
明治30年			
			③ 片山潜がキングスレー館を開館。足尾銅山の鉱毒被害者八〇〇余名、請願のため上京。 ⑨ 長野・新潟・富山で米騒動おこる。 ⑫ 松方首相、辞表を提出。 島崎藤村の『若菜集』を刊行。
			② レーニン、東シベリアに追放の判決をうける。 ③ 蘇州に日本租界をもうける。 ⑥ ロシア、11時間半の労働制の工場法をさだめる。 ⑨ 広瀬、ペテルスブルクに着任。 ⑫ ロシアのビルナで、ロシア・ポーランド・リトアニアのユダヤ人ら社会民主主義同盟を結成。

注・①とか②は、一月、二月の意。

1901	1900	1899	1898
明治34年	明治33年	明治32年	明治31年
12 田中正造、足尾鉍毒事件で天皇に直訴。 11 英外相、日英同盟草案を林公使に手わたす。のち元老会議において修正案を可決。 6 桂内閣の成立。 5 伊藤首相、財政をめぐって辞表をだす。 3 貴族院で増税案を可決。 2 八幡製鉄所の操業開始。 1 黒竜会の結成（会長・内田良平）。	10 第四次伊藤内閣の成立。 6 桂内閣の成立。義和団の乱により日本出兵。 3 社会運動の激化にともない治安警察法を公布。 2 足尾銅山被害民二〇〇〇名、上京の途中、館林で警官隊と衝突。 1 社会主義協会の発足。 この年恐慌がおこり、紡績業において操業短縮をおこなう。 幸徳秋水『万朝報』において非戦論を発表。	8 私立学校令を公布。 土井晩翠『天地有情』を刊行。 7 台湾銀行の創立。 2 外国人の内地雑居をゆるす。 1 中学校令、高等女学校令を公布。 『中央公論』の発刊。	6 幸徳秋水、社会主義研究会をおこす。横山源之助『日本之下層社会』をあらわし、翌年刊行。 4 限板内閣の成立（最初の政党内閣）。のち分裂。 1 第三次伊藤内閣の成立。 日露議定書の改訂。
2 ロシア、清国に満州・蒙古・中アにおける権益独占および北京への鉄道敷設をめぐる協約草案を提示。ロシアで学生運動がたかまる。 5 ペテルスブルクのオブホフ軍需工場でストライキおこる。 7 連合軍、北京から撤退をはじめめる。 11 李鴻章亡くなる。遠世凱が直隸総督となる。ロシア、満州における鉍業利権をうる。	11 朝鮮、ロシアと馬山浦付近を租借する秘密協定をむすぶ。 8 連合軍、北京を攻撃。光緒帝、西太后ら西安にのがれる。ロシア、黒竜口省を占領。 6 義和団の乱により、列国共同出兵（北清事変）。 4 義和団、北京に入る。 ドイツ公使、殺される。中国、列国に宣戦布告。	11 フランスが広州湾を租借。孫文ら興漢会を結成。 10 義和団、河北省におよぶ。 9 アメリカ、中国の門戸開放を提議。 8 露仏同盟を更新。 4 福州に日本租界を設ける。九竜住民、イギリスの九竜租借反対運動をおこす。	9 この年、列国の中国租借があいつぐ。 6 西太后、光緒帝を幽閉して執政となる。 5 イギリス、九竜半島を租借。 3 ドイツが膠州湾を租借。ロシア、旅順・大連を租借。 義和団、河北・山東省のさかいで排外運動をはじめめる。

1902	
明治35年	
10 閣議で海軍拡張案を決定。 7 紡績業における第四次操短はじまる。呉海軍工廠で職工五〇〇〇人ストライキおこす。 6 株式市場における大暴落。東大の七教授、対露強硬案を発表。小村、ローゼン間で日露交渉はじまる。 4 伊藤、桂、小村ら対ロシア策を協議。 3 広瀬、帰国する。 1 ロンドンにおいて日英同盟協約に調印。	1 シベリア鉄道の開通。 4 ロシア、満州から撤兵せず、清国に新要求をだす。 7 東清鉄道全線の営業開始。南ロシアの工業地帯でゼネストおこる。 8 ロシア、旅順に極東総督府をおく。 10 ロシア軍、奉天省域を占領。

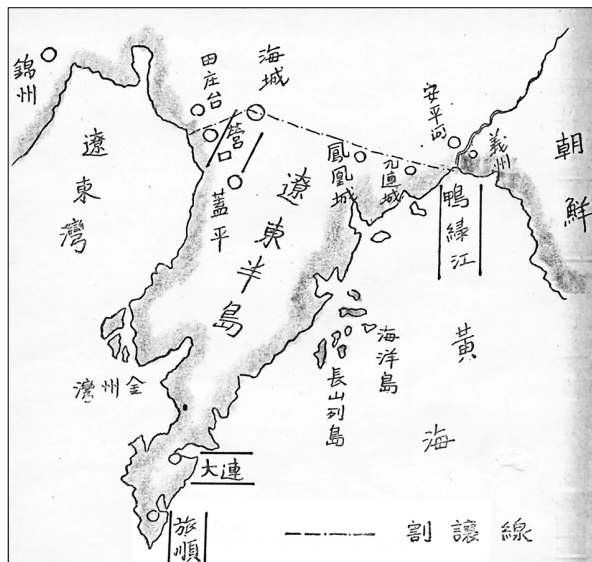
六 ロシアの東方侵略

ロシアの東漸（とうぜん）（だんだん東へ進むこと）はきのうきよう始ったわけではなく、十四世紀に起源をもつ。インド北部（14 c）、カザンとアストラハンの征服（16 c）、トボルスクの建設（16 c）、トムスクの建設（17 c）、オホーツクの建設（17 c）、カムチャッカ半島をとる（18 c）、大連・旅順を占領（19 c）、満州を占領（20 c）。

ロシアの侵略主義は、極東（東のはて）におよぶまで六〇〇年以上の歴史をもっている。同国の東方政策を活気づけ、それに拍車をかけたのは日清戦争（朝鮮をめぐる戦争。一八九四〜九五）であった。この戦争によって東の大国（清国）が小国日本に敗北したことで、そのもろさが世界に知られたばかりか、その弱みを見すかされた。ロシアがかねて狙っていたのは満州であり、不凍港がある大連・旅順にその勢力を扶植（ふしよく）（植えつける）ことであった。

日清戦争の結果、わが国は清国から台湾と償金二億テール（邦貨三億一〇〇〇万円に相当）をえ、遼東半島（中国遼寧省東部の半島）を割譲させ、朝鮮が独立国であることをみとめさせた。しかし、満州南下を策するロシアは、フランスやドイツを誘い、極東の平和維持を口実に、遼東半島の返還を日本にせまり、日本はやむなく受諾した（三国干涉）。ロシアの同盟国ドイツは、ロシアの極東政策を援助し、かつけしかけた。

一八九七年（明治30）十一月上旬——ドイツの水夫、宣教師らが清国人によって暴行をうけたり、殺害されるといった事件が相ついでおこった。



遼東半島の略図

ドイツ公使フォン・ヘイキングは、月のはじめに清国の南方各地を巡回ちゅう、随行の水兵が漢口（武漢北部）で暴行をうけた。また十一月一日、山東省曹州に住むドイツ人宣教師ヘウル、ニイエスの兩人は、夜間に清国人によって殺害されたので、同公使は急ぎ北京に帰った（矢野公使が外相・西 徳次郎に送った機密第64号電）。

ドイツは、これらの事件を口実とし、にわかに十一月十四日、軍艦に兵六〇〇名をのせて発航させ、膠州湾（山東省東部、水深の大きい良港）を占領させた。のち租借すると、青島市街を建設し、東洋艦隊の根拠地とした。

ドイツによるその占領は、やがて貸与となった。ロシアは膠州湾の占領は、極東の均勢をやぶるものと清国に抗議し、久しく欲しいと思っていた遼東半島をえる口実とし、同年十二月十八日直ちに艦隊を旅順口に派遣すると、大軍を上陸させ、同地を占領した。

旅順（遼東半島南部、黄海にのぞむ港。古称・獅子口、別称・ポート・アーサー（英）。日露戦争の激戦地となる）は、いったんロシアに占領され、翌一八九八年（明治31）三月、露清間で旅順・大連の租借条約をむすび租借した。ロシアは、旅順口を占領した理由、同所に艦隊を派遣

したそれを、駐日ロシア公使をして西外相につぎのように伝えた（原文はロシア文）。その内容の主旨は、左記のようなものである。

——ドイツ艦隊が膠州を占領し、同地の港湾に期、限なく、碇泊する意向があるので、皇帝陛下はわが太平洋艦隊の一分隊を、一時、碇泊のため、旅順口に発航する必要をみとめた。清国政府はすでにこの件について同意している。

注・傍点は引用者による。

これに対して西外相は、清国に駐劄する矢野公使に、ロシア公使の通告（一時碇泊）は事実かどうかたしかめる旨訓令した。そこで矢野公使は直ちに総理衙門（清国の行政機関）に李鴻章（一八二三～一九〇一、清末の政治家。のち直隸総督、北洋大臣）と張蔭桓（一八三七～一九〇〇、清末の外交官。のち失脚し、新疆に流され

た）を訪ねると、事実の確認につとめた。両大臣の回答は、左記のようなものであった。

清国政府はロシア艦隊が旅順口に碇泊することに同意したが、同艦隊の碇泊は、一時的なもので永久のものではない。碇泊の要求は、数日前に在北京のロシアの臨時代理公使から、友好を表わす機会をえるためとして申し入れられたものである。わが政府はロシアからの援助を求める機会をえたいから、同意をあたえた（西外相宛矢野公使電——12・19発）。

文中のロシア側の「友好を表わす機会」とか、清国側の「ロシアからの援助を求める機会」といったことは、あいまいであり、逃げ口上のようにも受けとれる。西外相は折りかえし、つぎのように返電した（英文電）。

——ロシア艦隊の一部が、旅順口に碇泊しているのは一時的なもの（temporary nature）だとする貴官の報告をじゅうぶん信用し（with perfect confidence）、聞きおきます。

また在ドイツの宮岡代理公使やロンドンの加藤公使からも、現地の新聞の論調について西外相に打電している。ドイツでは膠州湾の占領以来、各紙は独露間の友好的関係をくり返し、ロシアの旅順口占領に関しては同情的評論をなしているという。

また政府の機関紙は、ロシア軍による占領に、ドイツの政治家はおどろいていないという。ロシアが該港^{がいかう}を得ることは数年前から考えられていたことであり、右占領はドイツの利益と矛盾しない。膠州および旅順の同時占領をもって、極東における独露の共同運動の継続的行為とみなされる、と報告した（西外相宛宮岡代理公使電——12・21発）。

また加藤イギリス公使は、機秘電をもってつぎのように報告した。

ロシア艦隊が旅順口に入ったというニュースが突然当地に伝わったのは十八日の午後のことである。その後、各方面からの電信により続々とニュースが飛びこんできた。しかし、ロシアが本当に同所を占領したのか、あるいは冬の碇泊所（冬ごもり）として使うためにやって来たのかあまいまいという。ロシア発のロイター電、ロシアの有力紙は、「永久占領」の文字を使わず、その使用を避けており、また在北京の『タイムズ』紙の特派員の報告も明言していない。

加藤の観方はこうである。ロシアの真意は、一時的な使用ではない。いったん旅順に足をふみ入れた以上、他の強制がないと同所を立ちのくことはない。昨日の『タイムズ』紙の論調は、「事実上の占領」といったものであった（西外相宛加藤公使電——明治31・1・26発）。

ともあれ、ドイツの膠州湾占領の事実につづいて、ロシアの旅順占領のニュースは、ヨーロッパ人の耳目をおどろかせ、この老かいな大国がつ

いにドイツにならって清国領の“分捕り”を開始したように思えた。

一方、ロシアは清国政府に迫まり、旅順・大連の租借の件を協議しはじめ、一八九八年（明治31）三月、露清両国間において「パプロフ条約」が締結された。ロシア側は、提議を貫徹するために、李鴻章には五〇万ルーブル、張蔭桓には二五万ルーブルの賄賂を約束したらしい。²⁴ いわゆるパプロフ条約（全九条）の中味はどのようなものであったのか。その要点をかいつまんで記すとつぎのようになる。

第一条……ロシア艦隊の防御と保護にとって必要な一根拠地を清国北海岸に得さしめるために、清国皇帝はロシア国に旅順口、大連湾およびその付近の水面を貸与することを約す。ただし、この借地は清帝国の主権を侵害するものでない。

第二条……貸与される土地の限界（さかい）は、大連湾の北方におよぶ。

第三条……租借年限は二十五ヵ年。期限がきたら両国の協定により、のばすことができる。

第四条……ロシア国に貸与する土地および付近の水面における陸海軍の行動、区域内の政治は、ロシア官吏に委嘱される。清国軍隊はこの区域内に駐屯できない。清国人の居住、退去は各人の自由とする。

第五条……租借地の北方に中立地帯をもうける。この地方の行政司法は、清国官吏がおこなう。

第六条……旅順口は、ロシアと清国両国の軍艦の専用とし、他国艦隊の出入りをゆるさない。大連湾は一部軍港とし、他の部分は商港とし、各国に公開する。

第七章……旅順口、大連湾は緊要の地であるから、ロシア国の費用で、陸海軍の兵舎・とりで、その他軍事上必要な設備をもうける。

第八条……清国政府は、一八九六年（明治29）東清鉄道会社に鉄道敷設を許可した条項を拡張し、この条約に調印後、東清鉄道より分岐し、大連湾にいたる支線、営口（遼寧省南部の河港）および鴨緑江（中国と北朝鮮の国境をなす川）の中間、遼東半島の海岸へ達する支線の敷設をも許可する。²⁵

第九条……本条約は記名調印の日より発効する。批准交換はペテルスブルクにおいておこなう。

かくしてロシアは、清国とのこの条約により、旅順口・大連湾の租借権のほか、東清鉄道の支線や西シベリア鉄道に連絡できる鉄道の敷設権を

獲得した。ドイツにつづいてロシアの清国領割取の影響は大きく、イギリスはドイツやロシアに対抗して威海衛（山東省北東部の港湾）を、フランスは広州湾（華南——広東省の港湾）を租借するにいたった。

この間にロシアは、シベリア鉄道と東清鉄道の工事をいそぎ、東アジア侵略の準備をすすめていたが、一八九八年（明治31）八月、ロシア皇帝は国際平和会議をハーグにおいて開くことを提唱した。しかし、うらでは陸海軍の拡張につとめていた。広瀬がロシアのまやかしの万国平和会議の提言に、はらをかかえて大笑したのは、このときである。

北清事変（義和団の乱）の勃発とロシアの満州占領。

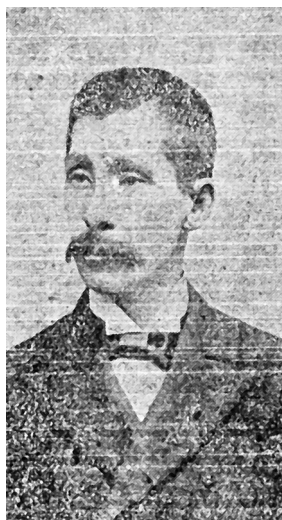
一九〇〇年（明治33）一月——欧州の列強が清国の弱身につけこみ、蚕食し、自国の勢力範囲をひろげていることに激怒した清国人は、山東省の各地において蜂起した。その中心となったのは、義和団の一群である。かれらは“抹清滅洋”をスローガンに、立ちあがったのだが、“拳匪”とも“団匪”とも呼ばれた。義和団は、一種の秘密結社であり、拳術や棒術などの武術に習熟していた。かれらは暴徒化し、キリスト教会堂を破壊し、教徒を虐殺した。五月ごろになると、一般の民衆も加わり、大きな勢力となり、北京をとり囲んだ。各国の領事館や公使館も重囲に陥り、危険にひんしたので、列強は外交団を救うために連合軍を派遣した。八月中旬、ついに北京のかこみを解くことができた。

義和団は、“御用拳匪”と呼ばれるほど、うらでは宮廷や官兵と通じていた。清帝と西太后（一八三五—一九〇八、同治帝の生母。政治を独裁）は、北京を脱し、西安にのがれた。

ロシアは、北清のこの動乱を好機としてとらえ、満州全土をその支配下に置こうとした。

北清事変の直接原因はなんであったのか。義和団の爆発原因は、一つではないようだ。⁽²⁶⁾ その一因となったのはロシア兵によるブラゴベシチェンスク（武府ともいう。黒龍江とゼイヤ川との合流点、人口約三万三〇〇〇人の町）における中国人の虐殺である。一九〇〇年七月下旬から八月上旬にかけて、ロシアは満州地方の清国官民が敵対せることを口実に、三〇〇〇名の清国人を黒龍口に投じて殺した。⁽²⁷⁾ それにはげしくいきどおった馬賊は、げきを飛ばし、同胞のうらみを晴らすために、ゲリラ戦を開始した。東清鉄道の工事の大半はすでにおわっており、ロシアは馬賊の横行と鉄道防衛を口実とし、東部シベリア軍管区の兵十六万二〇〇〇を動員し、沿線の諸用地に兵を駐屯させ、満州を占領した。⁽²⁸⁾

そのころ朝鮮の鴨緑江の左岸に、ロシア人ベソブラゾフが経営する伐採会社があり、ロシア帝をはじめ有力者がその株主となって利益をえてい



外務大臣 小村寿太郎

た。この商人は、極東におけるロシアの侵略政策を主張していた。⁽²⁹⁾

北京の義和団は、一九〇〇年八月中旬をもって、連合軍によって掃蕩されたが、ロシアは馬賊鎮定や鉄道防衛を理由に、満州における占領をとかなかった。日本は東アジアの平和維持を名目にロシアと協定をむすびたいと思い、伊藤博文をヨーロッパに派遣した。一九〇一年（明治34）十一月、伊藤はペテルスブルクに着くと協議をはじめたが、ロシア側は伊藤の日露協商家に難色をしめした。一方、東アジアの錯綜する問題——ことにロシアの満州や朝鮮への侵略の脅威から日英が、何か協定をむすぶように呼びかける声がおこりはじめた。『セントジュームズ ガゼット』『スタンダード』『タイムズ』らの英紙、『ジャパンガゼット』などが日英協商を呼号した。

イギリスは、明治三十一年（一八九八）二月、加藤公使があるパーティで植民大臣チェンバレン（一八六九—一九四〇、イギリスの保守党の政治家）と会ったおり、極東問題の解決のため、日本と協約する意思があることを伝えた。⁽³⁰⁾ 日英同盟は、第四次伊藤内閣が崩壊し、明治三十四年（一九〇一）六月、桂内閣が成立したとき、具体的に進行していた。同年七月中旬、林公使は桂宛に、英政府が日英同盟をむすぶ意があることを打電してきた。⁽³¹⁾

日本側は、できるだけ早く進行中のイギリス政府との交渉を妥結したかった。小村外相は、日英交渉を取りいそぎ完結するために、ロンドンの林公使に「訓令ヲ遵守シテ敏速ニ行動シ」遅延をきたすものを避けるよう訓令した（明治31・12・28発）。日英同盟は翌明治三十五年（一九〇二）一月三〇日ロンドンにおいて調印された。伊藤と井上馨はかねて日露協商派であり、日本とロシアが利害の調整をはかり、協商をむすぶことを構想していた。が、ロシアにおける伊藤の行動は、日露協商の成立をおそれたイギリスをして、かえってその妥結をはやめた。

日英同盟の主旨は、ロシアの南下策に対処してむすばれた同盟である。その内容は――

- 一 日本はイギリスが清国において有する利益をみとめる。イギリスは、日本が清国や韓国において有する利益をみとめる。
 - 二 同盟国の一方が、他と戦争になったとき、他の一国は厳正中立をまもる。
 - 三 戦争の相手国が、他の国と同盟を結んだばあい、共同で戦闘にあたる。
- これは日英両国の攻守同盟——軍事同盟にはかならなかった。この同盟によって将来予定される日露戦争は、ほぼ既定の事実となった。

この同盟は、ロシアにすくなくならず打撃をあたえ、満州のロシア軍をけん制するのに役だった。ここにおいて、ロシアはいつとき世間の人目をあざむくために、清国に満州を還付（もとにもどす）^{かんぷ}することを策し、同年四月八日「露清条約」をむすんだ。この協定によると、調印の日から十八ヵ月以内に、ロシアは満州全土から漸次撤兵せねばならなかった。撤兵の期限は三期にわけられていた。

第一期……六ヵ月以内に、奉天省より。

第二期……六ヵ月以内に、吉林省より。

第三期……六ヵ月以内に、黒龍江省より。

ロシアは、撤兵といっても、その第一期に先んじ、わずかに駐兵を移動させたにすぎなかった。軍を奉天省の西南部、遼河以西より撤退させると、これを吉林省の各地に駐留させた。

第二期の撤兵期日（一九〇三・四・八）が来ても、ロシアは撤兵に着手せず、かえって駐兵の一部を移動させ、韓国との国境（鴨緑江右岸）や営口付近に配した。英米の諸新聞はロシアの撤兵の条約不履行を論難し、清国政府もロシア代理公使ブランソンに詰問したが、弁明と行動は一致しなかった。

そればかりか、慶親王^{けいしんおう}にさらに七カ条の要求をつきつけてきた。そのおもな骨子は、（一）満州のいかなる部分も、他国に租借・譲渡・売却しない。（二）満州の港、都市を新たに解放しない。外国貿易にたいして満州を閉鎖する。（三）満州北部におけるロシア権益の優先をみとめる、⁽³²⁾といったものであった。日本は英米の公使らと清国政府に厳重な警戒を発した。清廷はロシアの要求を拒絶し、あわせて協定の履行を要請した。

ロシアは形勢が不利なのをさとり、この要求を撤回した。

ロシアの侵略政策は、とどまることを知らず、南満州の強化につとめた。旅順口の防備として要塞の修築と砲台の増設につとめ、一九〇三年（明治36）夏には、旅順に「極東総督府」が設置され、アレクセーエフが総督に任命された。ダルニーと呼ばれた市街も建設され、太平洋艦隊を同港においた。また一方では、韓国領侵入が活発化し、一九〇三年四月に、鴨緑江左岸の竜岩浦^{リョアンポ}に伐林事業を理由に基地を、八月には砲台を築いたりした。日英両国は、ロシアのこのような行為をみとめがたいとし、韓国政府に注意をうながした。が、ロシアは同国に迫り、竜岩浦の土地租借を受け入れさせた。

竜岩浦は、南岸の河口にある韓国の一寒村にすぎなかった。が、ロシアは韓国政府から二十万坪ほど租借してから、堤防を築き、市街建設や木



駐日ロシア公使・ローゼン

材集中地とする大計画をたてた（同人「鴨緑江附近」『国家学雑誌』第19巻第10号所収、明治38・10）。日本はここに至ってロシアと交渉する必要があると感じ、外相小村はまず駐英林公使にイギリス政府の了解をとるよう訓電した（7・1）。イギリスの了解をえた日本は、駐露公使栗野に訓令し、ロシアと協定をむすびたい旨、ラムスドルフ外相に伝えた（7・31）。露帝は諸大臣をともない外国旅行に出るため、ロシア側は交渉地を東京とすることを駐日公使ローゼンに電訓した。全権委員として、左記のものが任命され、交渉にあたった。

日本側 小村外相

ロシア側 ローゼン駐日公使

小村は協議の基礎となる六カ条の提案をおこなった（8・12）。その要点は、――

- 一 清・韓両国の独立および領土保全（保護して安全をまもる）の尊重、機会均等の保持。
- 二 韓国および満州における日露両国の利益の相互承認。
- 三 韓国における日本の内政改革（韓国の施設を改良するための助言および援助）の専属権など。

これにたいしてロシア側は対案（第一次）を日本側にしめた（10・3）。

一 韓国の独立と領土保全をお互い承認する。

二 韓国における日本の特殊権益をみとめるが、韓国領土を軍事目的に使わぬこと。

三 北緯39度（元山と平壤とをむすぶ線）以北を中立地帯とする。日露は同地帯に軍隊を駐留させないこと。

四 満州とその沿岸は、日本の利益範囲外とすること。⁽³³⁾

日露交渉は、十月六日より正式にはじまり、十二月中旬まで前後十回おこなわれ、この間に修正案をしめし、ロシア側の再考をうながし、また日本は大きな譲歩をしめた。この第一次対案

提出後、日本は清国との間で追加通商条約をむすび、これによって奉天と大東溝が開放された（10・8）。

一九〇四年（明治37）一月六日——ローゼン公使は、ロシア側の最終提案を小村に手交した。その内容は、――

一 韓国にたいする日本の援助は、日本の要求どおりとする。しかし、韓国領土を軍事目的に使用してはならない。韓国沿岸のいっさいの軍用工事をみとめない。

二 韓国内の中立地帯案については、そのままとする。

三 日清追加条約による奉天の解放はみとめるが、日本の居留地はこれのみとめない。

といったものであった。このロシア案にたいして、日本はローゼンに最終案をしめした。

一 韓国領土の軍事目的使用および中立地帯設定に関する条項を削除する。

二 満州とその沿岸は、日本の利益範囲外であることを承認するが、ロシアは満州の区域内において、日本または他国が、清国との条約のもとで獲得した権利、特権の享有（もっていること）をさまたげないこと。

三 日本はロシアの満州における特殊權益を承認し、その保護のために必要な措置をとることをみとめる。

これにたいしてロシアは回答をひきのばし、一月下旬には遼陽（リャオヤン、瀋陽の南南西六〇キロ、太子河の左岸に位置、日露戦争の激戦地）や旅順から、鴨緑江方面に部隊を移動させ、極東、シベリアの軍隊にも動員令をくだした。

このときから三十七年後におこる、太平洋戦争のときもそうであるが、日本国民は国家間の交渉のようすについて何も知らされず、邦字紙も沈黙していた。しかし、外国紙だけは政治的なうごきを公然と報じている。たとえば、アメリカの有力紙『ニューヨーク・タイムズ』The New York Times 紙などは、つねに外国電報（外電）による海外ニュースを国民に伝えた。日本政府はロシアと戦端をひらくまでの約一週間、極度に緊張したときであった。

いま同紙が伝える、その張りつめた状況についての記事を摘記すると、つぎのようになる。

見出し 「日本のがまんもほぼ限界」 (Japan's patience nearly exhausted)

東京において召集された会議は、直接行動を暗示。

東京 (二・三) —— 本日の出来事から、長びく緊張もその極に達していることがわかる。特別に召集された閣議——元老、陸海軍の首脳からなる——が、桂首相邸において開かれた。この会議は、数時間におよぶもので、ひじょうに重要なものだが、話し合いの詳細は一般には知らされていない。ロシアが回答を引きのばしているため、強硬な行動に出る可能性がある。役人は沈黙しているが、情況が深刻なのは明らかであり、危機は身じかに迫っている。ロシアの回答が、情況の要因でありつづける時間は限られている (『ニューヨーク・タイムズ』紙、二・四付)。

このあと、日本政府の忍耐は限界に達しており、政府高官はこのことをかくしていないという。回答が何日ものびたら、日本は最後通牒を出さざるをえなくなるといふ。

またペテルスブルクからロイター通信社に届いた電報によると、ロシアの参謀本部は、宣戦布告と戦闘開始の権限をアレクセーエフ総督にあたえたが、それは、状況により、じぶんの責任においておこなうものという (『ニューヨーク・タイムズ』紙、二・四付)。

「ロシア側の回答、日本へ送られる」 (Russia's reply sent to Japan)

満州に関する要求は拒否される模様。

サンクトペテルスブルク (二・四) —— 日本の最終案にたいするロシア側の回答は、今夜東京に送られる。(中略)

ロンドン (二・五) —— けさロシアから届いた『タイムズ』紙宛の一電文によると、戦争は回避できないようだ。ロシアは譲歩しないだろう。ロシア皇帝のためらいの勝利 (『ニューヨーク・タイムズ』紙、二・五付)。

「日本 和平ののぞみすてる」 (Japan gives up hope of peace)

いまだ日本は、ロシア側の回答をえていない。もう期待していないかも。林男爵によると、満州問題に関して、ロシアが協定に署名しないこ



駐露公使・栗野慎一郎

とは、戦争をいみする。

いまや状況は、絶望的とみられている。『タイムズ』紙の北京特派員によると、日本から来る電文はどれも、いまにも戦争になることを示している（『ニューヨーク・タイムズ』紙、二・六付）。

小村外相は、二月八日午後二時——ついに本邦に駐在する各国公使を外務省に参集させると、日露の国交断絶を通告した（中外商業 二・九）。そして同夜、官邸に新聞雑誌記者をまねくと、日露交渉のてん末を語った。その要旨を意識すると、左記のようになる。

——韓国の独立と領土保全を維持し、同半島における帝国（日本）の優越なる利益を守ることは、日本の平和と安全にとって不可欠である。ゆえに韓国の地位をおびやかすものは、これを見逃すわけにゆかない。しかし、ロシアはその清国との公約、清国が列国（諸国）にあたえた保障があるにもかかわらず、満州の占領をつづけ、韓国の国境まで侵略的行為をあえておこなっている。もし満州がロシアによって併吞されたら、韓国の独立はおぼつかない。

それゆえ日本政府は、すみやかにロシアと交渉をはじめ、日露の利害の接点である満州・韓国におけるお互いの利益を有好的に調製して、東アジアの永久的平和を維持するために、昨年七月下旬ロシア政府につきのような希望をつたえ、その賛同をもとめた。ロシア政府はこれに同意する旨を回答してきたので、日本政府は八月十二日在露の栗野公使に協商の基礎となる条件をロシア側に伝えさせた。

- 一 清韓両国の独立と領土保全を尊重することを相互に約する。
 - 二 清韓両国における各国の商工業のために、機会均等主義を維持することを相互に約する。
 - 三 ロシアは韓国における日本の優越なる利益を承認する。日本はロシアの満州における鉄道経営の特殊な利益をみとめる。
 - 四 韓国における改革、善政のための助言や助力をあたえるのは、日本の専権（自由勝手）であることをロシアはみとめる。
 - 五 韓国の鉄道を満州南部までのぼし、東清鉄道、山海関、牛莊線に接続することがあっても、ロシアはこれをさまたげないことを約すること。
- 日本政府は、一日も早く時局を解決するために、ペテルスブルクでロシア側と商議をなすことを希望した。が、ロシア政府は皇帝の外遊やその

他の理由をつけてこれをはばんだため、やむなく東京において行うことになった。ロシアは、十月三日その対案を日本にしめした。その要旨はつぎのようなものである。

ロシアは清国の主権、領土保全を尊重する。が、同国における各国の商工業上の機会均等を約することはできない。日本は、満州とその沿岸が、自国の利益の範囲外であることをみとめねばならない。韓国における日本の利益を守るための出兵の権をみとめるが、韓国領土の一部たりとも軍事目的に利用することを許さない。また北緯39度を中立地帯とする。

十月三十日、日本は確定修正案をロシア政府に提出したが、回答はくれ十二月十一日になってそれを受けとった。回答においてロシアは満州に関する条項を削除し、本協商のすべてを韓国に関するものとし、もとの主張をくり返した。

しかし、満州を協商の範囲外におくことは、交渉の主旨——満韓における日本とロシアの利益を友好的に調整し、両国がぶつかる原因を一掃しようとする主旨に反するため、日本は十二月二十一日ロシア側に再考をもとめた。その回答は、一月六日に来た。韓国に関しては原提案を主張し、満州に関しては、日本や他国が清国との協商において得た権利と特権を協約の中に入れることをみとめた。

しかし、満州の領土保全に関しての言及はなかった。もしロシアが満州を併呑したら、各国が清国とむすんだ条約によって得た権利や特権は同時に消滅するのである。

だから日本は、ロシアが満州の領土保全を約諾する必要をみとめ、居留地設定の件は削除し、韓国に関しては譲歩する余地がないので修正を堅持することにした。一月十三日ロシアに再考をもとめ、何度もその回答をうながした。が、ロシアは回答をのばしつつ、一方において陸海の軍備を増強し、大軍を韓国との境に配した。ロシアの行動は、日本政府に妥協の望みをすてさせ、ついにやむなく談判を断絶させるに至った（『毎日』二・九付）。

このように日露が国交断絶したことを、在日の各国公使に伝えられたのは、明治三十七年（一九〇四）二月八日のことであった。対露宣戦の詔勅は翌十日『官報』に全文がのった。日露交渉を断絶する旨のロシア側への通告は、二月五日在ペテルスブルクの栗野公使をしてラムズドルフ外相に伝えた。戦時国際法によれば、戦争行動を開始するまえに、各国は大げさに宣戦布告をする必要はなかった。

宣戦布告に先だって日本艦隊は、すでに行動を開始していた。二月五日、東郷司令長官は、旗艦「三笠」に各艦長をあつめると、出撃を命じた。翌六日の未明、戦艦・巡洋艦・駆逐艦・水雷艇などが佐世保を出港した。……



仁川付近の略図

八〇〇〇を上陸させると、その日のうちに京城を占領させた。
じている。

「日本軍 韓国に上陸」 (Japanese armies landing in Korea)

輸送船六〇隻 朝鮮半島に軍隊を上陸させる。

ロシア艦捕獲される。

ロンドン (二・九) —— 『ディリ・メール』紙の芝罘通信員によると、日本の輸送船六〇隻は、韓国諸港に軍隊を上陸させているという。

ソウルは、特派員によれば、占領されそうである。上陸を援護しているのは、水雷艇の分艦隊である。日本艦隊の主力は、旅順方面にむかうものとみ

七 日露交渉の破綻と日露戦争の勃発

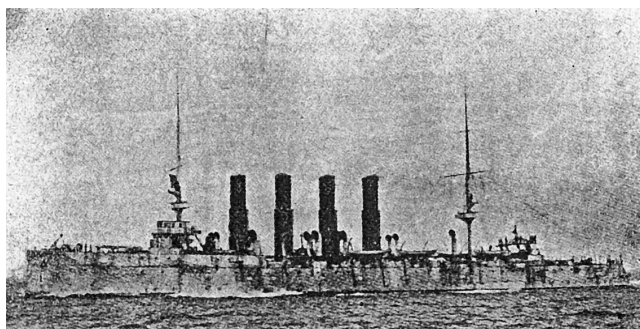
日本政府は、いずれロシアと戦争になると見ぬき、その準備をしていた。が、ロシア側は日本との戦争に何んの準備もしていなかった^(ウイッテの回想録)。日本は一九〇三年(明治36)十二月末より、ロシアにたいして戦闘体制に入っていた⁽³⁴⁾。冬宮のニコライ二世もロシアの陸海軍当局も、日本は進んで攻撃をしかけてこないだろうと、高をくくっていた。軍司令官のクロバトキン⁽³⁴⁾は、日本と開戦したばあい、戦争に要する兵員は三〇万人と計算していた。

極東におけるロシア海軍は、日本のそれよりもやや優勢であったが、諸所に分散していた。主力は旅順口、一部はウラジオストクと朝鮮の諸港に、二、三隻いた。が、みなまったく油断していた(ボクローフスキイ著『ロシア史』、三七二頁)。日

本海軍の派遣隊は二月八日の夜半、仁川^(インチョン)(韓国北西部、ソウルの西39キロ)に陸兵^(じんせん)。日本軍の韓国上陸については、『ニューヨーク・タイムズ』紙は、左記のように報



瓜生司令官



仁川海戦で沈没した巡洋艦ワリヤーグ

られる(『ニューヨーク・タイムズ』紙、二・九付)。

陸軍を擁護し、仁川上陸の任務をまっとうしたのは、連合艦隊第四戦隊(瓜生艦隊)であった。同艦隊は、戦艦・駆逐艦・水雷艇からなり、八日の午前九時ごろ仁川に着いた(The Japan Weekly Mail, 一九〇四・二・一三付)。瓜生司令官(少将)は、九日の午前七時、正午を期して錨地をはなれるようワリヤーグの艦長に伝え、でないとは砲撃するといかくした。

九日の正午ごろ、仁川港よりワリヤーグ(二等巡洋艦、アメリカのフィラデルフィアで進水、六五〇〇トン)とコレーツ(一等砲艦、スウェーデンのストックホルムで進水、一二・三トン)が出てきたので、八尾島の東方に仮泊していた瓜生艦隊は、同島以西において、この二艦に砲撃をくわえた。戦闘は三十五分間つづき、一時十五分ごろ戦いはやみ、ワリヤーグは火災をおこし、コレーツとともに仁川港に退去した。

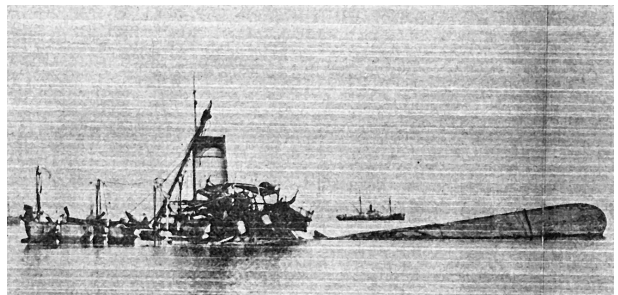
いまや水雷艇をもってこの二艦を攻撃するしかない、と思われたとき、ワリヤーグより大きな爆煙が上がり、左舷にかたむき沈没し、コレーツもすがたを消した(『仁川の海戦』『日露交戦録』第二号所収、明治37・2)。

ワリヤーグは、前艦橋(艦長が指揮をとる望楼)と右舷の後艦橋、左舷および、水線下に大破損をこうむり、六時十五分沈没した。コレーツはみずから火薬庫に火を放って、四時三分、沈没した。(『時事評論』『太陽』第10巻第4号所収、明治37・3)。

さらに旅順港では、九日の深夜、濃霧のなか日本の水雷艇が東方より突進して放った魚雷が、戦艦二と巡洋艦一に命中し、沈没またはかくざさせた(東朝二・一一、芝罘発)。また十日の明け方、日本の巡洋艦の一隊は、



炎上ちゅうのコレーツ



砲弾による大損傷ののち自爆したコレーツ

タイムズ』が、外電として報じている。

「日本 壊滅的な一撃をロシアにあたえる」 (Japan's crushing blow to Russia) 戦艦三、巡洋艦四、旅順港において不能になる。

日本ははじめてロシアに一撃をくわえた。その結果、戦艦レトウィザン、ツアレヴィック、巡洋艦バルラダなどが、月曜日の夜半、旅順において日本海軍の魚雷攻撃によって甚大な被害をうけた。昨日(九日)の午前中における日露艦隊の交戦および旅順港の要塞と砲戦において、戦艦ボルタワ、巡洋艦ノーウィック、アスコルド、ダイアナは、水線下に被弾した。レトウィザン、ツアレヴィック、バルラダは、旅順港口において沈没し、内港の他の艦との関係が断たれた。(中略)

けさロシア軍の要塞では、三マイル沖にいる日本艦隊に砲撃を開始した。日本艦隊は応戦し、ロシア艦数隻に着弾したが、被害は軽微であった(『ニューヨーク・タイムズ』紙、二・一〇付)。

港外にいるロシア艦隊と砲火をまじえ、追撃したが、午前七時ごろもとの港外の位置にもどった。

やがて日本艦隊の本隊十二隻は、西方より殺到すると、敵艦隊に砲火をそそぎながら、その前をかすめて東方にむかった。旅順港外の日本海軍の夜襲を目撃したのはイギリス船「コロンビア」号であった。同船は九日(月曜日)の夜、港外の停泊所にいた。そばにロシアの戦艦や巡洋艦など十四隻のすがたがあった。十時ごろ、魚雷の爆発音を聞いた。ロシア艦はすぐ探照灯をもって索敵を開始し、海のほうをしばらく砲撃した。のちにコロンビア号はこのニュースを芝罘にもたらすのだが、それを『東京朝日』『ニューヨーク・

日本艦隊によるロシア艦攻撃は、国際的に物議をかもし、フランスの『ル・タン』『ジュルナル・デ・デバ』紙などは、日本を非難した。前者は半官的な新聞であるが、日本海軍の宣戦布告まえの夜襲は、国際法に反するものといひ、後者は日本の行動は、近代戦のしきたりを無視するものと非難した（前掲紙、二・一〇付）。

一九〇四年（明治37）二月十日——天皇はロシアにたいして宣戦布告した。

天佑（天のたすけ）ヲ保有シ 万世一系ノ皇祚ヲ踐メル（皇位についている）大日本国皇帝ハ 忠実勇武ナル汝有衆（人民）ニ示ス 朕茲ニ露国ニ
対シテ 戦を宣ス……

（『日露交戦録』明治37・2より）

ロシア帝もまたこの日、日本に宣戦した。ペテルスブルクの公使館員、ウラジオストク、シベリア、満州の一部に在留する日本人は退去を命じられた。ロシアは日本が宣戦布告に先立って攻撃したのは、国際法違反であると非難した。が、当時はまだ開戦の法規が成立していなかった。

日本海軍は、開戦のへき頭から旅順口を閉塞する（とじふさぐ）計画であつたらしい。その立案者は、第一艦隊の参謀・有馬良橘海軍中佐といふ。⁽³⁶⁾二月六日の正午——連合艦隊は旅順港外のロシア艦隊をめざして佐世保を出港した。九日、旅順港外に敵艦隊を掩撃し（不意をおそう）、これに多大の損害をあたえると、港内に逃げた。十一日、日本艦隊は、木浦（韓国南西部の港町。一八九七年「明治30」開港）の沖合の根拠地に帰着すると、第二次作戦計画に余念がなかった。二月十八日、突如東郷長官より、麾下の各戦隊に、旅順港の閉塞に参加する勇士を数名えらび、至急その人名を報告するよう命がくだつた。ところが各戦隊からの志願者は二千有余名あり、その選抜は骨がおれた。

八 旅順口閉塞作戦に参加

閉塞隊は、古い商船五隻を用いるもので、船底に炸裂弾をうずめ、海水弁をひらくと、急いで点火するしかけになっていた。点火栓の長さは約



旅順口の閉塞作戰に参加したときの広瀬

十二メートル、上甲板まで駆けあしで二〇秒ほどかかることがわかった。旅順港閉塞作戰は三回試みられたが、結果はどれもおもわしくなく、成功したとはいえなかった。

第一回目の閉塞作戰……二・二四実施。失敗。

第二回目の作戰……………三・二七実施。中途半端。このとき広瀬少佐は戦死する。

第三回目の作戰……………五・三 実施。中途半端。

第一回閉塞隊の編成は、つぎのようであつた。

〔船名〕	〔排水量〕	〔指揮官〕
天津丸	二、九四二トン	有馬中佐
報国丸	二、七六六トン	広瀬少佐
仁川丸	三、三三一トン	斎藤大尉
武揚丸	一、一六七トン	正木大尉
武州丸	一、二四九トン	島崎中尉

これに下士官六十七名が加わり、一行七十七名となった。閉塞船は、沈めるためのものだからスピードが出せない。錨地から旅順港口まで約三百四、五十海里あるから、時速八ノットで二昼夜あまりかかる。

どの船も粉炭（こな状の石炭）を満載していた。そのほかけむりの少ない英炭を五トンほど積んでいた。これは敵前四時間の航行にたえる量である。糧食は各自四日分を携行することにした。集合地をはなれたら炊事しているひまはないので、そのまま食べられるものを持っていた。そ

れらは――

軍用のかんパン「バスケット状のパン」二箱

食パン

ハム

牛肉のかんずめ

コンデンスミルク（果糖練乳）

鶏卵^{けいらん}

菓子

朝鮮アメ

パイナップルのかんずめ

ウイスキー一びん「閉塞をおえ退去するとき、短艦のなかで飲むためのもの」

などであった。兵員は軍服を用い、寝具は毛布二枚とした。

二月二十日午前八時――旗艦三笠の東郷長官および幕僚の見送りをうけ、軍艦マーチの曲に送られ、天津丸を先頭に各船はそのあとにつづいた。二十三日の夜明け、五隻の閉塞船はうすくらやみの中をし、ふんぼりと航行していたが、そのすがたは幽れい船のようであったという。同日の午後三時ごろ――、閉塞船隊は円島^{えんとう}（無人島、西北約三〇海里に大連湾、西約五〇海里に旅順港をひかえる地点）の南西二〇海里の地点に達した。午後五時、閉塞船隊は旅順港口に直進した。港口に近づくにつれて、探照灯の光がみえるようになった。

旅順の港口のはばは、二七三メートル。大艦が通れるのは、わずか九一メートル。水深は十二、三メートル。港口の両側には、切り立ったがけがそびえ、自然の要害を形づくっている。港口にむかって左側にそびえるのは老虎尾半島^{ろうこび}（英名・Tiger Peninsula）の老鉄山^{ろうてつざん}、右に屹立^{きりりつ}するのは黄金山^{おうごんざん}（英名・Golden Hill）である。これらの地には、堅固な堡壘^{ほうり}（とりで）が築かれている。閉塞船隊は、しばらく老鉄山の南西方において漂泊し、突入の時機をうかがっていた。

二十四日の午前三時ごろ、同船隊は老鉄山の南西方向に達した。午前四時ごろ、閉塞船隊は突進を開始した。探照灯は、上下左右にいそがしく照し出しはじめた。そのうちに黄金山の砲台から閃光があがったかと思ったら、各砲台から大小の砲声が鳴りわたり、暗黒のやみを破った。

先頭は天津丸。この船は港口の南三海里（約六キロ）あたりで撃破され、みずから浅瀬にのりあげた。このとき後ぞくの諸船は、北東に針路をかえ前進した。が、探照灯と猛烈なる砲撃にゆく手をさまたげられた。武州丸は舵をやられ、航行の自由をうしなった。天津丸は座礁すると、みずから沈没した。武揚丸はすくなくらず被弾し、港口に達しないうちに沈没した。

仁川丸と広瀬が指揮をとる報国丸の二隻だけは、猛進して、どうにか港口に達し坐礁。仁川丸はその東方において自爆沈没した（官報二・二八——仁川丸の斎藤七五郎大尉の電報）。水雷戦隊は閉塞隊の收容にしたがい、沈没船の乗組員の救出にあたった。

一方、連合艦隊の主力は、二十二日より旅順口方面に進出し、港外の索敵に従事し、敵艦隊が港に出入りするのを発見したときは、それに砲撃をくわえたり、港内の艦を遠距離から砲撃し、後方支援をおこなった。

旅順港のアレクセーエフ総督は、閉塞船隊の夜間侵入をつぎのように報告した。

二月二十四日、午前二時四十五分。日本の魚雷艇は、ふたたび旅順港を攻撃した。可燃物をつんだ大きな汽船を突進させた。港口をふさぐためである。船隊のうちの二隻は、破壊された。一隻はわが軍の砲撃によって老虎尾半島のちかくで。もう一隻は黄金山のちかくで。日本の水雷艇にたいする砲撃は、レトウィザン号や要塞からなされ、夜明けまでつづいた。朝になると、日本の汽船四隻が破壊された状態で湾内で発見された。また魚雷艇八隻は、日本の軍艦のほうに向っていた。日本艦隊は沖合でかれらを待っていた。

乗組員はボートによって救助された。ある者は溺死したであろう。また魚雷艇によって救助された者もいよう。港の通航には支障がない。日本の汽船はまだ燃えている。湾内に機雷が浮いている。日本艦隊は、二つの分艦隊から成るが、遠ざかって行った。わが巡洋艦三隻が出港し、その跡を追ったがむだだった。これらの艦を呼びもどし、湾内の浮遊機雷を処理させた。当方に被害はない（The Japan Weekly Mail, 一九〇四・三・五付）。

東郷連合艦隊司令長官は、集合地に帰着後、諸艦長を旗艦に召集すると、軍議をこらし、第二次閉塞を執行することにした。閉塞船隊は、つぎの四隻から成り、駆逐隊・水雷艇のえん護のもとに出発することになった。

〔船名および排水量〕	〔兵員〕	〔指揮官〕
千代田丸（一、七四六トン）	10名	海軍中佐 有馬良橘
福井丸（二、九四三トン）	18名	海軍少佐 広瀬武夫
弥彦丸（トン数不詳） やひこ	15名	海軍中尉 森 初次
米山丸（二、六九三トン） よわやま	15名	海軍大尉 正木義太



旅順の錨地（港内からみたもの）
L'Illustration 誌，1904・2・13より。



第2回目の旅順口閉塞の沈没船の位置。“アサセ”
は“浅瀬”のこと。福井（丸）は広瀬が指揮した船。

連合艦隊は、第一回目の作戦から約一ヵ月後の三月二十六日ふたたび旅順港口にむかい、同二十七日午前三時半、閉塞を決行するに至った。これら四隻は相ならんで湾口に闖入を開始した。港口より三・五キロほどの地点に達したところ、ロシア側に発見され、両岸の要塞や哨戒艇などから猛烈な砲火をあびた。が、それに屈せず、航進をつづけた。

先発の千代田丸は、黄金山の西側の海岸から約一〇〇メートルのところで投錨爆沈した。第二の福井丸は、千代田丸の左側をすぎ、すこし前に進み、投錨しようとしたとき、敵の駆逐艦が発射した水雷があたり爆発し、その場で沈没した。第三の弥彦丸は、福井丸の左側に出て、投錨爆沈した。第四の米山丸は、ややおくれて港口に達し、敵の駆逐艦の艦尾に衝突し、千代田丸と福井丸のあいだを通過して水道（ふねの通りみち）の中央に投錨しようとしたとき、水雷一発をくらひ、左岸ちかく船首を左にかたむけながら沈没した。



杉野上等兵曹

九 広瀬の壮烈なさいご

探照灯の光ともうもうたる砲^{ほう}烟^{えん}の中、はやく爆薬に点火して船を沈めなければならぬ。「総員上へ！」の命令で乗組員が上甲板に出ようとする、大きな爆発音がおこり、海水の飛沫^{ひまつ}（波しぶき）が滝のように空からふってきた。これは船首に魚雷が命中したためであった。（翌年の五月、福井丸の旧乗組員が旅順で魚雷命中の痕を目撃した）。やがて短艇がおろされた。この間数知れぬ砲弾や銃丸が飛んできた。やがて広瀬少佐がやってきて、

——おい／＼、みんな集ったか？ 番号をと覚えてみよ。大きな声で／＼。

といった。短艇^{ボート}のなかの兵が番号をと覚えてみると、杉野上等兵曹だけがまだ来ていない。指揮官や兵員がみな大声で、

——杉野！ 杉野！

とさけぶ。二、三度、かれの姿を上甲板でさがしてみたが、すがたも何の返事もない。その間敵の砲火はますますはげしくなった。

広瀬は「杉野！ 杉野！」とさけびながら、単身ふたび部下の搜索をつづけた。船をはやく爆破せねばならぬ。広瀬はもどると、

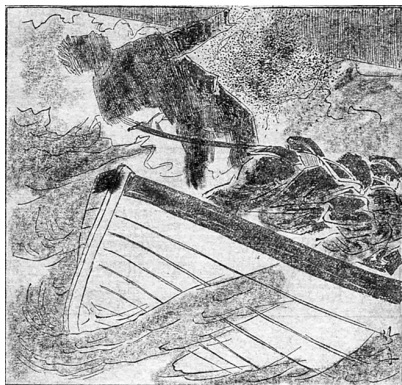
——杉野はまだ来ないか？

さてはいよいよやられたか、残念！

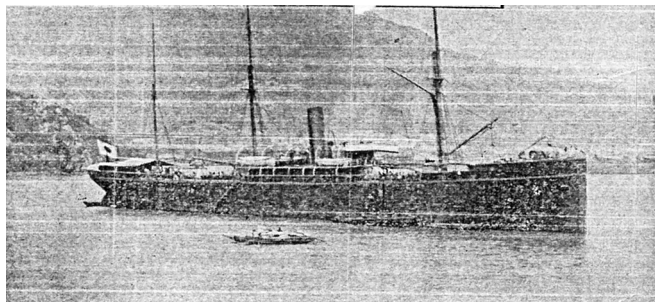
といった。上甲板を海水が洗いはじめていた。本船は沈没寸前である。広瀬は敵の水雷が命中したことを知っていたので、ほどなく「爆破！」を命じた。

一行十七名をのせた短艇は、午前四時半すぎ、福井丸にさいごの敬礼をおこないつつ、黄金山の海岸に沿ってこぎだした。福井丸が没んだ地点は、港口からだいぶ離れていた。敵の探照灯は、短艇のあとを追い、その前後左右に大小の弾丸が落下した。兵員の中から重傷、軽傷を負う者がでてきた。

とくに指揮官広瀬は、壮烈な戦死をとげた。敵弾が雨あられとふり注ぐなか、短艇にもどるとき、巨弾が飛んできて、かれの頭部を撃ち抜いた。広瀬是一片の肉塊^{にくかい}（脳みそ）を艇内にのこし海中に墜落した。⁽³⁷⁾杉野は爆薬に点火するため船倉におりるとき、敵の魚雷によって戦死したようであ



広瀬少佐のさいごの図



旅順港に没した福井丸

る。

海中に落下した広瀬の遺骸を発見したのは、意外にもロシア水兵であった。すでに金線がある軍服を着、双眼鏡をかけ、短剣をおびた日本の海軍士官の死体が浮んでいるのを発見し、それを引きあげたのは、ロシアの艦艇であった。四月二日、アレクセーエフ総督みずからその葬儀を旅順において営み、将校および水兵らは楽隊とともにこれを葬送した。アレクセーエフもまた、礼を知るものであった⁽³⁸⁾。

広瀬武夫の壮烈な戦死は、『官報』(三・二九)や『東京朝日新聞』(三・三〇)において報じられた。が、筆者はこんないふ誌『イルュストラシヨ』(L'illustration 一九〇四・五・二一付)が、「旅順港 “閉塞” の日本の英雄」Le Héros Japonais de l'“Embouteillage” de Port-Arthur とった記事を肖像写真入りで掲載していることを知った。その摘訳はつぎのようなものである。

東郷提督の報告は、公式に以下のごとく伝えた。前回よりも強硬な試みの結果、旅順港の閉塞は既成事実である。攻撃用の汽船のうちの八隻は火船^{かせん}にしたものだが、石を積んでおり、ロシア側の努力をよそに、ちょうど錨地の入口で沈めることができたであろう。うち六隻は狭い港口で沈めることができたかも知れぬ。(中略)

指揮官の広瀬武夫が戦死したのは、第二回の “閉塞” 作戦においてである。と同時にかれの部下の杉野という下士官も、おなじ状況のもとで亡くなっている。そのときの状況を邦字新聞は、つぎのように報じている。

かれらが乗った福井丸は、投錨しようとしたとき、杉野は爆薬に点火するために船倉におりて行った。ちょうどそのとき、魚雷が同船に命中し、この勇敢な海員は即死したものとおもわれた。このと

LE HÉROS JAPONAIS
DE L'« EMBOUTEILLAGE » DE PORT-ARTHUR

Un rapport de l'amiral Togo a officiellement annoncé qu'à la suite d'une nouvelle tentative, plus énergique encore que les précédentes, l'« embouteillage » de



Le commandant Hirose.

『イリュストラシヨン』誌にのった広瀬の肖像と記事

十 広瀬の人と思想

広瀬武夫（一八六八—一九〇四、明治期の海軍軍人）は、大分のひとである。明治二十二年（一八八九）海兵卒業後、比えいに少尉として乗り組み、以後各艦を転々とし、同三十年（一八九七）三月海軍軍司令部出仕を命じられ、同六月ロシア留学生となり、のち駐在武官となった。明治三十三年（一九〇〇）海軍少佐に進み、同三十四年（一九〇一）帰国した。日露戦争（一九〇四）に戦艦朝日の水雷長として従軍し、第一回、第二回の旅順の閉塞作戦に指揮官のひとりとして参加したが、離船のとき敵弾にあたり戦死した。死後中佐となった。この世で生きたのは、わずかに三十六年八ヵ月であった。

広瀬は、ちょうど明治の興隆期に海軍軍人としてそのみじかい生をおえたが、平時においても戦時においても、その生きざまは万世不滅の模範、軍人のでほととされた（東郷評）。その父・重武は維新前は、豊後（大分県）竹田の岡藩のサムライである。のちに裁判官となり、関東および中部地方の任地を転々とした。武夫と兄は、父につれられ（母ははやく亡くなった）移転をくり返した。武夫はまず竹田小学校にまなぶかたわら森玉彦の私塾に通い、のち飛騨高山（岐阜県）の高山煥章学校へ転学した。そこから岐阜華陽中学に仮入学し、のち兄・勝比古とおなじように、海兵の予備校的な攻玉社（芝新銭座）にまなんだ。明治十八年（一八八五）六月——海兵の（築地）試験に落ち、九月追加入試をうけ、こんどは合格した。同二十二年（一八八九）四月、海軍兵学校を卒業し、少尉候補生となり、以後職業軍人のみちを歩んだ。かれはただ軍事をこととする、

き、指揮官の広瀬は、部下に救命艇を出すように命じたところだったが、下士官の杉野がいけないことがわかったと、何度もかれを捜した。しかし、ついに広瀬じしんも本船から離れねばならなかった。かれは部下とともに救命艇にのると、福井丸のまわりに短艇をこぎ寄せるように命じ、すがたを消した部下をさがそうとした。

また変ったところでは、英学生のための『中外英字新聞』第11巻第4号（明治37）は、Admiral Togo's reportとして広瀬と杉野の戦死を報じている（英文）。

カチカチの軍人と思われがちだが、じつはそうではなく、当時の士族いっぽんがそうであったように多少は文事にも通じていた。和学（国学）と漢学の素養——和歌・俳句・漢詩のたしなみがあった。のちにそれに軍事学・ロシア学がくわわった。学としては、その根底にサムライ的な教養をもち、そこに外国から入ってきた科学と技術（兵術）がくわわった。

広瀬その人の志操（うごかぬ主義）はどうであったか。

かれはサムライの道德律——忠誠・名誉・尚武（武事、軍事をとうとぶ精神）を重んじた。外国への赴任は年来の希望であったが、ロシア留学を命じられたとき歓喜した。と同時に、その榮譽と責任のおもさも痛感した（父あての手紙）。留学の選に入っしたのは、天皇の恩徳、先祖の余光（おかげ）とおもい、その任を辱しめてはならぬとした。海軍軍人のしごとは、いちに艦上につとめることである。それが本務であるから、帰国したときまた艦にのって活躍したいと思った（兄あての手紙）。広瀬は軍人には珍しいほど、身を持つことじつに堅固であった。品行方正を地でいった。タバコも酒もたしなまず、痴態を演じることにはなかった。船のりや海軍士官にありがちな港の女との関係で浮き名をながすことはなかった。赤線地区や花柳界とも縁がなかった。

外交官、留学生、出張でくる役人、学者先生のなかには、異郷においてさみしさ、うつ、色情を散ずるためにカフェで娼婦をあさったり、紅灯の巷に足をふり入れる者が少くなかった。が、ふしぎにも広瀬の日ごろのたしなみの中にそういった女性との逸事がないのである。ペテルスブルクの本邦人のなかで、かれの健康体と健啖（けんたん）ぶりがうわさになる位であった。ふつう人たちがって性欲も感じない異体の持主であったようだ。みずから「依然トシテ異彩ヲ放チ、酒ト煙艸（タバコ）ナドノ嗜好（しこう）モ、弄花（ろうか）ナドノ欲（よく）（色情）モ、全ク起ラス」という（父あての手紙）。

*花とたわむれる意。『花』とは俗語で芸妓、遊女の意。

その体つき、人柄、性格はどうか。

広瀬は身のたけ五尺五寸（約一メートル七〇センチ）くらい、しっかりとした骨格にゆたかな筋肉がついていた。それは柔道できたえた体格であった。当時の日本人としては、上乘の体つきであったといえる。声の調子はどうか。それは快かつ、いくらかひびく、甲走（かんぱ）った声であった。人にたいしては親切で手厚く、上下を区別せず、みなひとしく扱った。その言語、ふるまいは明るく、さっぱりとしていた。広瀬その人に会うと、

何ということもなく敬慕の念を生じせしめた。おまけにこの人は、功名手柄をけって誇らず、語らず、いつも外にたいしては謙虚であった。

人情は厚く、部下おもいであった。明治に生れた武人として、とうぜんのことながら、忠君愛国者であった。その性は勇壮沈毅（おちついでいて、物に動じない）、存生のころ、上品な紳士として、また円満なる人格者の模範であった、と親交があった小野塚喜平次（一八七〇～一九四四、明治から昭和期の政治学者。のち東大総長）は回想している。

ともあれ、このユニークな人柄がいちばんよく現れているのは、家族・親戚・知友・海軍関係者らに送った約三六〇通の手がみである。かれは受取人が“学”がない場合、その者が文をうけ取っても、よんでわかるように、全文カタカナやひらがなで書いて出した。海軍の関係者がよく使う料亭につとめる老いた女中、故郷の老婢、幼いめいの馨子宛の手紙などは、かれらにたいする細やかな配慮、心くばり、いたわりがよく表われていて、書き手のゆかしい人柄をほうふつとさせるものである。

広瀬はまたユーモアを解する人であった。

かれはひまがあると、よく部下にいろいろな話をした。ロシアの海軍軍人の気質や、だれそれは一個の人物であることなどを語った。マカロフ將軍の夫人は、若くて美人であるため、若い士官は將軍のもとへあまり出入りできないこととか、帰国のさい、陸海軍の士官（広瀬の監視役？）に水交社に泊るよう勧められ、ようやくこれを切りぬけた話などをした。

広瀬はまたじぶんの性格を自己解剖をしてこんなことをいった。じぶんは人が困難とおもうところ、危険とするところへ、いつでも挺身し、気力・胆力をねることにしている。いままで多少の修養はできたつもりだが、はなはだ遺憾とするところは、性来おこりっぽく、ちょっとでも氣にくわぬと、すぐ叱りとばしたくなることである。

第一回の旅順口突入のとき、これは胆力をためす絶好の機会であるとし、“金玉”論をぶちまけた。じぶんの胆力をためすには何がいちばんよいかというと、じぶんの金玉にさわってみることである。胆力がすわっておれば、ふだんどおりぶらりと下っている。そうでないと、すぐ縮みあがってしまうから、だれにでもよくわかる。こんどの任務は、じつに重大である。胆力がいちばん肝心である。規律整然とやる戦争は困難でないが、いざ引きあげるときは混乱に陥りやすい。胆力さえすわっておれば、そういうことはない。

第二回目の突入をおえ、離船するとき、広瀬はオーバーボードのうえにインパネスを羽おって、短艇の右舷のさいごにすわった。このとき、部下に



「イギリス・ホテル」(ペテルスブルク)。かつて二葉亭四迷も泊まったことがある。現存しない。

——金玉にさわってみたか？

をくり返し、士気を鼓舞した(『第二回 旅順閉塞隊秘話』、一二三頁)。

法学士・小野塚喜平次が、広瀬を識ったのは、同窓の友人・矢作栄蔵(やせきざう)という者の紹介によるものだった。この人は広瀬と講道館における旧友であり、よくその人物を賞揚していた。やがて小野塚と広瀬の交際がはじまった。広瀬の戦死を知ったのは、たまたま上野で手にした“号外”によってであった。それを手にしたとき、呆然となった。かれは広瀬戦死の号外を葉がきといっしょにドイツ留学中の矢作に送った。

ふしぎなことに広瀬が留学の辞令をもらったのは、小野塚のそれとほぼ同じ時期であった。それにもまた因縁めいたものを感じられる。小野塚はドイツとフランスに留学したが、お互い手紙のやりとりをする位いでなかなか会う機会はなかった。が、明治三十二年(一八九九)十月、しばらく閑(かん)をえて北欧観光に出かけたとき、二年ぶりで広瀬と会った。

十月十日の夕方より十四日の夕方まで、ペテルスブルクの「オテル・ダングルテル(イギリス・ホテル)」に止宿し、その間一日をのぞいて、毎日広瀬と会い、いろいろ案内してもらった。両人はホテルを出ると、海軍省と元老院とのあいだの広場にいたり、ピョートル大帝の銅像まえにきた。二人は話をしながら、幾度となくこの銅像のまわりを歩いた。このとき広瀬はこんな話をした。

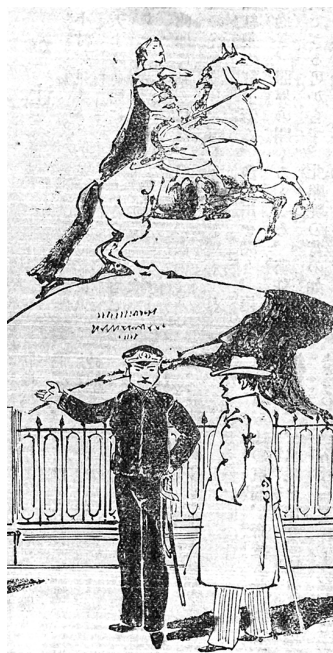
早晩、日露は衝突するであろう。われわれはその覚悟で奮励せねばならぬ。ロシアの南方を旅行したときの話をし、製鉄所の発達、殖産工業の進歩の状態などを説き、その将来に注目すべきことを論じた。小野塚は広瀬の観察が緻密であり、見識が高大なるを感じた。

小野塚は、三十四年(一九〇一)の秋帰国した。広瀬は翌三十五年の春帰国すると、朝日艦勤務を命じられた。この年の秋、小野塚は朝日艦上において広瀬と再会した。そのとき広瀬はこんなことをいった。

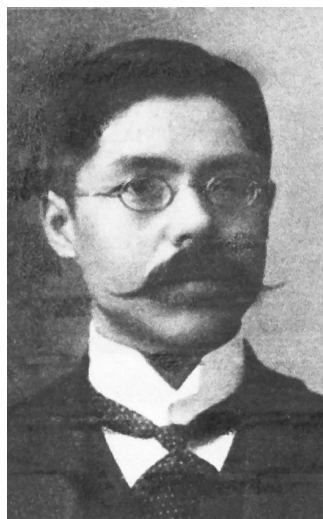
——日本に帰ってきて、だんだん世間のようすを見聞すると、どういうわけか日本人は小感情に制せられ、小さな功名心(手柄をたて、名をあげることに)に駆られているように見うけられる。これをひとつ矯正して、大国民たるの思想を涵養してもらいたいものである。

広瀬は、功名とは無縁な人間であった。功名に超然としていたから、そのことばに重味が感じられた。

広瀬はつねに義務心、じぶんの果すべき責任を痛感し、朝日に乗り組んでからもひと一倍、労役に服する



ピョートル大帝の銅像まえの広瀬
と小野塚



小野塚喜平次

つもりであった。何事も率先してやったようである。甲板を洗うときは、下の者にだけ苦勞をかけてはならぬと、水兵より先にぞうきんを握ってそうじをやった。(士官はふつう甲板そうじをやらない)。それは艦中の者はみな家族といった考え方から出たものであった。かれは人から何んといわれようと、悪口などまったく意に介していなかった。仁慈に富んでいたことは、部下の生命^{いのち}をおしむあまり、弾丸雨飛のなか、三たび船内を搜索したことによく現れている。

十一 広瀬のロシア研究の成果——その分析と概略

広瀬にとってロシア研究とは、同国の海軍について研究することである。それはかれにとってひっせいの仕事であったようだ。その業は、その死とともに中途でおわったが、また機会があったら、ロシアに行きたい、と朝日艦の部屋で、広瀬は小野塚に語った。そもそも広瀬がロシアに興味をもち、そのことばを学びはじめたのはいつのことか。明治二十六(一八九三)年四月から広瀬は水雷術練習所の学生であった。十月に終了すると同所に分隊士となった。ロシア語をはじめたのは同年夏ごろからであり、当時麻布長坂町にいた八代六郎大尉(のち露都に赴任)についてまなんだ。このときはじめてロシア語のイロハを習ったものか。本格的にロシア研究を志したのは、ペテルスブルクに着いたのち、教師から直接教授法でロシア語を習いはじめてからであろう。それにしてもこのことばのむずかしさのため息をつき、その歩みはのろかった。が、日を経るにつれて、文字もよめ、会話もすこしは上達したらしい。

海軍部内におけるロシア研究の先達は、坂本八郎太、野元綱明^{つなあき}、八代六郎らであり、そのあとに続いたのは広瀬であった。かれは海軍軍令部謀

報課の課員であるから、そのしことは、ロシア海軍についての情報収集である。しかし、それを入手するのは至難である。研究成果の多くは、ロシア紙に発表された機密性のひくいもの、いわば「また聞きのニュース」を抜いて、本国の海軍省に送ったようである。まとまった研究としては、つぎのようなものがある。

(一) 千九百年パリ開設万国大博覧会露国海軍部に付

注・一九〇〇年（明治33）のパリ万博に、ロシア海軍が出品したものの報告。ロシア海軍の「出品目録」を参照し、その海軍力の一端を推定して六月から八月にかけて執筆したもの。

(二) 「リガ」市創立記念産業博覧会記事

注・一九〇一年（明治34）の産業博覧会の見聞記。
同年七月から十月にかけて執筆したもの。

(三) 波爾的沿岸州ニ於ケル重要ナル諸港

注・バルト海沿岸のレーベリ、バルトなどの港についての報告（課報記事）。一九〇一年（明治34）十一月にまとめたもの。

これら三つの報告は、海軍部内の機関誌『水交社記事』に掲載された。(一)は一二〇号の巻頭をかざったという（明治33・6）。が、(二)(三)はいつ刊行になったものか不明。いずれも課報記事であるため、一般読者の目にふれることはなかった。

これより各報告の概略について、すこしふれてみよう。

(一) 広瀬が英、仏、独三カ国の軍事視察に出かけたのは、明治三十三年（一九〇〇）三月末のことであり、ドイツからイギリスをまわり、五月上旬フランスに入り、同月中旬にパリ万博の会場をおとずれた。そのころまだ陸海軍の区域はまだ整頓されていないため、ほとんど見学できなかった。しかし、ロシア側の委員・ホメンコ海軍大尉宛の紹介状のおかげで、前後四回会場に入ることができ、また同大尉からもらった出品目録と見聞をまじえて執筆したのがこの報告である。

パリ万博に出品した工廠（軍需品を製造する工場）や軍港は、つぎのようなものであった。

クロンシュタット軍港

ペテルスブルク港

に付属の工場。機械場。諸学校練習所。

水路本部*

海軍省直轄の工場

アブホーフスキー鋼鉄所（各口径の大砲、砲架、砲塔、自動水雷、シャフトなどを製造する）
イジヨルスキー海軍製造所（鋼鉄板、船舶用の機器、ボイラー、水雷艇などを製造する）

*船路、航路の意。

セバストポリ軍港

ニコラーエフ軍港

クロンシュタット軍港は、バルト艦隊に軍需品を供給する“本倉庫”という。この軍港にある工場や学校は、左記のようなものである。

ボイラー工場（修理もかねる）

短艇工場

滑車工場

兵器工場

メッキ工場

製帆工場

電機機関倉庫に付属する工場

潜水学校

ボイラー工場から何を出品したかは不明。滑車（綱・くさり・ベルトなどをかけてまわす、みぞのある車）工場からは、その見本が出品されていたが、広瀬によると記憶にのこるほどすぐれたものを見なかったという。

兵器工場からは、先箒杖（砲身内をそうじしたり、そこに油をぬるための棒。英・Cleaning rod “洗かん”のこと）・電気信号装置など十



リガの700周年博覧会の正門

種類が出品され、短艇工場からは、水雷艇に備える舟艇（ボート）四隻、測量器、艦船信号機などが出品されていた。
セバストポリ軍港からは、兵舎図・艦用の最新の医療器具（眼、耳、歯用など）・負傷者運搬器・ハンモック（士官、水兵用）・病衣類・魚雷の水中進行を自動的に写す機械「発火管につけたもの」などが出品され、ニコラーエフ軍港の電気工場からは、艦内用の電気警報器、時計儀などが出品された。

ロシア海軍部がいろいろ出品したのは、世界にむけてその海軍の進歩をしめすためであるが、広瀬の見方では、海軍の先進国フランスとは比べものにならぬという。

(二) リガ市創立七〇〇年記念に産業博覧会がひらかれ、バルト三国（エストニア、ラトビア、リトアニア）の産物を一堂にあつめた。広瀬は当地方の文物、産業をこまかく観察調査すれば、何かロシア海軍に役立っている物資も多少は発見できないかと思い、ペテルスブルクの駐在監督官・酒井忠利の許可をえて、博覧会場をおとずれた。

しかし、期待に反して、ロシア海軍に役立っているような物品は、ひとつもなかった。広瀬は“掘出物”と出会うことがなく失望した。むかしの航海の展示場においても、そこにあったのは、わずかに商船や遊覧船の模型と若干の文書や海図、図案だけであった。しかし、多少報告して見学したことへの責を果すという。リガ市については、市の沿革その他について腹案があったが、シベリア経由で帰朝する命に接したという。

(三) は八代中佐のバルト海沿岸についての帰朝報告をふまえ、その要点を摘記したものである。バルト海は、軍事上も商業上も、その価値はひじょうに大きい。が、航海上いろいろ不便があつて、その価値を減じているという。第一に一年のうち三ヵ月、海は凍結し、航行できない。結氷の原因は寒気であるが、ほかに北欧諸国南端の河川から清水が流入するため、海水の塩分が乏しい。

塩分濃度がひくいと、船舶の吃水（水面ぎわの線）を大きくせねばならず、所定の荷もつめない。また砂州や暗礁、濃霧、暴風のため、バルト沿岸の港は、その影響をうけている。

レーベリは、ペテルスブルク、クロンシュタット、リガとともに主要な貿易港であり、その輸入額



『ノヴォ・ヴレーミア』紙 (1896・5付)

はロシア第三位である。また当地はバルト艦隊の第二の軍港であり、夏には練習艦隊の停泊所となる。このあと、レーベリの位置・市街・入口・錨地について説明している。

ついでバルト港（レーベリの西四十七露里に位置。旧名・ロゲルヴィク）について言及している。良港に乏しいロシアにとっては、同港は多少一顧の価値ある港という。レーベリと比べると氷結すること少なく、冬はおそく氷結し、春になると早くとける。当港の沿革・錨地・埠頭・灯台などについて述べ、ついで材木と穀物の積出港ウィндаウ（Windau）の沿革と将来にふれている。

さいごにふたたびレーベリ（現・タリン、エストニアの首都）について説いている。当港はバルト海に面したロシアの商業港、軍港のなかでも枢要な位置をしめ、その築港の規模は世界に知られているという。広瀬は商港および軍港としてのレーベリについて材料をあつめようとした。商港については多少材をえたが、軍港に関するものは、記事その他の入手はむずかしかった。一つにはこの地がドイツとの国境にちかく、最近設計の軍港に関するものは警戒が厳重であった。

外国人をみればスパイとみなし、疑しい者は尾行され、尋問された。ロシア側の案内なしで軍港付近をうろろろすることはできなかった。昨年加藤大尉と訪れたときは、ロシア海軍当局の許可をえ、軍港建築部長ニコノヴ少将をたずね、その副官マクシーモヴ少佐の案内をうけることができた。が、外港の防波堤を見学することはできなかった（加藤の見聞記に、『アレキサンドル』三世軍港視察」と題するものがあり、『海軍兵誌』第31号に載っているという）。

そこで広瀬はやむなく、商港を中心にレーベリについて叙述することにし、同港の位置・市街・運河・防波堤・船台などのほか、当市の価値と将来について略述し、軍事に関しては、駐在する陸軍についてすこしふれた。

広瀬は帰国してからもロシア研究に精励した。

かれはロシアの国情、ロシア海軍の実情を知るために、ロシア紙に目を通したばかりでなく、諸書もひもといた。中でもいつも読んでいたのは

『ノーヴォ・ヴレーミア』紙であり、帰国してからも取りよせて読んでいた。小野塚が朝日艦の広瀬の部屋に入ったとき、机のうえに同紙の東とロシア語の本が四、五冊あった。小野塚は『ウィクリー、タイムズ』さえ、読んだりよまなかったりする、というところ、こんなことをいった。

——露国研究を片ときも忘れることができない。ぼくはこの研究によって、かならず何らかの利益を、わが国民に与えることができると思う（小野塚法学博士談「信友広瀬武夫君」）。

広瀬はそのロシア研究がじゅうぶんにまとまらぬうちに亡くなった。

在露時代の広瀬の研究テーマは、ロシア海軍についてである。ロシア海軍の組織（編制）、技能、動員力、兵器、施設などについて知ることである。が、これらはロシアの国家機密であるから、その情報はおいそれと仮想敵国の一士官の手に入るものではない。ロシア側も視察のおり、軍事上重要なものは秘匿し、おしえず、語らず、見せずといった方針であった。したがって広瀬が収集したロシア海軍に関する情報や知見は、ありきたりの、深みのない、うわすべりのなものであったと想像される。

生の情報の補いとして利用したものは、公刊された活字資料（書物）やロシア新聞や『官報』の記事であった。それらを読みこなし、理解するには語学力が要求される。かれはおぼつかない語学力でそれらの文献資料をひろいよみしたり、重要な箇所は辞引を丹念にひいて精読したものである。いまに残る広瀬がロシアにおいて求めた書物は、大きく分けると、語学辞典・文学作品（ゴーゴリ、レールモンツフ、プーシキン、トルストイ、ジュコフスキー等）・旅行案内（モスクワ、ペテルスブルク、フィンランド、セバストポリ、キリフ、シベリア、中央アジア、満州、ワルシャワ、クリミア、カザン等）のほか、軍事関係ではつぎのようなものがある。

『水雷・海事辞典の資料』 一～三	ペテルスブルク	一八八七年刊
『詳解海事辞典』	ペテルスブルク	一八九九年刊
プロトポポフ著『セバストポリ包囲・防戦記』	オデッサ	一八八五年刊
レーエル編『陸海軍百科事典』 一～八	ペテルスブルク	一八八三年刊
カンディエーブ編『ロシア商港とその建築史資料』 二十二巻	ペテルスブルク	一八九七年刊
『ロシア艦隊水雷艇構造図』	ペテルスブルク	一八九三年刊

チェホーウィチ編『ロシア商港とその建築史資料』四巻

海軍省編『海軍幼年学校沿革——一八五二年以降

——卒業者名簿付（一八五三〜九六）』

タゲーエフ編『一九〇一年 軍事年鑑』

ジェーン『ロシア帝国海軍——その過去、現在、未来』（英書）

『軍艦集および一九〇一年海軍便覧』

ペテルスブルク 一八九五〜九九年刊

ペテルスブルク

ペテルスブルク

ロンドン 一八九九年刊

ペテルスブルク 一九〇一年刊

このリストの中に、“水雷”^{*} 関係の本が三冊ある。が、かれが水雷に関心があったのは、士官に仕官後、水雷学校の高等科にまなんだからであらう。

^{*}爆薬を容器につめ、水中で爆発させ、艦船を破壊する装置。攻撃用の魚形水雷（魚雷）と機械水雷（機雷）がある。

あとがき

この稿をむすぶにあたって、広瀬巡遊の地のうち、筆者にとって土地勘があるのは呉淞、上海、香港、シンガポール、マルセイユ、パリ、ベルリン、モスクワ、ロンドン、ササンプトン、プリマス、ニューカッスル、エジンバラ、グラスゴー、リバプール、マンチェスター、ルアーブル、シェルブル、プレスト、ロリアン、ツーロン、ジェノヴァ、ミラノ、エッセン、ハンブルク、ブレーメン、キールなどである。かつてプレスト、ロリアンの地で旧ドイツ海軍のブンカー Bunker（Uボートの防空壕）を見、キール郊外では、Uボートの実物を見学した。広瀬の足跡の一部は、筆者がかっておとずれたことがある曾遊^{そうゆう}の地でもある。

広瀬もまた人の子、異性（ロシア女性）を恋いしたう感情をもっていたようだ。それは恋愛感情だったのか、それとも単なる友情だったのか、はっきりしていない。が、ペテルスブルク滞在中、ロシア海軍の将官らの家に出入りするうちに、その家族と親しんだ。その中にうら若い、年ごろの娘が何人もいた。中でも二十も歳のひらきがある広瀬にたいして、友情以上の感情——つよい好意——親愛感をもったのは、海軍省水路部長で子爵のウラジミール・コヴァレフスキー少将の次女・アリアズナ（十六歳）であった。

広瀬と彼女は、よく手紙や葉がき、写真のやりとりをしていた。広瀬は第二回目の旅順口の閉塞にむかうとき、おなじ戦艦「朝日」に乗り組んでいたふんけいの友・加藤寛治大尉（砲術長）に、アリアズナ宛のさいごの手紙をたくした。それをロシアに送るようたのんだ。その別れの手紙（ロシア文）に何が書かれていたのか。

それはつぎのような内容のものだった。

——不幸にして、貴国とわが国は互いに敵となり、砲火をまみえるに至った。けっきょく、正しいものが、さいごに勝利者となる。おごれる軍国の力をもって、不法の侵略をおこなうもの、それが貴国であることを私はかなしむ。しかし、美しい聖らかな愛に国境はないはずである。私は本日ある重大な任務をおびて前線にむかうことになった。

男子一代の面目（名譽の意）、私はわらいを含んでこの行（出発）にのぼる。三千年の歴史に、一点のけがれを止めたことのない日本帝国の軍人として、私はわたしが愛する国をまもるため、死をとして、私の任務をりっぱに成しとげねばならぬ。おそらく私は永久にあなたと相まみゆる機会はないであらう。

あわただしい間にしたためた、あなたへのこの手紙が、愛するあなたの御手にとどくときは、両国の親交がむかしにかえり、平和な春に、清らかなほえみをもたらすときであらう。さらば、すこやかであれ。

注・『大阪朝日新聞』大正13・5・2より。

広瀬は義姉・春江にあてて出した手紙（判読不能箇所が多い、明治35年中ごろのもの）において、アリアズナからもらった文に、「御前様ハ私ガ最モ燃ユル……」という字句があったことにふれ、惚気る（女性との関係をいい気になって他人に話す）ことがあった。が、戦後、広瀬の手がみは、ロシア大使館をへて、ペテルスブルクに送られ、二、三の新聞にその全文が掲載されたらしい。

広瀬の思いびとは、その後どうなったかは不明である。広瀬とロシア海軍の将官の令嬢についての秘話をはじめて人にかたったのは、当時第二艦隊司令長官であった加藤寛治中将である。大阪朝日の大江素天記者は、同艦を見学班といっしょに訪れたとき、個人的にこの話を耳にした。大正十三年（一九二四）四月二十六日の午後四時ごろのことである。その直話を四月三十日付から五回にわたって『大阪朝日』に連載した。それにはつぎのような長い見出しがついていた。

「白浪に乗って海的美を謳ふの記 司令塔上にロマンスを語る 当年の青年士官と『軍神』の恋 海軍少将の令嬢Ⅱ可憐な男の決心」。

*そのころの意。

加藤は巡洋艦「金剛」に座乗し、瀬戸内海を航していた。艦は右に淡路島、左に友ヶ島をみながら、静かな海のうえをゆっくりと航行していた。その後方には、「比えい」など三艦がつづいていた。大江記者は、加藤の部屋によばれた。

そこはたたみ二畳もないほどのせまい部屋であり、小さなテーブルが一つあるだけだった。加藤は一ぱいの紅茶を用意して待っていた。

——機会があれば、いちど話したいと思っていた。
と、切りだした。

——広瀬はよわよい男だったが、講道館できたえあげて、見返すような立派なからだになった。セントピータスマブルクにいたのは明治三十年六月から三十四年の十月までで（正しくは明治30・9～35・1まで）、日本の若い士官として、ロシアの将官たちと交際している間に、ロマンスがわいた。

アリアズナは、広瀬の死を知るのだが、その後どうなったか、いかなる人生を歩んだものか明らかでなかった。

——尼僧生活にでも入ったか——知りたいと思うが……。
と語ったとき、長官の眼はこころもちうるんでいた。

江戸期の二七〇年間、サムライはひたすら漢学をまなぶことによって、独特の倫理を構築した。いわゆる武士道である。主君や天皇に忠義をつくすこと、勤儉と尚武（儉約と武事、軍事をたつとぶ精神）、節操（正しいと信じる主義）と礼儀、いかに生死すべきかを漢学からおしえられた。儒教論理に基礎をおく、こうした武士道的な考え方は、武士階級が消滅したのちも、明治中期あたりまで、日本人の美德として残っていた。そのような思想の体现者のひとり、広瀬であったといえる。こんにちから観れば、時代錯誤もいいところだが、当時はまだそれは日本社会の一般的な風潮であった。武士道的精神の余薫を感じさせたのが広瀬という一軍人であった。

明治維新後、わが国はひたすら富国強兵、殖産振興策を推進し、欧米列強にならって帝国主義的な国家になっていった。帝国主義は、領土や勢

力をひろげようとする侵略的傾向をいうが、日本の狙いは隣国韓国であり、それを手中におさめようとした。わが国は日清戦争において勝利したことが追い風となり、東洋の一等国をめざした。戦勝が日本の軍事的野心を刺激し、⁽³⁹⁾平和がおとずれても陸海軍の増強をはかった。長いあいだ眠りについていた日本民族が、愛国主義（国家をだいに思うこと）にめざめたのは、戦勝によるものであった。日本人が熱狂的な愛国主義者になってゆくのは、日清戦争後のことである。広瀬もまたそのような愛国者の一人であった。かれは無類の武人、無類の大旅行家、無類のロシアびいき、無類の武士道の具現者として、あの世に旅立った。……

注

- (1) *Guide to China, The Japanese Government Railways*, Tokyo, Japan, 1924, p. 372
- (2) 長田秋濤「洋行案内」(承前)『太陽』第5巻第27号所収、明治32・5。
- (3) *A Handbook for Travellers in India, Burma and Ceylon*, John Murray, London, 1929, p. 741
- (4) 同右。
- (5) 注(3)の二五頁を参照。
- (6) 注(2)を参照。
- (7) 池田三比古編『軍神』広瀬中佐書簡集(非売品)衛藤家、昭和10・5、二二五頁。
- (8) Robert Johnston: *Travel through part of Russian Empire*…… New York, 1816, p. 278~p. 279
- (9) 樋口艶之助談「露国事情」(彼得斯堡^{ペテルスブルグ} 附露西亜人の衣食住)『日露交戦録』第6号所収、明治37・3。
- (10) 注(8)の七九頁。
- (11) 注(9)におなじ。
- (12) 注(9)におなじ。
- (13) 『田中義一伝記 上巻』、一一六頁。
- (14) 同右、一一四頁。
- (15) 注(13)の一一五頁。
- (16) K. Baedeker: *Russia*, 四五六頁。

- (17) 同右、四五―一頁。
- (18) 注(16)の九頁。
- (19) K. Baedeker: *Paris and its Environs*, 1913, p.8
- (20) パリ万博の会期は、四・一四―一一・一二までであった。
- (21) 注(16)の五五頁。
- (22) 注(16)の七四頁。
- (23) 注(16)の二七〇頁。
- (24) 渡辺幾治郎著『日本近世外交史』、二九一頁。
- (25) 斎藤清太郎著『露西亞史講話』、四〇九頁。
- (26) 『東洋戦争実記 第19編 北清戦史 上』博文館、明治34・4、一三三頁。
- (27) 田中萃一郎撰『東邦近世史 下巻』、六四〇頁。
- (28) 英 修道著『明治外交史』、一八一頁。
- (29) 注(25)の四一〇頁。
- (30) 注(24)の三二六頁。
- (31) 注(24)の三二六頁。
- (32) 注(28)の一八三頁。
- (33) 注(28)の一九一頁。
- (34) 太陽増刊『滿韓大観』、明治37・6。
- (35) 注(28)の一九九頁。
- (36) 『第二回 旅順閉塞隊秘話』、一頁。
- (37) 『写真画報 第1巻』博文館、明治37・1。
- (38) 『軍神広瀬中佐』、七七頁。
- (39) M. Montgomery McGovern: *Modern Japan, its Political, Military, and Industrial Organization*, 一七六頁。

広瀬武夫の略年表

西暦	和暦	事 項	関連することから
一八六八	明治元年	大分県直入郡武田町で、士族・重武、母・登久子の次男として生まる。	上野において彰義隊と官軍たたかう。
一八七一	明治4 5	父は裁判官として、単身任地を転々とする。	廃藩置県の実施。中央集権制の確立。
一八七五	明治8・4	母死去。33歳4カ月。	廃刀令だされる。地租軽減をもとめて、各地で農民一揆おこる。
一八七六	明治9・4	竹田小学校にまなぶ。かたわら森 玉彦の私塾にかよ	十月、神風連・秋月・萩の乱おこる。
一八七七	明治10・10	う。のち攻玉社に入る。	西南戦争おこる。
一八七九	明治12・9	一家、比だの高山へ移る。高山煥章学校に転学。	グラント米大統領の来日。ボアソナード、民法起草に着手。
一八八二	明治15・9	兄・勝比古、海兵に入学。	伊藤博文、憲法調査のため渡欧。
一八八三	明治16・4	煥章学校を卒業。代用教員として同校に勤務。	伊藤博文の帰国。
一八八五	明治18・6	岐阜の草陽中学校へ臨時入学。	太政官制を廃して内閣制を採用。第一次伊藤内閣の成立。
一八八六	明治19	攻玉社（新銀座）に入学。	
一八八九	明治22・4	海兵に落第。	大日本帝国憲法の発布。第一次山県有朋内閣の成立。
一八九〇	明治23・9	同校の追加入試に合格。攻玉社を卒業。	第一回帝国議会の開催。教育勅語の発布。
一八九一	明治24・6	海兵に入学。同期六〇名。同級生に岡田啓介がいた。	大津事件おこる。内村鑑三の不敬事件おこる。
一八九二	明治25・2 3	父、退官。	久米邦武、論文「神道は祭天の古俗なり」により、大学から追放される。
	4	海兵を卒業。海軍少尉候補生となる。軍艦比えいに乗りくみ、遠洋航海に出る。ホノルル、ヒロ、アッピア、スバ、グアムに寄港。	
	6	品川に帰着。	
		品川に乗りくむ。	
		比えいの分隊長となる。	
		濠洲航海の途に上る。	
		メルボルン、ヌメア（ニューカレドニア）、マニラ、香港に寄港。	
		品川に帰着。	
		筑波の分隊長となる。	

一八九八	明治31・9 〃 11	9・28 9・26 9・22 9・21 9・19 9・18 9・13 9・12 9・2 8・29 8・24 8・21 8・18 8・14 〃 〃 〃 〃 明治30・3	ロシア人宅に転居。 フランス語の学習をはじめ。	第三次伊藤内閣の成立。限板内閣の成立（はじめての政党内閣）。 列強の中国租借があいつぐ。ロシア、旅順・大連を租借。
一八九三	明治26・5 〃 〃 12 10	水雷学校の高等科学生になる。 同校卒業。成績は第一位。 八代六郎宅でロシア語をまなぶ。	水雷学校の高等科学生になる。 同校卒業。成績は第一位。 八代六郎宅でロシア語をまなぶ。	
一八九四	明治27・7	日清戦争に従軍。兵器弾薬、糧食の輸送などにあたる。	日清戦争に従軍。兵器弾薬、糧食の輸送などにあたる。	
一八九六	明治29・4	磐城の航海長に転補。	磐城の航海長に転補。	朝鮮で東学党の乱（農民の反乱）おこる。日清戦争おこる。 山県・ロバノフ協定（朝鮮を共同保護下におく）。
一八九七	明治30・3	海軍軍令部に出任。 海軍軍令部諜報課員に転補。 ロシア留学を命じられる。 “さつじ”号で横浜出帆。 吳淞でP&Oのエルネスト・シモン号に乗りかえる。 香港着。 サイゴン着。 シンガポール着。 コロンボ着。 ボンベイ着。 スエズ着。スエズ運河に入る。 ポートサイド着。 マルセイユ着。 パリのリヨン駅に着く。二泊。 パリを発し、ロシアにむかう。 ベルリン着。二泊。 ベテルスブルクに着く。八代六郎少佐の出迎えをうける。 ロシア語の学習をはじめ。八代少佐とおなじ建物の部屋を借りる。	海軍軍令部に出任。 海軍軍令部諜報課員に転補。 ロシア留学を命じられる。 “さつじ”号で横浜出帆。 吳淞でP&Oのエルネスト・シモン号に乗りかえる。 香港着。 サイゴン着。 シンガポール着。 コロンボ着。 ボンベイ着。 スエズ着。スエズ運河に入る。 ポートサイド着。 マルセイユ着。 パリのリヨン駅に着く。二泊。 パリを発し、ロシアにむかう。 ベルリン着。二泊。 ベテルスブルクに着く。八代六郎少佐の出迎えをうける。 ロシア語の学習をはじめ。八代少佐とおなじ建物の部屋を借りる。	

一八九九	明治32・2	陸軍武官・伊東圭一中佐、肺病により死去。 プーシキン街の八代の家に移る。 新しい下宿に移る。 ロシア留学を免ぜられ、ロシア駐在武官となる。 カスピ海、黒海巡察の旅に出発。 ペテルスブルクに帰着。 エカテリニンスキー・カナル96の5号に転居。 コヴァレフスキー少将の次女アリアズナ（16歳）を知る。 林 董公使の帰国。	治外法権撤廃。
一九〇〇	明治33・2・31	英仏独、バルト海岸視察の旅に出発。 ペテルスブルクに帰着。海軍少佐に昇進。 小村公使のあと珍田捨己が着任。	北清事変おこる。義和団の乱により、日本出兵。 第四次伊藤内閣の成立。
一九〇一	明治34・4	父・重武の死。 リガ市創立七〇〇年記念の産業博覧会を見学。のちその報告書を発表。 帰朝を命じられる。	第一次桂内閣の成立。
一九〇二	明治35・1・16	ペテルスブルクを出発し、帰国の途につく。イルクーツクまでシベリア鉄道で行き、その後バイカル湖をソリで横断。ふたたび鉄道によりスレチェンスクに出、それよりソリにより、シベリアを踏破。 ハバロスク到着。総督府を表敬。 ウラジオストクに到着。貿易事務官・領事、川上俊彦宅に十日間やっかいになる。 ウラジオストクを出発。ハルビン、奉天、大連をへて旅順にむかう。	日英同盟の締結。シベリア鉄道の開通。

一九〇四	明治 37・2・10	ロシアに宣戦布告。 第一回旅順口閉塞作戦に参加、港口灯台下に船を沈める。 第二回閉塞のため福井丸を沈める（午前4・30）。 離船後、敵弾にあたり戦死。 海軍葬。青山墓地に葬る。海軍中佐に昇進。	日露戦争の開始。日韓議定書の調印（日本韓国での軍事行動の自由をうる）。10月、バルチック艦隊、ドッガー・バンク（北海の魚礁）で日本の艦隊と誤認して、イギリスの漁船団を砲撃（英露関係緊張する）。
一九三五	昭和 10・5	豊後竹田（大分県竹田市）に「広瀬神社」が創建される。	陸軍の内部対立の激化。 政府、思想統制を強化。
	〃 4・13 〃 3・27 〃 2・24 〃 5・3 〃 4・22 〃 4・6 〃 3・28 〃 3・19	旅順到着。アレクセーフ総督を表敬。同夜、シルカ号にのり日本へむかう。 東京に安着。 郷里の竹田に帰る。 ロシア駐在を免ぜられ、「朝日」の水雷長兼分隊長となる。 海軍省でシベリア・満州旅行談を講演。	

参考文献

〔一般書〕

田中萃一郎撰『東邦近世史 下巻』丸善株式会社、明治38・6。
大庭柯公著『露西亞に遊びて』浜井松之助、大正6・9。

『世界地理風俗大系 第一巻』新光社、昭和5・3。

『 』 第九巻』新光社、昭和5・12。

大竹博吉訳『ウイッテ伯 日露戦争と露西亞革命 上』南北書院、昭和6・6。

『第一回 旅順閉塞隊秘話』東京水交社、昭和8・4。

池田三比古編『軍 広瀬中佐書簡集』〔非売品〕衛藤家、昭和10・5。

ボクローフスキイ著 岡田宗司訳『ロシア史』学芸社、昭和11・8。

斎藤清太郎著『露西亞史講話』明治書院、昭和11・10。

渡辺幾治郎著『日本近世外交史』千倉書房、昭和13・10。

外務省編纂 外務省蔵版『日本外交文書 第30巻 自明治30・12 日本国際連合協会発行、昭和31・3。

『田中義一伝記 上巻』田中義一伝記刊行会、昭和33・5。

英修道著『明治外交史』至文堂、昭和35・5。

島田謹二著『ロシアにおける広瀬武夫』弘文堂、昭和36・6。

『広瀬武夫全集 上下巻』講談社、昭和58・12。

〔雑誌〕『写真画報 第1巻』博文館、明治37・1。

『東洋戦争実記 第19編 北清戦史 上』博文館、明治34・4。

『日露交戦録 第4号』第8号』春陽堂発行、明治37・2。

『 』 第9号』春陽堂発行、明治37・3・8。

『 』 第13号』春陽堂発行、明治37・5。

『太陽』第5巻第27号、博文館、明治32・5。

『太陽』第10巻第4号、第5号、博文館、明治37・4・5。

博文館創業第17年記念太陽増刊『滿韓大観』第10巻第9号、博文館、明治37・6。

『東洋協会報』第43号、刊行年不詳。

『国家学会雑誌』第19巻第10号、明治38・10。

博文館發行 日露戦争実記『軍神広瀬中佐』臨時増刊 第9編、博文館、明治37・4。

『東京朝日新聞』明治37・2〜3。

『中外英字新聞』第11巻第4号、国民英学会出版局、明治37・4。

『大阪朝日新聞』大正13・4・30〜5。

新聞集成『明治編年史 第10巻、第12巻』財政経済学会、昭和11・2〜4。

『外国紙、外国雑誌、旅行案内、一般書など』 The New York Times 1904・2

旅行案内、一般書など

The Japan Weekly Mail 1897・8

“ 1904・2

L'Illustration 1904・5・21

The Russo-Japanese War, fully illustrated, No.1, Kinkido Publishing Co and Z. P. Maruya & Co., 1904

Élisée Reclus: *Nouvelle Géographie Universelle*, Librairie Hachette et C^{ie}, Paris, 1881

K. Baedeker: *Great Britain*, Karl Baedeker, Publisher, Leipsic, 1887

“ : *Russia*, Karl Baedeker, Publisher, Leipsic 1914

K. Baedeker: *Berlin and its Environs*, Karl Baedeker, Publisher, Leipsic 1923

Guide to China, Japanese Government Railways, Tokyo, Japan, 1924

A Handbook for Travellers in India, Burma and Ceylon, John Murray, London, 1929

K. Baedeker: *Northern Germany*, Karl Baedeker, Publisher, Leipsic, 1904

K. Baedeker: *Northern France*, Karl Baedeker, Publisher, Leipsic, 1909

“ : *Paris and its Environs*, “ 1913

D. Mackenzie Wallace: *Russia*, Henry Holt and Co., 1881

Robert Johnston : *Travels through part of the Russian Empire and the Country of Poland*, Publish by David Longworths,

New York, 1816

W. Montgomery McGovern: *Modern Japan, its political, military and industrial organization*, T. Fisher Unwin, London, 1920